
ほむら「魔法少女？」なのは「うん、魔法少女」

ニフラム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ほむら「魔法少女？」なのは「うん、魔法少女」

【Nコード】

N5211V

【作者名】

ニフラム

【あらすじ】

前にss速報で友達が投稿したものです。

まどか マギカとリリカルなのはのクロスです。

感想等いただけると、

友達も私も嬉しいです。

第0話 『プロローグ的な?』

いつか誰かが言った。

目の前にある壁は意外に簡単に壊せるものなんだって。

世界の全ては偶然でできてるんだよ。

と、ある人は言った。

偶然の出会いで始まった魔法少女な生活。

それは、悲劇の始まりでしかなくて。

何度も同じ時を繰り返し。

永遠ともいえる迷宮に迷い込んだ私。

たった一人の親友の、たった一つの願いを叶える為に。

私は戦い続けてきた。

何度も何度も、魔女と戦い、必要とあらば魔法少女とも戦った。

そんな永遠の迷宮を抜け出せず、【諦め】そんな二文字が浮かんで
いた私の元に訪れたのは、

違う世界の魔法少女との出会い。

第1話 『魔法少女』

まどかを魔法少女にさせない。

してしまつたら、QBの思ふ壺だ。

そんなことさせない。

絶対に。

まどかと交わした約束だから。

私の唯一無二の友達だから。

だから、絶対に――。

私はまた、病院のベッドで目を覚ました。

「……まどか」

また。

また。

また！！

また駄目だった。

私は握り締めた拳を、壁にたたきつけた。

何度やっても、勝つことが出来ない。

ワルプルギスの夜。

私が勝てないせいで、まどかが魔法少女になって死んでしまう。

「なんで、なんでよ……」

「どうかしたん？」

「え？」

不意にかけられた声に、素っ頓狂な返事を返す。

「急に壁叩く音が響いたもんやから、何が起きたかって焦ったんよ？」

「ごめんなさい」

私に話しかけてきたのは、茶髪の少女だった。

足が不自由なのか、車椅子に乗っていた。

今までに一度もなかった出会い。

でも、関係ないこと。

「なんかあつたん？」

「別に、何でもないわ」

「……そんなら何もいわへんよ。でももし、なんかあるんなら電話番号教えておくから、気兼ねなくかけてきてええよ」

少女はそう言い、電話番号と名前を書いた紙を私に手渡し、部屋を出て行った。

……。

「ふざけないで。貴女なんかに来ることなんて、何にもない」
その紙を握りつぶしてポケットへと突っ込む。

……？

周りを見渡して、やっと。

私は異変に気がついた。

いつもと違う病室。

ベッドとかも、今までとは全然違っていた。

どういうこと？

なんで？

「え？」

さらに私を驚かせたのは、

転校する中学校が、私立聖祥大附属中学という、まったく違うところだったということ。

明日には転校。

私がよく理解できないうちに時間は進み、私は中学校へと向かうことになった。

私に話しかけてくる人にまどかの事を聞く。

答えは揃って「知らない」。

初日から学校を早退などという手を使うわけにもいかず、私は放課後、クラスメイトの誘いの手が伸びるより早く、教室を飛び出した。

昨日から全てが変わった。

会おうはずのない少女に出会い、

知らない病室にいて、知らない学校。

極めつけは、私にソウルジェムがないことだった。

異変に気づいて時間を戻そうとしてみたけれど、

力が使えないどころか、指輪状態のはずのソウルジェムがなかった。

なんで？

どうしてなの？

どこ、どこにいるの？

まどか……。

夜になっても、私はふらふらと路頭に迷っていた。

両親はいないけれど、家がないわけじゃない。

けれど、私は何もなかった。

救いたい人も、救いたい人を救う為に手に入れた力さえも。

そんな時、近くで爆発が起きた。

それと同時に世界から光が消えた。

「結界？ 魔女？！」

私に力がないせいか、魔女の存在を感知したりも出来ない。

行っても意味ない……。

でも、もし相手が魔女なら、巴マミや、美樹さやか、佐倉杏子が戦っているはず。

そんな希望ともいえない何かを抱いた私は、その場所へかけていった。

「え？」

しかし、私の予測や、希望はいとも簡単に打ち砕かれた。

「ジュエルシード回収完了」

「初めてにしては上出来だよ。なのは」

「にはは。そうかな」

私の目に映ったのは栗色の髪の少女と、

QBに似た感じだけれど、全く違う。感情を持った生き物。

「……あ」

私に気づいた少女と、生き物は同時に声を上げた。

「今の、見た？」

生き物が発した言葉に、私は頷く。

声を出そうにも、出せなかった。

「ユーノくん。見られちゃ駄目だった？」

「駄目ってわけじゃないけど……魔法を見られたりするの——」

魔法？

今、あの生き物は……。

「ねえ……」

「なに？」

「貴女は魔法を使えるの？」

私の言葉に答えたのは少女ではなく、生き物だった。

「うん。なのはは、魔法少女だからね」

魔法……少女？

生き物が口にしたのは、私になっているはずで、
大切な人になって貰いたくない、魔法少女。だった……。

第2話 『誰もいない世界』

私は高町なのはの好意を受け。

というよりは色々話を聞くために話しに乗って、

高町なのはの家に泊まることになった。

「じゃあ、貴方はQBを知らない？」

「僕はQBどころか魔女というのを知らないし、

グリーフシードや、ソウルジェムも聞いたことが無いよ」

この子が嘘を言ってるって可能性もあるけど……。

でも、実際に高町なのはには、ソウルジェムが無い。

普通の人間であって、抜け殻じゃない。

「ねえ、ほむらは魔法少女じゃないんですか？」

「魔法少女……いえ、だったけど正しいわ」

今、私はただの少女だものね。

「だった？ リンカーコアが砕かれたとか？」

「リンカーコア？」

私が不思議そうに訪ねると、ユーノスクライアが頷く。

「こっちのことも色々話すよ。」

まず、リンカーコアというのは、君が言うソウルジェムに近い」

「え？」

「と、言っても。それが砕けたら死ぬだとか、それが本体だとか。そういう類の近いではなく、魔力の塊であるってこと」

魔力の塊？

でも……。

「そんなものを持っていたら、大変なことになるんじゃない？」

「いや、ならないよ。リンカーコアは人畜無害だ」

「実際、私も今の今まで魔法少女になれる素質があるなんて知らなかったですから」

そう微笑む高町なのは。
なんだろう。

この子を見terると……。

「どうかしたの？」

「あ、いや。ごめんなさい。じゃあ、高町なのはが魔女になることは無いのね？」

「もちろん。僕はそう断言するよ。もし、魔法少女が君の言う悪い魔女というものになるのだとしたら、
ぼくはなのは……いや、誰一人として魔法少女にはしない。したくもない」

コーノスクライアが私の目を見つめて言う。

逸らせない。

僕の目を見る、僕は嘘はつかない。

全て真実だから。

そう、言いたいよね。

「解った、私の負けよ。貴方のことを信じるわ」

「え？ 今まで信じてくれなかったんですか？」

「ふふっ、私は少し疑り深い性格なの」

「そうか、僕がQBというものに似てるといわれてちょっと心配だったんだ。ありがとう」

もちろん、信じるわけが無い。

幾度と無く、私はQBの甘く優しい言葉に騙されるみんなを見てきた。

貴方が言っていることに間違いが無いのだとしても、もしかしたら何かを省いて話し、解釈の違いを生み出して騙している。

私にはそう思えてしまう。

特に、その自分が被害者というような口調が私は嫌い。心配だった。ありがとう。なんて言葉が。

……。

「高町なのははなんで敬語使うの？」

「へ？　だ、だって、その格好」

ああ、そういえば着替えてなかった。

「ほむらさん中学生ですよね？」

「え？　ええ。そうだけど？　貴女も——」

「私は小学生ですよ？」

え？

「あ、貴女、小学生なの？」

「は、はい……」

驚いた。

出来た子だから、つい同じ歳。

少なくとも中学生だと思った。

「まあなんにせよ、敬語じゃなくて良いわ」

「え、で、でも……」

「そこまで馴染むつもりも無いから。適当で良いってこと」

「駄目だよ——」

?!

「何で急に怒鳴るの？」

「適当で良いなんて悲しいこと言わないで」

っ……。

そうか……。

「ほむらちゃんが馴染むつもりが無いとしても、私はもっと仲良く——」

「ふざけないで」

「え？」

「貴女に何が解るのよ。たったついさっき知り合い、少し話しただけの貴女に。」

私は馴染む気は無いと言ったの。今だって、貴女達から情報を貰う為にここに居るだけ」

「ほむ……」

「もう良い、私は帰るわ」

「え？ ほむ——」

最後まで言わずに、私は高町なのはの部屋の窓から飛び出す。

……身体能力に問題はないみたいね。
着地も問題なかった。

「まどかも、バマミも、美樹さやかも佐倉杏子も。

誰一人としてこの世界にはいないのかしら……」

文明レベル的に見れば、過去の世界っていうのが正しい。
でも、だとしたら私の能力が消えた理由が掴めない。

……なんで力が消えたか。

使いすぎたのか。

それとも、望みすぎた代価か。

どちらにしろ、まどかはこの世界にはいない。

その代わりに。

ええ、まるでその代わりと言わんばかりに

あの高町なのはという少女がいる。

あの目、あの雰囲気。

まるで、まどかのよう。

馴染む気は無いといった私に怒鳴って、

私と親しくしようとする、優しさの強情さ。

ふざけないでよ……ふざけないで。

夢なら覚めなさいよ。

でないなら、元の世界への戻り方を教えなさいよ。

まどかを助きたいのに、なんでよ。

何度もまどかを死なせてしまった代償なの？

まどかを救えないお前はまどかに会う資格などない。

そういう……ことなのね。

「まどか……」

私の頬を伝う涙など当に涸れ果てた。

……。

でも、でももう。

まどかを失うことは無い。

まどかはこの世界に、いないのだから……。

だからこれで良いのかしら。

力が無いのだから、

戻る方法もわからないのだから。

仕方ない……こと。

諦めるしか……。

第3話 『偶然と必然』

「今日はどうでしょうか？」

「ええ、どうせ暇ですからお付き合いします」

私に話しかけてきたクラスメイトにそう返す。

クラスメイトにそんなことを言うのはいつ以来なのだか。

私の薄れた過去の過去のそれ以上に過去の記憶など、

とうに消え去った。

何回繰り返したんだろうあの1ヶ月。

もう……。

昨日の今日でまたまどか達のことを……。

……。

「ごめんなさい」

「え？」

「会わなければいけない人がいるの。やっぱりまた明日で良いかしら。」

明日なら確実に付き合えるわ」

「……仕方ありませんわね」

「それで、聞きたいことがあるの」

「聞きたいこと？」

「ねえ、アリサちゃんはどの——あ」

「ん？ どうし——」

「どうして、中等部の人がここに？」

流石に直接学校に来たのは間違いだったわ。

「——待つて」

私が踵を返すと、高町なのはが私の腕を掴む。

「なのはの知り合いなの？」

アリサと呼ばれた金髪の少女が首をかしげる。

「うん。そうなの。だから、また明日ね」

「う、うん」

高町なのはの知り合いの少女達は私達を手を振って見送る。
でも、どこか私に疑いを持っていた。

あの金髪の女の子だけは。

まるで、バマミのよう。

疑うだけで、私の真意に気づいてくれなかった。

あの女に……。

でも、その彼女も……いない。

「どうして？」

「え？」

「どうしてあそこにいたの？」

公園のベンチに腰掛けた私達。

最初に言葉を発したのは高町なのはだった。

それに私は、聞き返し聞かれ、答えた。

「貴女に、謝ろうと思って」

「謝る？」

あれ？

「何で聞き返すの？」

「それは。だって、ほむらちゃんの言ったことは間違っていないから」

「高町なのは……」

そう言った彼女は落ち込んでいた。

明らかに間違っていたのは、私なのに。

「だって、ほむらちゃんの事情も知らないのに、

私は色々自分勝手だった。ごm——」

「謝らなくて良いわよ」

「でも」

「確かに、貴女は私のことを知らない。

昨日会ったばかりだし、それも偶然で、同じ学校でなければ、年齢
だって違う。

要するに、無関係に等しい」

「それは違うと思う」

「え？」

「無関係なんかじゃないよ。

貴女と私が出会ったのは偶然かもしれない。

でも、貴女がああした後、私の家に来たのは偶然？

今日、いまここで私と話してるのも偶然？」

「ええ、そうよ。貴女が偶然魔法少女で――」

言葉が止まった。

私が今ここにいるのは、なんで？

偶然？

偶然、彼女に謝罪したいと思い、

偶然、クラスメイトに小学校の場所を尋ね、

偶然、彼女と今。ここにいます？

「ほむらちゃん」

「なに？」

「世界はね？　きつと偶然で出来てるんだと思うの」

「え？」

世界が偶然で出来てる？

「必然はどこにあるのよ」

「それは、言葉。概念……かな」

小学生なの？

本当に……。

「偶然の出会い、偶然の思い、偶然の行動。

全てに偶然って言えるんだと思うんだ。私は」

「……」

「でも……でもね？」

？

私の手が、高町なのはの暖かさを感じ、

驚いて彼女を見ると、彼女もまた、私を見ていた。

「偶然が幾つも重なって出来た結果。それが必然だと思う」

「偶然が重なった結果？」

「今貴女がここにいること。それは偶然の重なった結果で、つまりは偶然なんだけど、たとえても、これは必然的なこと」

彼女自身も自分の言葉を理解できていないらしく、

「やははっと笑い、「ごめん、意味わからないね」と呟いていた。風が私達を撫でる。

なぜだろう。

彼女はなぜ、そんな事を言えるのだろう。

「ねえ、高町なのは」

「なに？」

「どうしても救いたい人がいて、でも、何度やっても助けられない人がいるの。

その人はどうしたら良いと思う？」

私の問いに、高町なのはは困惑し、考え。

やがて口を開いた。

「諦めない。救う努力をし続ける」

「でも、偶然の重なりで、それは必然なんですよ？」
そう。

必然なら救うことなど出来っこない。

「でも、偶然だよ。必然なんてものは無いんだよ。

そんなのは、私達が勝手に決め付けちゃった、偶然の集束地点。そこもまた、偶然なんだよ？」

「じゃあ、助けられるの？」

「うん。偶然は偶然で助けられるよ。きっと」

そう微笑んだ高町なのは。
やっぱり、似ている。
まどかに、似てる。

もしも、高町なのはが私達の世界にいてくれたら。
いてくれたらきっと、まどかを救えたかもしれない。
「え？ ほむらちゃん？」
でも、もう、その世界には帰れない。

どうしてだろう。
なんでだろう。

こつも、私は駄目なことを考えるのだろう。
帰れても、彼女がその世界に来ることは無い。
所詮は人の欲。
私のそれもまた、希望、願いになっただけ。
そんな願い、意味無いのに。

「?!」

「ほむらちゃん、平気？」

「まどか？」

「え？ いや、わー」

「まどか、ごめんなさい。救いたくて、手を伸ばしても貴女には――」

「……」

目の前に突然現れたピンク色の髪の少女。

鹿目まどか……。

私が救いたくて、大切な存在。

「うつん、きっと大丈夫だよ」

あつ……。

高町なのは……。

「救いたくて伸ばしたなら、きつと届く。届かないはずは無いよ」
私の前にいたのはまどかではなく、高町なのは。

彼女が、私に抱きついてきていた。

「ほむらちゃんのこと、私は知らない。

ほむらちゃんが言った、まどかつて人も知らない。

その子がどんなことになって、どう救われたのか……も。

でも、1つだけ言える。

あなたのその想い、その願い。

強い心があるならきつと、救えるはずだよ。

もし、救えないのなら、偶然が足りないんだと思う」

「どうしても、無理、もう駄目だ。諦めそうになったら私を呼んで。

私の名前、高町なのはではなく、なのはって呼んで」

なのはが微笑む。

でも、でも……。

無理。

無理なの。

もう……遅いのよ……。

私は魔法少女以前の私のように泣きついてしまった。
みつともない姿を、高町なのはに晒してしまった。

貴女達の優しさはすごい。酷い。

私を苦しめる……。

でも、ありがとう。

貴女達の優しさは、心地良いから。

戻れない世界の鹿目まどか。

今いる世界の高町なのは。

似てるけど、違う2人。

でも、私は……。

願うなら、高町なのはを守りたい。

救えないまどか。

でも、この子は傍にいて、触れられるから。

だから、守りたい。

失いたく、ない。

第4話 『無力な自分』

彼女の優しさに触れてから数日。

私は彼女のジュエルシードという宝石を集めることに協力していた。協力と言っても、探して見つけたらなのは達が来るまで誰も触れないようにする。

そんなことしか出来ない。

ジュエルシード。

それもまた平和的なものではなかった。

むしろ、QBに近いものだった。

要求にこたえて力を貸す。

でも、借りた本人は暴走して凶暴な破壊者となる。

魔女のように、人を呪うのではなく、物理的に。

想いを利用するのは、QBと同じ。

でも、これは生きていないけど、QBは生きている。

この違いがあるのに。

とても、意味の無い違い。

「ほむらちゃん、協力してくれてありがとう」

「気にしないで。したくてしてることだから」

それに……ボロボロになる貴女を見ていることしか出来ない私だから。

せめて、足で探すくらいは私がしてあげたい。

翌日

私達は、月村すずかの家に来ていた。

「ほむらさんって髪綺麗ですよね」

「すずか、会うたびに言っでない？」

「だって、事実だし」

「ありがと、でも貴女達も綺麗よ」

「あ、ありがとうございます」

私はなのはと親しくするうちに、

月村すずか、アリサ・バニングスの2人とも親しくなった。

最初のほうは少しばかり気が引けていたけど、
接していくうちに仲良くなっていった。

私は長い間、人との接触を避けていたから、
高町なのはを含め、3人も友達と呼べる存在が増えたことは、
嬉しかった。

アリサ・バニングスは美樹さやか

月村すずかは、志筑仁美に近い。

もしかしたら、人や世界が変わっただけで、

性格とかは固定されている……。

馬鹿ね。

まどかはまどか。

高町なのはは高町なのは。

それ以上でもそれ以下でも、それ以外でもない。

ねえ、そろそろ君のことを話してくれないか？

え？

君が、どういった魔法少女か。教えてくれないか？

君が教えてくれたのは、ソウルジェム、魔女。そしてインキュベーターのことだけ

ただの魔法少女よ。魔女を倒すだけの機械

機械？ 君は生きているだろう？

言ったでしょ？ ソウルジェムは魂そのもの。

つまり、私達魔法少女の本体がソウルジェム。私達の体はただの器で、生ける屍同等よ

……

そう言うと、念話が途切れた。

私自身にも魔法を使う素質があるらしく、

何かと便利な念話だけは方法を聞いた。

私達の世界とは対して違いが無い、ただの念話だけれど。

すると、甲高い音が響いた。

私と、高町なのは、ユーノ・スクライアだけにしか聞こえなかった。

つまり、ジュエルシード。

「ごめん、ほむらちゃん、2人をよろしく!!」

任せて、気をつけてね。高町なのは

「ああ、ユーノくんどこいくの?!」

ユーノが自然な感じで林へと駆けていく。

それを高町なのはが追いかける。

「私達も——」

「大丈夫、すぐ戻ってくるわよ。それより、こんな一杯猫が——」

音が消えた。

多分、ユーノスクライアが結界を張った。

これで私に出来ることは……。

「どうかしたんですか？」

「え？」

「あ、いや、その……なんか寂しそうな目をしてたので」

寂しそうな――。

「ふふっ、気のせいよ。それより――」

私達が談笑している間、高町なのはは戦っていた。

そして、私は気づけなかった。

こんなに近くにいたはずなのに、彼女の危機に。

2時間ほど経っても戻らない高町なのはを心配し、私達のはなが向かったほうへ向かう。

「……?!」

「ほむらさ……なのは?!」

アリサ・バニングスが倒れている高町なのはに駆け寄る。

な、にがあつたの？

魔法少女。別の魔法少女が居たんだ

……敵なのね

解らない、ただ、ジュエルシードを狙ってるみたいだ……ほむら？

「月村すずか、アリサ・バニングス。高町なのはをお願いできる？」

「え？」

「傍にいてあげたいけど、家の用事が入っちゃって」

「それなら、平気です。目を覚ましたら連絡しますね」

「——お願い」

待つて！！ どこに——

どこでも良いでしょ。私の勝手よ

私は月村すずかの家から駆け出した。

無力だ。

無力だ。

私は。

守るって決めてたのに、あんなことになってるなんて。

外傷は見えなかったけど、相手が魔法少女なら傷つかないダメージも可能。

許さない、私を許さない。

許さない、高町なのはを攻撃した魔法少女を、ゆるさない！！

第5話 『フェイトとなのは』

なのはがやられてから数日。

私は火薬など、爆弾に必要なものを集め、

そして、完成させた。

「火薬を混ぜて——出来た」

私に魔法は無い。

でも、元々私は魔法攻撃ではなく、

銃など、現実の武器を利用した戦い方。

普通に戦えるじゃない。

ただ、実装の制限があるのが問題。

それに、持ちすぎて重くなるって言うのも。

でも、文句は言えない。

剣と、爆弾しかないわね。

銃は拝借するわけにはいかないし。

それにしても、高町なのは家ってなんなのだろう？

剣道場があるし、真剣まで置いてあった。

……魔法少女を叩きのめして、

高町なのはが目を覚ましたら聞いてみよう。

だから、だから。

今は、魔法少女を狩るのが私のやることやるべきこと。

……？！

ジュエルシードの反応。

ユーノ・スクライアの言う通りなら、ジュエルシードの傍で待ってれば……。

私は、反応があった海鳴市の公園に来ていた。

「ここから反応があった」

「フェイト、大丈夫かい？」

「大丈夫……？！」

金髪の黒い服装……。

「アンタ誰？！」

狼？

犬？

どっちでも良いけれど、

喋るってことは普通ではないってことね。

フェイト。

フェイト。別に知る必要も無かったけれど。

知ってしまったから。

「暁美ほむらよ。貴女達？ 高町なのはを攻撃したのは」

「答える義理は無い！！」

……。

「もう一度聞いわ、高町なのはを傷つけたのは……貴女達？」

「——そう。と答えたら？」

「貴女も彼女と同じ目に合わせる。いいえ、それ以上に」

「フェイト、さがって、ここは私が——」

「魔獣に用事はない、あるのは魔法少女である、貴女だけ」

喋る獣に爆弾を投げつけ、金髪の魔法少女フェイトに接近する。

「アルフ——っ?!」

「自分の心配しなさい」

爆発して吹き飛ばされた魔獣の名を呼ぶフェイトに、高町なのはの家で拝借した剣で斬りかかる。

「邪魔しないで、ジュエルシー……うあっ?!」

「煩い、邪魔なのは貴女。なのはに攻撃したのはなぜ!」

剣は、斧らしき武器でガードされる。

でも、爆弾までガードは出来ない。

「ジュエルシードが必要だから。あの子がそれを手に入れるのを邪魔した。だから攻撃した」

……。

「正当な理由に見えるけれど、間違いが無いように教えて。

高町なのははジュエルシードを使う為に集めていない。貴女はどう？ 使う為に集めていない？」

「そんなこと、貴女には関係ない」

「そうね、私はただ高町なのはを傷つけた貴女が憎いだけ。許せないだけだから——」

「まって、ほむらちゃん!!」

え？

なんでここに……。

向かい合うフェイトと私。

その右方向から、高町なのはが叫んだ。

「どうして、貴女はジュエルシードを集めているの?!」

どうしてそんなに、悲しい顔をしているの?！」

「答えたら? フェイト。貴女に聞いているのよ。高町なのはは」

「フェイト!! 答えなくて良い!!」

……。

「どうして、話を聞かないの?」

「えっ?!」

「アルフ!!」

一瞬で魔獣の前に、私が立ち上がる。

「攻撃はしても話はしない、間違ってる、間違ってるよ、そんなのは!!」

私の振り下ろした剣がアルフを切り裂く前に、

高町なのはが大声で私を止めた。

「ころしちゃ駄目!!」

「高町なのは……」

「——あのジュエルシードをかけて私と戦って」

戦う？

高町なのはが、武器であるレイジングハートを片手に空を飛び、フエイトと対峙して言う。

「……解った」

「フエイト——?!」

「この戦いの邪魔はさせない」

剣をアルフの喉元にあてがって囁く。

邪魔するつもりなら、殺させてもらう。

「貴女の名前、教えてくれない？」

「……フエイト、フエイト・テストロッサ」

「フエイトちゃん。私が勝ったら、お話聞かせてもらうから」

高町なのはがそう言い、彼女に相応しい、桃色の魔力で攻撃する。

対してフエイト・テストロッサは、金色の魔力。

互いの魔力がぶつかり弾け、光を放つ。

僅かに空間が歪んでいるのは気のせい？

2人の攻撃がぶつかるたびに歪んでる。

「次で決めるつもりかな？」

ユーノ・スクライアが呟く。

確かに2人は互いに肩で息をして限界が近そうに見える。

次で決まる。

高町なのは、負けないで。

私はそんな事を、不意に望む。

そして、互いの振りかぶった武器がぶつかる……ことはなかった。

「直ちに戦闘を終了してくれ。こんな場所で戦っていたら次元震——」

「管理局?!」

え？

あつ——。

「不味いつ」

「うわっ——」

突然現れた黒い服の魔法使い？ に、

アルフの魔法がぶつけられ、怯んだ隙に2人は逃げてしまった……。

第6話 『アースラ』

第6話 『アースラ』

「それでね——」

……私達は、あの戦闘の後、

時空管理局の巡視船アースラとか言うところに連れてこられた。

任意だった為、ついていけないことも出来たけど、

高町なのはがいくというのに、私が行かないわけにもいかない。

そこで、ユーノ・スクライアが白い生物ではなく、

人間であることが発覚した。

高町なのはもしらなかつたようで、少し困惑していた。

現在は、アースラの艦長であるリンディ・ハラウン艦長より話を聞いていた。

「では、ジュエルシードを私達は探す必要は無い。と?。」

「ええ、こちらが探すから貴女達はもう一般人に戻るべきだわ」

……。

「まあ、一旦お家に帰ってよく考えてみて頂戴」

私達は、戦いに介入してきた少年、

クロノ・ハラウンに公園まで送ってもらい、家路に着いた。

私は家に帰ることはなく、高町なのはの家に行き、

今後について話すことに。

「私は探す気は無いわ」

「え？」

「でも、それは貴女が探さないというのなら。ということ。ねえ、高町なのは。貴女はやめるの？」

「……私は。その……」

そんなすぐに決められるわけは――

「……続けたいかな」

え？

「なんていうかさ、途中で投げ出すのは嫌だし、

それにまだ、フェイトちゃんとの答えを聞いてないから」

「フェイト・テストロッサは敵なのに？」

「敵も敵なりの理由があるってことだよ。ほむら」

敵の敵なりの理由……。

私は、バマミを途中から敵としか見ていなかった……。

美樹さやかも佐倉杏子も……。

あの子たちには、あの子達の思想があった。

私にあるように、彼女達も各々の……。

もう遅いけれど、

今なら、いいえ、今の私なら協力したいって思える。

まどかだけを中心に考えて、回りを邪魔者にして、

そんなんじゃ、救えるものも救えるわけがないものね。

「じゃあ、連絡しましょう。私達3人。手伝わせて貰えないかどうか」

フェイト・テストロッサ。

彼女の真意を知る方法、高町なのはに見せてもらいたい。

そして、

私に親はいないから、問題はなかったものの、

高町なのはには家族がいる。

もちろん、魔法のことを話すわけにもいかず、

高町なのはは少しだけ苦労したが、

なんとかジュエルシード集めに専念できるようになった。

「フェイト・テストロッサ……」

私はアースラ艦内の与えられた部屋でベッドに倒れ付していた。

彼女が戦う理由。

なんで、ジュエルシードがほしいのか。

望みを叶える力があるって言うのは、聞いている。

QBの言葉くらい魅力的なものだとは思っている。

でも。

でも、彼女は。

少なくとも、彼女が何か望みをかなえようとしている人には見えな
い。

あの子にはまるで望みなんてない。

いえ、あるかもしれない。

誰かのためにジュエルシードをあつめているのかもしれない。

まどかの為に私が戦い続けていたように。

だとしたら、黒幕がいる……。

彼女にあんなことを命令している誰かが。

でも……誰が？

第7話 『必要なこと』

それから暫くは、フェイト・テストロッサが姿を現すことはなく、

私達は淡々と、ジュエルシードを集めて行つた。

残り7つ。

残りは海にあるのではないか。

リンディ・ハラオウンの読みも正しく、

そして、彼女もまた、それを予期していた。

海鳴海岸の沖で、フェイト・テストロッサが魔法によりジュエルシードを強制的に覚醒させた。

そして、私達はリンディ・ハラオウンら、アースラメンバーの指示を無視してフェイト・テストロッサの元へと向かった。

「何しに来たんだい!!」

「一々、突っ掛からないで。私達は貴女達と敵対するつもりはないわ」

「……高町なのは、フェイト・テストロッサ。行ける?」

今の私に時間を止めたりする能力はない。

でも、なのはたちに教えてもらった飛行魔法、防御魔法、射撃魔法、武器に魔力を注ぐ方法。

色々ある。

「デイベイイイン……」

「サンダー……」

借りるわ、巴マミ。

管理局に借りたデバイス『ディザイアー』

その形を、巨大な大砲のような形へと変化させる。

「ティロ……」

「バスタアアアア」

「レイジー!!」

「ファイナー!!」

各々の声が荒れた海に響き、それぞれの魔力砲が海中を撃ちぬく。

砲撃の爆発が起き、水しぶきが高く上がる。

そして、海中から6つのジュエルシールドが海中から上がってきた。

……あれ？

でも、確が見つかっていないのは7つ……。

フェイト・テストロッサが手に入れているの？

「フェイトちゃん……」

「……」

「フェイト・テストロッサ」

私達は3人、互いにジュエルシールドを囲んで、向かい合っていた。

高町なのは、貴女に任せる

ありがとう……

私にはどうすることも出来ない。

どうにかできるとしたら――。

「フェイトちゃん、私はね？ フェイトちゃんと友達になりたいんだ」

……え？

友達？

何か言うと思ったけど、友達？

友達……ああ、そうか。

まどかも、常に言ってた。

「さやかちゃんと、友達とか……」

「マミさんと仲良く友達に……なんて」

「みんな友達だよ。だから喧嘩なんて止めよう！」

全部、まどかの言葉。

……友達になるってことが、まどかを救う為の鍵だったの？

幾たびも繰り返して、何億とあるパターンの中、唯一絶対に消えなかった言葉。

友達……か。

「わ、私は——」

フェイト・テストロッサがその問いに答えようとした時、

雷雲がどよめき、雷がフェイト・テストロッサを撃ちぬく。

「——母さん？」

母さん？

「フェイト！！！！」

「?!」

怯んだ隙にアルフが取ろうとしたジュエルシードを3つ奪う。

「っ……くっ!!」

2人は転移魔法で消えて、少ししてからクロノ・ハラウンが現れた。

「アースラも攻撃を受けて救出にこれなかった……無事で何よりだ」

「クロノ・ハラウン。3つ持っていていかれた。私のミスだわ」

「いや、3つも取ってくれたことに感謝する。でも、命令違反は罰するから——」

「クロノ執務官、ならびに、なのはさん、ほむらさん、ユーノくん。アースラに帰還して」

「なんで、あんな危険なことを？」

「……黙って見てるなんて嫌だったんです。

ちゃんと、話し合いをしたかったんです。ごめんなさい」

「ほむらさん、貴女も？」

「私は、明確な意思はありません。

ただ、フェイト・テストロッサには私に近い何かを感じました。

だから、放って置く事が出来ませんでした」

……。

「まあ、今までの功績もあるし、今回は不問にするけれど、あんまりほめられたことじゃないからね？」

「」「はい」

「それでね？　なのはさん、ほむらさん。」

貴女達は、フェイトさんの口から母さんって聞いたのね？」

「ええ、聞きました」

私が頷くと、エイミー・リミエッタが空中に映像を出す。

「プレシア・テストロッサ。フェイトちゃんの母親」

……ん？

「元は優秀な人だったのだけれど、違法なものを用いて実験を行った結果、

研究所が爆発しちゃって。その後、急にいなくなっちゃってそれっきり……」

研究所の爆発で事故？

……。

「その事故での死傷者とかは？」

「それが殆ど消されちゃっててね」

「そうですか」

「何か気になることでも？」

「いえ、なんでも」

リンディ・ハラウンとのことが終わり、

私は部屋のイスに座ってため息をついた。

近い何か。

それは何かなんてものではなく、

誰かに、

何か1つに固執して、

それを求めて自分を犠牲にする行動。

私は誰の手も借りずに、まどかを救おうとしてきた。

自分ひとりの力で。

フェイト・テストロッサも、何かを求めている。

何かの為に、彼女は自信を犠牲にしてまで私達と対峙してた。

さっきの、なのはの言葉で気づいた。

私に、彼女に、

必要だったのは力でも、忍耐力でも、成し遂げようとする心でもない。

そんなのだけじゃ、意味がない。

そんなんじゃ、救うことなんて出来ない。

必要だったのは、誰か。

そう、友達が必要だった。

協力してくれる、仲間、友達。

信頼できる相手が、

話せる相手が……必要だった。

勝手に諦めて、何もかも敵だって決め付けてた私。

フェイト・テストロッサ。

貴女の生きる意味は何？

頑張る目的は何？

教えて欲しい。

そうすれば、きっと分かり合えるから。

言葉じゃないと、伝わらないことだってある。

でももし、話を聞かせるために力が必要なら、私は遠慮なく使わせて貰う。

そうしないと、いけないのなら。

第8話 『信じること』

「どうですか？」

「ん〜。それがぜんぜん。だから多分フェイトちゃんが持つてる
と思うんだよね〜」

私の問いに、エイミィ・リミエツタは小さく笑いながら答える。

私がエイミィ・リミエツタにした依頼は、ジュエルシードの搜索。

海で出てくるはずだった7つに対し、

実際に出てきたのは6つ。

1つ足りなかった。

それが気になった私は、搜索を依頼していた。

けれど結局、捕捉出来ては居らず、フェイト・テストロッサが持つ
ているのでは？

ということで、終らせた。

「……」

「ほむらちゃん。やっぱり気になるの?」

「ええ、少しね。考えすぎで区切ろうとは思っただけで、嫌に不安になってね。まあ、探してもないのだから、向こうが持っているんだろうけど」

「違う世界に落ちてるかも」

え?

私が驚いてなのはを見ると、なのはは「冗談だよ」と笑っていた。

でも、もしかしたら。

「その可能性も捨てきれないわね」

「まさかあ、ユーノくんが海鳴市に全て落ちた。そう言ってたし」

「そう……よね」

そう、ただの思い過ごし。

「ユーノ・スクライアと言えば、どこにいるの? 最近見かけないけど」

「あ。ちょっと調べものがあるってそれっきり。でも、非常時にはちゃんと戻るって」

「そう……」

調べもの……か。

「ほむらちゃん？」

「ん？」

「あつ、うつん。なんでもない——」

「ごめんね、ほむらちゃん」

目の前のピンク色の髪の少女が私に微笑む。

「まどか……まさか……」

私は涙を流して、まどかに手を伸ばす。

瓦礫に挟まれた足のせいで動けず、伸ばしたても、空を切った。

「ごめんね？ でも、私はみんなを守りたいから。失いたくないから」

「駄目！！ いや、お願い！！」

「じゃあ、魔法少女になるかい？」

白い悪魔が、まどかに囁く。

「うん。私は魔法少女になる。私の願いは――」

まどかは無慈悲にも、魔法少女となり、ワルプルギスの夜と戦闘。

そして……死んでいった。

「――まどか！！」

私はアースラの寝室で叫び声を上げていた。

ここがアースラの寝室でなければ、誰かが駆け込んできていたはずだ。

それほどまでに大きな声だった。

まどか……。

「はぁっ……はぁっ……ま、ど、か……」

魔されてた影響。

何度も体験したことで、すぐに行動することは出来る。

服を全て脱ぎ、用意しておいたタオルで体を拭いて、

新しい服を着る。

まれに見る悪夢という夢。

でも、何度も繰り返してきた中で、見た数はループに等しいか、それ以上だった。

基本的には、まどかが魔法少女になってしまう夢。

他には、シャルロッテにまどかが食いちぎられるところもある。

バマミが食われたものの、ソウルジェムが無事だった時に起こる悲劇。

バマミが自身の回復の為に私を解放、そこから時間を止めて向かった結果、見てしまった悪夢。

他には、廃工場の集団自殺阻止が間に合わなかった時。

大抵、私より早く美樹さやかがたどり着く。

しかし、美樹さやかが魔女に出くわし、

私も出くわしたりした時に、なってしまう。

他にも様々な悪夢がある。

繰り返したループの数だけ悪夢の種類がある。

いくら見てもこれだけは慣れる事が出来ない。

目を覚ませば、体を拭き、着替える。

出来るとしたらそのくらい。

その程度しか、できない。

悪ければ延々と嘔吐するときもあるし、救えなかったことで心が折れそうになった時もある。

その度にまどかの最後の笑顔を思い出し、私は耐えていた。

そして、この世界で私の支えになりつつある少女は扉を叩く。

「大丈夫？ ほむらちゃん」

「どうして？」

「声が聞こえたから」

……本来なら、多少なりの防音措置の施された各寝室から声が聞こ

えるとは思えない。

というよりも、彼女の寝室は隣ではなく、2つ3つ離れた場所にある。

それなのに、彼女は……。

「入って」

「え？」

「何か、話があったんじゃないの？」

扉を開けた私を、驚いた表情で彼女は見つめていた。

「私の声が聞こえたのって、扉の前でしょ？」

「う、うん……」

申し訳なさそうに頷く彼女をベッドに座らせる。

「みつともない声聞かせたのはこれで2度目ね。ごめんなさい」

「へ？ い、いや、その……わ、私が勝手に聞いてしまったというかその……」

高町なのはの慌てぶりに、思わず笑い声が漏れる。

「まあ、その話は置いておくとして、何の用事だったの？」

「少し、話がしたかったんです」

話……？

「ほむらさん、私達とは全然違う魔法の知識を持っているってことは、この世界の人じゃないんですよね？」

「ええ、そうよ」

「ほむらさんのいう、まどかさんって私に似てるのかなって」

……。

「顔も、服装も、容姿も、似てないわ」

「え？」

でも。

私は高町なのはの頭を撫でて、微笑む。

「仲間思いで、優しくて、そんなところが全く同じ」

「えへへ……」

「馬鹿で素直で、率直なところも」

「ううっ……」

「ねえ、高町なのは」

「はい？」

「貴女は全てを救うことが、可能だと思う？」

私の意地悪な質問に、高町なのはは答えを選び悩んでいた。

「難しく考えず、ただ、YES or NOで答えてくれれば良い」

「えっと、じゃあ、イエスで」

「それはなぜ？」

「ふえええっ?!」

「冗談よ」

「難しく考えずって言ったから……酷いですよ」

私が悪戯に笑うと、彼女も笑っていた。

彼女のイエスには、自信が籠っていた。

言葉だけ見れば、自信がなさそうな彼女の言葉。

けれど、彼女の目、彼女の声が、自信を持っていた。

「でも、全てを救える人なんて神様くらいよね」

「そうですね。神様くらいです」

歳相応な無邪気な声で言う高町なのは。

普段の大人びた雰囲気も、今はどこか欠如していた。

「——まどかさんって、大切な人ですか？」

「ええ、とっても」

不意に聞かれたその問いに答えるのに、時間はかからなかった。

「いいですね、そこまで思われてる人」

「そう？」

「だって、不意打ちで聞いた私が一瞬固まっちゃうくらい即答でしたよ」

「ふふっ、ありがとう」

「それで、本題です」

え？

不意に変わった空気に、緩んでいた口元が結ばれ、

視線は彼女の視線を捕らえていた。

「異世界の人だったら、戻りたいとは思わないんですか？」

……。

戻りたい。

けど。

「戻るの、貴女とのが片付いたら戻る」

「戻り方は？」

「え？」

彼女は見透かしたように呟く、

戻る？

異世界に？

どうやって？

そんなことは全く解らない。

そして、私はこの世界に来て一度もしていないことがあった。

それは、戻る方法の思案。

ジュエルシードの事件に介入しているから暇がないといえ、

聞こえは良いかもしれない。

むしろ、戻ることを諦めた。

それも聞こえが良い。

私は、戻れないことを僅かに望んでいた。

魔法少女は、生きている普通の人間であり、。

魔女なんて敵は存在しない高町なのはの世界。

魔法少女は人間ではなく、生ける屍であり、

魔女という敵と日々戦い続ける私の世界。

どちらが良いと聞かれたら私は迷いなく、前者と答える。

その私の世界の魔法少女があこがれる世界に、私はいる。

帰りたくないと思うのはひつぜ——。

偶然の、時空移動？

偶然の、出会い？

偶然の、協力？

偶然の、気持ち？

偶然の……願い？

必然の、願い？

「でも、でも。私は戻らなきゃいけない。戻りたい……」

「どうして？ この世界が良いでしょ？ 良いよね？ この世界に
いようよ」

「ひっ……」

思わず悲鳴が上がる。

隣にいた高町なのははゆがみ、まるで魔女のようになっていた。

「この世界が嫌い？ 私が嫌い？」

「そうじゃない、そうじゃない。でも、まどかが私を待ってるから
！！」

「でも助けられない」

「助けられる!!」

「無理無駄、諦めるべき」

っ……。

「無駄じゃないよ」

「え？」

そう言ったのは、歪んだ高町なのでも、私でもなく、

正真正銘、普通の高町なのはだった。

「無駄だ、無理だ、諦めるべき」

歪んだ高町なのはが繰り返す。

まるで、壊れたレコーダーのように。

「無駄？ 何で無駄なの？ 誰かを救おうとすることが無駄だとい
うなら、

それは間違ってるよ。

なんで、無理なの？何で諦めるの？

人間の。私達の願いに。無理なことなんてない。

それに、私達は……魔法少女。なんだから」

「人間に無理なこともある、魔法少女にも無理なことがある。

万物全てを救えるものなんて、神様くらいだ」

隣にいた歪む高町なのは、その姿を白い……QBへと変えて言い捨てた。

そして、その正面にいた高町なのはの隣に、もう一人出てきた。

黒いバリアジャケットに身を包んだ、魔法少女。

フェイト・テストロッサ。

彼女は、QBに武器を向けて怒鳴った。

「1人では無理でも、2人なら、2人で無理なら3人なら。

人はそうやって力をあわせて、無理なことを成し遂げてきた。

インキュベーター！！ 人の想いの力、絆。それを成し遂げる基盤の感情。

それが無い貴方に、人間に無理だということなんて出来こつない！！」

そこで、プツリと映像は途切れた。

目を開けると、視界に入っただのは休息室だった。

ついていけない頭に思わず立ち上がる。

「イタツ?!」

「え?」

ゴツツという鈍い音に驚き、

自分のいた場所を見ると、

高町なのはが頭をさすっていた。

え?

あれ?

「急にどかないでよ。頭打っちゃった……」

「なんでここに？ フェイト・テストロッサ、それにQBは？」

「フェイトちゃんはまだ搜索中だし、QBっていうのは、ほむらちゃんの世界にしかないよ」

え？

だって、そんな……。

「寝ぼけてる？」

「ねぼっ——え？」

「ジュエルシードの1つが見つからない話から、ユーノくんの話に入っただけ、

すこしして、ほむらちゃん寝ちゃってたよ？」

じゃ、じゃあ、今は夢？

「どんな夢だったの？」

「私のところにQBがいて、人を助けたりするのが無駄だとかむりだとか囁いて、

そしたら、高町なのはと、フェイト・テストロッサが、無駄でも無理でもないって怒鳴って……」

そこまで言うと、高町なのはが苦笑しているのが目に映った。

「リアルな夢だね」

「言わなければ良かった」

「あはは、でも。間違ってないよ」

え？

「だって、人助けが無理だとか無駄だとか。

私はそういわれたら、絶対に否定すると思うから」

なのはの曇りのない笑顔が私に向けられていた。

「そう……ね」

私達はその後、特に会話するわけでもなく、

私の部屋に来て、一緒に寝た。

まどか達とも、話したり笑ったり。

いつかできると、私は信じてる。

第9話 『視野を広くしなきゃ見えない聞こえない触れられない。そんなものが

「フエイトちゃん、まだ見つからないんですか？」

「ああ、だから君たちは一旦自分の家に帰ると良いよ」

「え？」

「たまには友達に、会いたいでしょ？」

……友達。か。

「学校も行きたいし、はい。じゃあお言葉に甘えて」

そう言うと、高町なのはが私の腕を引く。

「ちよっ——」

「アリサちゃん達も、友達でしょ？」

高町なのはの笑みに頷く。

そして私達は、2日間だけ地球に戻ることが許可された。

「あつ、お久しぶりでございます」

「ええ、本当に。でも、またすぐに出なければいけないんだけど……」

正直学校で学ぶことなんてなかった。

ここが遅れているのか、向こうが早かったのか。

まだ、数学？　とか、古文とかとりあえず、くだらない分野をやっている。

私がいた世界も一応日本で、こんな世界とははるかにかけ離れた文明世界であり、

私達は中1の時点で、この世界の東京大学？　とかいうレベルの勉強までできていた。

確かめたので、間違っていないはず。

実際に、模試と言つのをやってみたけれど、ほぼ満点。

実につまらないものだった。

そして放課後。

「この後……」

「すでに予約が入っているので、ごめんなさいね」

私はクラスメイトからの放課後の誘いを断り、

なのは達のもとへと直行した。

「少し待たせた？」

「いえ、待ってませんよ」

月村すずかが答える。

「あの人中等部の人だぜ？」

「綺麗な人だなー」

「なのはさん達とお知り合いみたいですね」

「綺麗な人と可愛い人って繋がりがあるんですね」

……え？

「あはは、若干注目的にされちゃってるね」

「笑ってないでさっさと行くわよ。なのは。ほむらさんも」

「え、ええ……」

注目的？

高町なのは達が主に見られてた気がするけれど。

「そういえばね、なのはたちが戻る数日前に大きい犬拾ったのよ」

「大きい犬？」

「亜麻色の毛で、結構な怪我してたから一応私の家で看てるんだけど」

亜麻色？

高町なのは、もしかしたら……

うん。でも、だとしたらなんで……

とりあえず確かめましょう

そうだね

「じゃあ、アリサちゃんの家に行こうよ」

「良いわよ。新しいゲームもあるし、そうしましょ」

……やっぱり。

アンタ達……

アルフ。何があつたの？

私達がアリサ・バニングスから聞いた大きい犬というのは、

予測正しく、フェイト・テストロッサの使い魔、アルフだった。

アルフさん……

私の問いに答えることなく、アルフは私達に背中を向けた。

「あれ？ まだちょっと良くないのかな」

「みんな、部屋に行きましょう」

「う、うん……」

「私はもう少し、ここにいて良いかしら」

「え？」

「この子は少し怯えてるみたいだから、それを無くして上げたいの」

「えつと……じゃあ、少ししたら来て下さいね」

「ええ、我儉言つてごめんなさいね」

「あ、いえ」

私が微笑むと、高町なのはが私を見ていた。

ほむらちゃん……

気にしないで、その2人は貴女の友達。貴女と傍にいたいはずよ

アルフさんのことお願いします

ええ、任せて

3人が家の中に入っていくのを見送り、

アルフが入れられたケージに寄りかかるように座り込む。

アンタ達がいるってことは、管理局も見ているんだろう？

そうね、そうなるわ

アルフの問いに答える。

嘘つくつもりもないし、ついても意味の無いことだし。

フェイトを助けて欲しい

フェイト・テストロッサを、助ける？ 誰か敵がいるとでも言うの？ 私達以外に。

それとも、母親と仲違いした？

え？

大体の予測はしていたもの。フェイト・テストロッサ。あの子は私に似ているから

アンタに？

私は何を話そうとしてるのか。

身の上話なんて余計な……。

誰かの為に一生懸命。身も心も削りに削ってる。私にはあの子がそう見えた。違うかしら？

……

だんまり……か。

君の持つてる情報を――

クロノ・ハラオウン。少し黙ってて

んなっ……

余計なことはいらない。

無理強いすることはいけないこと。

あの子は良い子なのね。アルフ。何かの為に一生懸命になれるなんて

かといって、私が良い子と聞かれたら、迷わず首を横に振るけれど。

……違う。フェイトは間違ってるんだ

間違ってる？

何が？

フェイトは、母親に笑って欲しいからって頑張ってるのに。

なのにあいつは！！ フェイトに笑うどころか、褒める事すらしない。

フェイトに鞭を振るうだけなんだ……。

あんなの……母親じゃない。化け物だ……

だからフェイト・テストロッサが間違ってるって？

……そうね。でも。

彼女は間違っではないわ

何言って――

だって、自身の望みの為にしていることなのでしょう？

それは……

何かが間違っているとしたら、それは彼女の母親

何の望みかは、知らない。

でも、ジュエルシードを集めて何かしようとしていることは確かなこと。

フェイト・テストロッサをボロボロになってまで酷使させても気にしないような何か。

あるいは、フェイト・テストロッサは娘ではないのかもしれないわね

そ、そんなはずは……

ただの仮定よ。普通の親だったら、どんなに叶えたい望みがあったとしても、

少なくとも、自分の娘を犠牲にはしないはず。私が見てきた家庭はみんなそうだった

……でも、自分の娘でも犠牲にする親は、いるかも知れないわね。

今まで見てきたことないけれど。

だとしたら。

その親の望みは叶えさせるわけには行かない。

それに、ジュエルシードが1つ2つで叶わない望み。

まともな望みとは思えない。

世界を作り変えるだとか、滅ばすだとか。

そう言ったものかしら……。

アルフ

なに？

フェイト・テストロッサを助けない？

ああ

そう。

好かれているのね、フェイト・テストロッサ。

私なんかより、ずっと良い子だわ。

ね
彼女の母親を直接止めたいけれど、きっと彼女は邪魔してくるわ

どんなことをされても、フェイトにとって、母親には変わらない
から……

それなら。

戦って、話して……。

高町なのはもう、自分の気持ちを伝えてあるから。

今度は私が、彼女と戦って、教えてあげる番

え？

母親の間違いを教えてあげる、彼女の生きる意味を変えてあげる。
彼女は私と同じだから。

何か1つに夢中になりすぎて、周りが見えていないから。

だから、教えてあげる。視野を広くしなきゃ見えない聞こえない触
れられない。

そんなものがあるんだってことを

「ほむらさ〜ん。アリサちゃん達が待ってますよ〜」

上から、月村すずかのお呼びがかかる。

「解った、すぐ行くわ」

私はアルフに一度だけ視線を送る。

私は戦わせて貰うわ。彼女と1v1で

でも、どこにいるか……

私達の持つジュエルシード全てを持って、私と高町なのは、クロノ・ハラオウン、フェイト・テストロッサ。

4人が一度だけ集合した場所。あそこに行くわ

え？

彼女は来るわ。何もおきないのは、ジュエルシードが足りていないから。

だとすれば、私達が持つジュエルシードが欲しいはず。

明日……私は、ジュエルシードを全て持って、そこに行く

私はクロノ・ハラオウンにそう伝えてアリサ・バニングス達のいる部屋へ向かう。

「ごめんなさい、待たせてしまったわね」

部屋に入って微笑む。

私は、高町なのはに色々と見せてもらった、教えてもらった、考えさせられた。

それで気づいた。

必要なのは、誰かに頼ること。

自分ひとりで頑張ったって、何も出来やしない。

フェイト・テストロッサ。

貴女が本当にするべき事。

貴女に必要なもの。

私が、教えてあげるから。

第10話 『フェイトvsほむら』

「きて、くれるかな？」

不安そうに尋ねる高町なのはに、私は頷く。

来てくれる。

いや、向こうから誘いが来ていたかもしれない。

「フェイト!!」

私の横にいたアルフが叫ぶ。

どうやら来たらしい。

「こんにちは、曉美ほむらよ。よろしくね」

街灯の上に立つフェイト・テストロッサに声をかける。

けれども、返事はない。

解ってる。

貴女の考え、貴女の心境。

私に似てるから。

「さっさと戦いましょう……ね。良いわ。戦いながら、お話ししましょう?」

フェイト・テストロッサが武器を構える。

フェイト・テストロッサは速さ重視の軽武装。

「ディザイアー、フォルム。ツインソード」

<了解>

私がそう言うのと、手に持っていた紫色の宝石が双剣へと変わる。

私の武器、ディザイアーは多重武装デバイス。

1つのデバイスで、何通りもの形状に変化する。

こんな便利なもの、私が使って良いのか。

なんて聞いたところ、このデバイスが私を選んだ。リンディ・ハラオウンはそう言っていた。

生き物に感情がないことがあるように、機械にだって感情があることがあるかもしれない。

偶然の産物?

製作者の悪戯？

なんにせよこのデバイスが作られ、私を選び、私が受け取った。

これが事実だ。

「さあ、行くよ。ディザイア」

<了解、ホムラ>

「バルディッシュ、行くよ」

<イエス・サー>

「貴女のデバイス。バルディッシュって言うのね。カッコ良い名前」

「……貴女も」

……無駄な話は控えたい……か。

私よりよほど切羽詰ってるわね。

「バルディッシュ、フォトランサー・ファランクスシフト。ファイア――」

複数の攻撃……ね。

「フォーム、ガトリングキャノン!!」

私が向こうの世界で得た、武器の知識。

それにあわせて、このデバイスは形を変えてくれる。

<イグニッション>

ディザイアーが発した声に続き、銃口から魔弾が連続射撃が行われ、
フェイト・テストロッサの放った魔法攻撃を全て打ち落とした。

「っ……バルディッシュ、アークセイバー!」

「フォーム、ツインソード」

再び双剣に戻し、身構える。

その瞬間、バルディッシュから黄色い刃が放たれ、

私に向かってきた。

なるほど、軌道が読みにくい攻撃ね。

厄介ね。でも、防御は必要ない。

「行くよ、ディザイアー。見せてあげよう。私達の、戦い方を」

<了解>

「なっ……」

放たれた黄色い刃に向かって突撃し、

片方の剣で、それを切り落とす。

「フェイト・テストロッサ！ 貴女は母親が間違ってるとは思わない？」

「母さんは、間違ってる——」

「母親がなぜ、ジュエルシードを必要なのか。貴女は知ってる？」

バルディッシュとデイザイアが共に接触した状態で、私が聞く。

「それは……」

「知らないの？ なのに貴女はその為に命を懸けるの？」

「違う、母さんの——」

「笑って欲しい。聞いたわ。それはとても優しい願いだと思っわ

でも、それで命を懸けるのは馬鹿らしい」

「貴女に何が解る——」

「っ……」

弾かれ、バインドでの拘束。

「何も知らないのに、勝手なこと言わないで」

彼女の下に魔方陣が展開される。

「アルカス・クルタス・エイギアス。

疾風なりし天神、今導きのもと撃ちかけ。バルエル・ザルエル・ブラウゼル。

フォトンランサー・ファランクスシフト。撃ち碎け、ファイアー」

「デイズァー!!」

<任せて>

「ティロ……フィナーレ!!」

バマミと同じ砲撃。

少し違うのは弾ではなく、魔力ビーム砲。

フェイト・テストロッサの攻撃を相殺する。

「何も知らない、でも知ってるわ」

「……」

「貴女を見てると、嫌になる」

「えっ？」

「だって貴女。まるで私だから。何かに夢中になって、周りが見えてない。」

だから少し、頭冷やしなさい。ディザイアー。よろしく」

<了解、ホムラ>

私が声をかけるとデバイスが変形し、まどかと同じ弓の形に変わる。

「っ……?!」

「チェーンバインドよ。少し動かないで」

紫色のチェーンがフェイト・テストロッサを捕獲し、私が狙う。

「トリシューラ」

先端が三つに分かれた槍。

私の手に握られたその槍を、ディザイアーに装填。

<イグニッション>

そして、放つ。

放たれた槍が、フェイト・テストロッサに衝突し、爆発する。

爆発の余波が爆風を巻き起こし、海が荒れた。

……。

「多少なりと加減したのだけれど……やりすぎたわね」

<少し、やりすぎたかと>

「……」

落下していくフェイト・テストロッサを抱えあげ、微笑む。

「頭は冷えたかしら？」

<酷い落ち着かせ方ですね>

……。

時々、このデバイスが実は人間なんじゃないかって思えてくる。

「貴女のお母さんの目的、まずはそれを知って、手伝えるなら私達も手伝うから。」

「一人で頑張ろうとしては駄目」

「……」

<ジュエルシード、リリース>

バルディッシュから、ジュエルシードが抜け出す。

<じゃあ、受けと——ホムラ!!>

「何?!」

<雷砲撃、来ます、オハン全方位展開!!>

ディザイアーが叫び、巨大な黄金の盾へ変化して空中に現れ、

天空から落ちてきた稲妻を防ぐ。

「っ……」

<ジュエルシード、盗られました>

……ということは、今のはフェイト・テストロッサの母親の攻撃。

娘を巻き込むことも止むなしと見たのね。

ますます気に入らないわ。

「ジュエルシードは盗られちゃったけれど、おかげで相手の居場所が解ったわ」

「……フェイト・テストロッサはどうしますか?」

「連れてきて頂戴」

「了解」

<解せませんね>

「何が?」

<あの雷撃は、確実に我々ではなく、フェイト・テストロッサを狙っていた>

「本当?」

<嘘はつきません>

「……そう」

<ギャグですか?>

は?

「何言ってるの?」

<嘘とそう。嘘を逆にして、そうって言ったのでは? 大して笑えませんが>

「少し黙ってなさい」

<まあ、そう恥かしがらずに>

……もう嫌。このデバイス。

そして、私達は転送魔法でアースラへと、帰艦した。

第11話 『違和感』

「ただいま戻りました」

「お疲れ様。フェイトさんを連れて部屋に行つてくれる？」

「なんでですか？」

高町なのはの質問に、リンディ・ハラウンが申し訳なさそうな表情でフェイト・テストロッサに目を向けた。

「母親が逮捕されるところを見せるのは――」

「プレシア・テストロッサ。貴女を次元犯罪の容疑で捕縛します！
！」

……始まつたみたいね。

「フェイト・テストロッサ。行きましょ」

私が彼女の腕を掴み、部屋に行こうとした時だった。

「この部屋は?!」

局員の声と映像が流れ、部屋が映し出された。

「え？」

「なっ……」

<ホムラの予測通りでしたね>

「娘に触らないで!!」

「うわあああああ!!」

突入した人たちに雷が落ち、全滅した。

「エイミイ!! 管理局の人たちを戻して!!」

「はいっ!!」

……私の予測。

それは、フェイト・テストロッサがプレシア・テストロッサの娘ではないという事。

「ほむらさん、貴女……」

「なんとなく、予測はしていたわ。

娘へとは思えない扱いだったので、もしかしたら。」と

「フェイト、貴女はもう用済みよ」

「……母さん」

「足りるか解らないけど、これでアルハザードへの道を開——」

アルハザード？

映像が途切れ、最後までは聞けなかった。

「っ……」

「フェイトちゃん?!」

フェイト・テストロッサが、その場に崩れ落ち、高町なのはが支える。

心の支えを失っちゃったからか……。

私もまどかがいなくなったらこうなってたかな。

「艦長!! 要塞内部に無数の敵勢反応!!」

「クロノ執務官は?!」

「向かってます」

……。

「私達も」

「うん。行こう」

私達はフェイト・テストロッサを医務室に運び、

アルフに任せて、クロノ・ハラオウンの元へと向かう。

「私達も行くわ」

「……わかつ——」

「僕も行くよ」

「ユーノくん!!」

私達のところに、調べものでいなくなっていたユーノ・スクライアが、現れた。

「時間が無い。行くよ」

「ええ」

「かなりの敵の量ね」

「うん、じゃあ……」

「いや、なのは達は何もしなく良いよ。僕がやる」

「いえ、私がやるわ」

「え？」

面倒なもの、一撃で消し去った方が楽。

「デイズアイアー」

<了解、レーヴァテイン>

デイズアイアーは巨大な剣へと姿を変えて、私の右手に握られていた。

「邪魔しないで頂戴」

横一閃。

私が横に動かした剣は、敵を全て切り裂く。

「さっさと行くわよ。プレシア・テストロッサが何かしでかす前に」

私が言っているとクロノ・ハラオウンが頷き、私達是要塞の内部へと侵入した。

……やっぱり沢山いたわね。

すし詰め状態じゃない。

「僕は、プレシア・テストロッサのところへ向かう。

君たちは駆動炉の封印を！！」

「了解！」

「じゃあ、道を開けて貰うわよ。ツインソード」

<了解>

「高町なのは。準備は良い？」

「うん。ユーノくん、しっかり捕まってる」

「ああ」

「い——」

<行きますよ！！ ホムラ！>

……なんだろう。

凄く苛立ってきた。

「はあああー!」

階段の方へ一直線に向かい、立ちはだかる敵だけを切り落として進む。

「ねえ、ほむらちゃん」

「なにかしら？」

「ほむらちゃんと、フェイトちゃん。似てるって……」

「ええ。とっても。何かに固執して、追いつけることに関してはね」

「ほむらちゃんが追いかけてるのって……」

……。

「いまはそれより、戦闘に集中しましょう」

「あ、うん……」

私がこの世界の人間でないことはすでに伝えてある。

高町なのはたちはそのことに対して言及する素振りもなく、

私も話すつもりもなかった。

ただ、リンディ・ハラウン達は、私が戻る方法を探してあげる。と言い、

私の世界の情報を聞いてきた。

でも、なんとなく解る。

どうやったら戻れるか。

きつと、この戦いが終われば戻れる。

大きな戦いの後に戻る。

向こうの世界でも、そうだったから。

「まったく、次から次へと……」

<有限だと言うのが救いですよ>

「私達も有限よ」

<貴女達の想いは無限なのでは？>

「そうね」

想いだけじゃ、意味ないけれど。

というか、ディザイアーって本当に機械なのかしら。

「ほむらちゃん!!」

「ええ、わかってるわ」

<ホムラ。どうやら来たようですよ?>

来たって?

「アーク、セイバー!!」

「?!」

私の背後に迫っていた敵が真つ二つに裂けて爆発する。

今のは……。

「フェイト・テストロッサ」

「フェイトちゃん……」

私と高町なのはの間に下りてきた黒いバリアジャケットに身を包んだフェイト・テストロッサ。

「私も、戦う」

「……良いの？ 母親と戦うことになるわよ？」

「うん。母さんに言いたいことがあって来たから。」

戦う必要があるなら、私は戦う」

そう。

そんな会話をしていると、爆発が起こり、

超大型の敵が出てきた。

「じゃあ、あの大型を撃ち抜こう」

「うん。やろう」

「あの背中……」

「厄介ね」

「……でも、3人なら」

「うん！ うんうん！-」

思わず、微笑む。

話せば分かり合える。

少し、手荒な方法をとったけれど、

私達は分かり合えた。

だから。

「デイベイイイン……」

「サンダー……」

「テイロ……」

あの時と同じ技。

同じ連携。

でも、私達の関係は変わった。

——仲間。

「バスタアアアア」

「レイジー!!」

「フィナーレ!!」

私達の攻撃は容易く大型の鎧兵を撃ち抜き、破壊した。

「駆動炉はあのエレベーターに乗っていけばすぐに着く」

「貴女は、行くのね？」

「……うん」

「頑張りなさい。貴女の言葉で母親に伝えてあげなさい」

「頑張つて、フェイトちゃん」

私と高町なのはでフェイト・テストロッサの手を握り囁く。

「ありがとう」

フェイト・テストロッサがそう言って走っていく。

私と高町なのはとユーノ・スクライアが駆動炉

フェイト・テストロッサとアルフがプレシア・テストロッサの元へと向かった。

「ほむらちゃん、ユーノくん。頑張ろう」

「ええ、背中には任せなさい。私があなたを守ってあげる」

「僕は君を守るよ。ほむら」

<それは私の役目ですっ>

「貴女は守るんじゃないくて共闘でしょう?」

<そうです。共に戦って、ホムラを守る>

「はいはい」

さて、行くわよ。

「デイズアイア」

<任せてください>

「ガトリングキャノン、フルオートモデル」

<我々の邪魔はさせません、絶対に>

「私達も、やるよ。レイジングハート!」

<了解です、マスター>

<レイジングハート、いけるよね?>

<当然です。やりましょう。デイズアイア>

「はあああ!」

「デイベインシューター、フルパワー、シュート!」

敵を次々と落としていく。

多いわね。

でも、この程度なら……。

「ほむらちゃん!!」

えっ？

<武装変更が出来な——>

「ほむら!!」

私と、敵の間に緑色の魔法シールドが張られ、攻撃を防ぐ。

<どうしたというのですか、ホムラ。魔力が途切れてましたよ？>

「……」

なんで、今。

今、何もできなかった。

私が、私で無くなってしまった様な……。

……まさか。

その後、私達は3人で協力して敵を倒しつつ、駆動炉の封印に成功

した。

「やったね、なのは」

「うん。ユーノくん」

……。

「高町なのは」

「なに？」

「フェイト・テストロッサのところに——？！」

「きゃあ？」

「うわっ……」

大きなゆれが私達を襲った。

次元震？

「急ぎましょう！」

「うん！！」

私達は、駆動炉から出てフェイト・テストロッサ及び、

プレシア・テストロッサ、クロノ・ハラオウンのいる最深部へと向

か
っ
た。
。

第12話 『機械ですから』

「……不味い」

<もうすぐ、最深部です>

「うん、急ごう。レイジングハート」

……。

「高町なのは」

「なに？」

「貴女に、伝えておきたいことがある」

「え？」

<最深部です!!>

レイジングハートの声が響く。

崩れた床。

すでに、プレシア・テストロッサがいないことから、

眼下に広がる時空のゆがみに消えたんだと私は理解した。

「フェイトちゃん!!」

今にも崩れそうな場所に、フェイト・テストロッサとアルフがいた。

……。

「貴女はどうする?」

<何をでしょうか?>

「解っているでしょう?」

<解りかねます>

「転送しまっ……え?」

「どうした!エイミィ!!」

「ほむらちゃんが捕捉できないの!!」

「そんなはずない!!　ここにいるぞ!!」

「いない、いないの!!　魔力感知が出来ない!!」

やっぱり。

「そろそろお別れのような」

「え？」

さっきの戦闘で気づいたけど。

私は、この世界からもうすぐ消える。

多分、私の役目は終わったから。

「ありがとう、もうお別れよ」

「どういこと？」

「フエイト・テストロッサ」

「なに？」

「高町なのはを——」

「このままじゃ全員助からない!! みんな!! 転送します!!」

「ほむらちゃん!!」

「——」

「?!」

私以外のみんなが転送魔法に包まれて消える。

「最後まで付き合う気？ ディザイアー」

<とうぜんです。私は貴女の剣、貴女の盾。貴女の……相棒です
から>

「馬鹿ね。機械の癖に」

<機械ですから>

次の瞬間。

プレシアさんの要塞は、跡形もなく吹き飛んだ。

「え？ あ……え？」

「……」

「なんで、どうして……」

「エイミィ、状況の報告を」

私達がアースラに転送されてすぐに、要塞が吹き飛んだ。

ほむらちゃんを残したまま……

「彼女は私に……」

「フェイトちゃん……」

泣いていた私を、フェイトちゃんの優しさが包み込む。

「ほむらはきつと、自分の世界に帰ったんだ」

「……ユーノ……くん？」

「なのは、このことが終わったあと僕を手伝ってくれないか？」

「え？」

「少し、やりたいことがあるんだ」

私はそれに頷く。

ほむらちゃんは最後、私達に言った。

「ありがとう、なのは。」

フェイト・テストロッサ、なのはをよろしく」

まだ、私はお礼を言っていない。

自分だけ言っていないくなるなんてそんなこと……させないから。

第13話 『田々』

「……」

目を覚ますと、いつもの病室だった。

まどか達のいる世界の病室。

壁にかけられたカレンダーは、数日後の25日に印がついていた。

「戻ってこれたのね」

不意に呟いた一言。

嬉しいのか、嬉しくないのか。

いや、嬉しい。

でも、なのはたちにはもう。会えない。

そう思うと、途端に悲しくなった。

<この世界で、ホムラにはすることがあるんですね？>

え？

思わず、周りを見渡す。

誰も居ない。

それに、今の声は。

<私はここですよ？>

本来あるべきはずのものがなく、ないはずのものがそこにあった。

ないのはソウルジェム。

あるのは、デザイナーだった。

「どうして？」

<さあ、解りません。ただ、爆発の直前転送魔法の一種に捉えられたのだと、推測します>

多分、私の時間跳躍魔法だ。

なんにせよ、戻ってこれたことに変わりはない。

相変わらず失われたままの、時間操作魔法。

でも、もう良い。

私はこの時間軸で、まどかを救ってみせる。

なのはと過ごした時間は、かけがえの無いものになった。

<嬉しそうですね、ホムラ>

「ええ、これで私の願いが叶えられるはずだから」

<願い。d e s i r e。私の名前です>

「そうね、だから手伝ってくれるわね？」

<もちろんです。貴女の願いは私の願いですから>

私は笑う。

嘗て、感じたこともない幸福感。

私は確信できていた。

今の私なら。

私達なら、ワルプルギスの夜を倒せると言うことを……。

「暁美ほむらです。よろしくお願いします」

そして、25日。いつも通り私は入学し、挨拶をした。

まどかがいて、美樹さやかがいて、志筑仁美がいる。

私が知っている世界。

何度も繰り返した世界。

私がまどかに微笑むと、向こうは少し焦ったような笑みを向けた。

……とりあえずは、QBを殺すふりをしなければ。

でないと、巴マミ、美樹さやか、まどかの3人が出会う事はない。

じゃないと、話が進まないから。

それ以外の意思はない。

別にQBを殺したいからするわけじゃない。

「暁美さんって前はどこの学校だったの？」

「私立聖祥大附属中学よ」

「部活とかは？」

「してなかったわ」

授業のチャイムが鳴り、クラスメイト達が私の周りから離れていく。

《喋りたいです》

《黙ってなさい》

なんで？

なのはたちが言うには、

デバイスは念話に参加できないはずなのに、

何でこのデバイスは念話できるのかしら。

そんな余計な考えをしている間に、学校が終わる。

私はクラスメイトの誘いを断って、QBを追い詰めに向かう。

もちろん、殺しても無駄なのだから追い込んで、まどか達を呼ばせるだけで良い。

そして、私の思惑通りに事は進み、

美樹さやか、まどか、巴マミと、私は対峙した。

「魔女は逃げたわよ？」

「ええ、そうね」

「見逃してあげるって言ってるの。解らない？」

巴マミは聊か好戦的。

それも全て、私がQBを攻撃していたから。

けれど、そんなことはどうでも良い。

「巴マミ」

「なにかしら？」

「私は貴女と協力がしたい」

「キュウベえを攻撃していたのに何言ってるの？」

巴マミがマスケット銃を私に向けて聞く。

……今までなら。

すでに私はいない。

でも、今度こそ私は救う為に、私は。

「信じてくれとは言わない。もし怪しい動きをしたと思うなら私をそれで撃ち抜いてくれて構わない。」

だから、私と協力をして欲しい。私にはどうしても失いたくないものがある。

でも、1人じゃ出来ないから。だから、お願い」

「「「?!」「」」

私は頭を下げて、続ける。

「私に協力して。……お願い」

「ちよつ、貴女一体……」

「じゃあ、なんでこのキューベえ？　だっけ？　こんなになるまで攻撃したんだ？」

美樹さやかが聞く。

「それは、敵だから」

「あら、私はキューベえの味方よ？　つまり敵って事」

<聊か面倒な方たちですね>

……なんで。

どうしてだろう。

このデバイスはなんで余計なことを言うんだらうか。

「い、今の、なに?!」

「巴マミ、今は気にし——」

<気にしてください。私はここに居ますから>

「貴女いい加減にしてくれない?」

<だって、喋らせてもらえなかった>

「学校であなたに喋らせるわけにいかないでしょう?!」

<ここ学校じゃないよ>

……頭痛くなってきた。

「あ、貴女大丈夫?」

「……精神的に駄目かもしれないわ」

<不屈の心の貴女にそんなことは言えませんが>

「そんなの貴女のせいでブレイクされたわ」

「あ、暁美さん……あの、その……」

まどかか怯えたように言葉を発する。

そういえば、大分話からずれてしまっていたわね。

さて。

「バマミ。では、貴女に伝えておくわ」

「何を？」

まず、キュウベえはインキュベーターという侵略者

そんな話……

ええ、信じられない。そして、もう1つあるわ

え？

魔法少女の本体は、私達肉体ではなく、魔法少女が持つソウルジェムなのよ

「えっ?!」

巴マミが口を押さえて、首を小刻みに横に振る。

嘘でしょ?

嘘だと思うなら、インキュベーターに聞けば良い。私を信じていないのだから。

真実と私を信じたのなら、見滝原の中央公園。明日の昼時に来て頂戴

私は念話でそう伝え、そこから出て行く。

これで良い。

彼女がQBに聞いたら真実だと告げるはず。

だから彼女は明日、確実に来てくれる。

<上手くいきました?>

「貴女のせいで失敗しそうだったわ」

<ですが、成功したんですよね?>

「ええ、当然よ。失敗なんて出来ないし、するはずがない。

「今回の最後のチャンスなのだから」

だからこそ、あのことは伏せておく。

魔法少女が、魔女になってしまうことは。

私は、夕暮れの光に照らされる道を駆け抜け、魔女、魔女の使い魔の消滅に動いていた。

第14話 『十分すぎる理由』

転入から数日後、

「ね、ねえ。あの、曉美……さん」

「？ ほむらで良いわ。そう余所余所しくされると、対応に困るわ」

「あ、ごめん」

昼休み、私に話しかけてきたのは他でもないまどかだった。

本来なら会ったその日の時点でこのやり取りは終えていたはずだけれど、

クラスメイトとの会話で時間を使い、話してはいなかった。

その日話すのも今日話すのも。

大して変わりはない。

「鹿目まどか。ちょっと、付き合ってもらえる？」

「おい、まどかを連れて行くなら私も連れて行け」

「構わないわ。できればそこにいる白いのは来ないで欲しいけれど、

美樹さやかが来ても支障はない。むしろ好都合」

私の言葉に彼女達は驚きながらも、美樹さやかが私を睨む。

完全に目の敵にされてるわね。

「それじゃあ、屋上にでも？」

「う、うん」

「行くならさっさと行きなよ。私達は後ろからついていく」

「ありがとう」

「？」

……。

私はさっさと教室を出て、屋上に向かう。

その後ろを2人分の足音が着いてきていた。

「素直についてきたのね」

「……」

「えつと、それで？」

まどかは、少し怯えた感じで私に尋ねる。

何で怯えているのかしらね。

QBもしつかりと、美樹さやかが抱えてるし。

「S——」

<それで、話したいことというのは——>

「いい加減にして頂戴」

<あうっ……>

「話したいこと？」

「ええ、貴女達どうせその白いのに「魔法少女にならない？」なんて誘われたのでしょうか？」

「う、うん。誘われたけど……」

「君は一体何者なんだい？ 暁美ほむら」

「貴方に教える義理はないわね」

「へえ、じゃあ、私達にも教えてくれないのか？」

美樹さやか。

彼女の言葉が必ず針を持つてゐる。

いままで、単にウザイだとかいらつくだとか。

そう思つてたし、

単なる私への敵対心だけだと思つてた。

でも、よくよく考えれば、貴女は必ずまどかの前にいる。

後ろにはいない。

自分なりのやり方で守つてた。

「美樹さやか」

「な、なんだよ」

「貴女にまず言わせて貰うわ」

「え？ あ、うん」

「じめんなさい」

「はい？」

私が頭を下げると、

美樹さやかの口から素っ頓狂な声が漏れた。

私が謝ることが意外だった？

「なんなのよ、急に」

「貴女を誤解していたから」

「誤解も何も、この前会ったばかりでしょ？」

まあ、そうなのだけれど。

私は貴女ともう、何ヶ月という期間過ごしたから。

その間、私はずっと貴女が嫌な人だって思ってたから。

「貴女は思ってたより、ずっと良い人だわ」

「な、なにによ。煽ってたってこの前のことは——」

「だからこそ、私は貴女達に危険な目には遭って欲しくない」

「危険な目？」

「ええ、その白いのは貴女達を魔法少女にして魔女と戦わせたいだけ」

「魔女って、マミさんが言ってた？」

そういえば、この時間軸の2人は巴マミについて行って戦いを見ていないのね。

まあ、私が阻止したからなのだけれど……。

でも、魔女については巴マミを通して聞いているらしいし、

私のことについて話さない限りは特に問題はない。

この時期にQBに私の正体がばれるのは、私の計画に支障をきたしてしまう。

「巴マミ、来ているのでしょうか？」

私が聞くと、私達が来たところから巴マミが出てきた。

「マミさん？」

「こんにちは、鹿目さん、美樹さん」

「まったく、君まで僕と敵対するつもりかい？」

「いえ、そんな気は無いわ」

バママミが微笑む。

当然。

彼女から、真実を知った上での覚悟は聞いてある。

あの日の翌日。

彼女は私の元に来た。

もちろん、QBを置いて。

「こんにちは。暁美さん」

「2人から聞いたの？」

「ええ、貴女の名前だけだけど」

公園のベンチに座っていた私に、彼女は話しかけてきた。

「貴女を信じるわ。というよりも貴女の言葉が真実だと、キュウベえが認めたわ」

彼女の自嘲気味な笑いが、私には少しだけ辛く、

けれども、彼女が魔法少女であることへの安心感。

私は自分が少しだけ、嫌いになった。

どんなに頑張っても、彼女を魔法少女の運命から救い出すことは出来ない。

けれど、彼女が魔法少女であり、仲間になってくれるかもしれないことが、

私には少しだけ、いいえ。とても嬉しかった。

そんな、彼女の気持ちを考えない私の感情が許せなかった。

「私、人間じゃない。のよね」

「ええ、死んでもいないけれど」

「でも、私はこれで良いと思うわ」

え？

「私は本来死んでいたはずだから、今ここに存在して、誰かを守れていること。」

鹿目さん、美樹さん、暁美さん。貴女達に会えたことも感謝しているの」

巴マミ……貴女は……。

「だから。と言って、キュウベえを擁護はしない。」

逆に私は、貴女を手伝いたいって思ってる」

「どうして？ 感謝対象であるキュウベえの敵よ？ 私は」

「貴女は私に真実を教えてくれた。騙されたままの馬鹿な私ではなく、

真実を知っても戦う覚悟のある巴マミにしてくれた。それだけで、私が貴女と協力するには十分すぎる理由だわ」

……。

「だからと言って、キュウベえは殺させない。これは絶対条件。呑

んってくれるわよね?」

「当然よ。それに、QBはいくら殺しても代わりがいるから無意味」
風が木々の間を通り抜けてメロディを奏でる。

私達の協定を、まるで祝福してくれているようだった。

「それで? 失いたくないものって?」

「鹿目まどか、美樹さやか。2人を魔法少女にしないこと。いえ、私達以外の誰も、魔法少女にはしないこと」

「え? 失うって……」

「私が守りたいのは、彼女達が人間であると言うこと。友人との関係、家族関係。それら全て」

「それは、魔法少女になったら失ってしまうものだから? だから、魔法少女にしないよう手伝って欲しいって事?」

なるほど、察しが早いのはありがたいことね。

「それもある。けれど、来るべきワルプルギスの夜の討伐を手伝って欲しい」

「ワルプルギスの夜?」

「ええ、そこら辺にいる魔女みたいに結界に隠れる必要なんて微塵も無いとてつもなく強大な力を持つ魔女」

「でも、そんなに強いのなら、2人で倒せるかしら……」

「いいえ、あと1人あてがあるわ。その3人で私達はワルプルギスの夜を倒す」

私が握った拳を、バマミが包む。

「頑張りましょう。暁美さん」

「私はキュウベえと敵対しない、これからも魔女も使い魔も倒すわ。でも、暁美さんの協力要請も受けるわ」

「何を言っているんだい？ 訳がわからないよ」

解るわけないわよね。

貴方には、彼女の気持ちも覚悟も理解なんて出来ないのだから。

いいえ、もとより人間と言う存在自体、理解していないのだから。

「ほむらちゃんと協力して何するんですか？」

「貴女達を魔法少女にしないこと」

「え？」

「……」

美樹さやか？

「美樹さん？　どうかしたの？」

「え？　なんでもないですよ。ただ、何でそんなことのためにって
思って」

そんなこと。か。

まあ、他人からしてみたらそんなこと程度で終わってしまうわよね。

「私にとってはとても大切なことだから」

「魔法少女になることがいけないことなの？」

まどかの純粋な探求の目が私に向けられる。

貴女はその瞳を失ってしまう。

いいえ、全てを失ってしまう。

「魔法少女は、人間ではなくなってしまう。そうでしょ？ キュウベえ」

私の変わりに、バマミがQBへと言葉を投げかけた時だった……。

第15話 『人間』

それに反応したのは、美樹さやかだった。

「人間じゃなくなる？ ど、どういう意味？」

え？

嘘。

まさか！

私がQBを睨むと、相変わらぬ表情で私を見ていた。

「そうさ。美樹さやかは僕と契約したんだ」

「な、んで?!」

「だって、恭介が、恭介が苦しそうだったから……私……」

っ……。

私は彼女の望みを知っていたのに……

「QB。貴方、なにをしたの？」

「偶然、上条恭介が魔女に呪われて、偶然彼女と僕がそこにいただけだよ」

偶然……。

偶然の中での必然……。

美樹さやか魔法少女化は避けられない。と？

まさか、シャルロット戦より先にそんなことになるなんて……。

この時間軸は私の知ってる。

私の見てきた流れとは違う、本当の未来がある世界だ。

この先に何が起きて、どうなるのか。

全く予測がつかない世界。

でも、魔女にしないことは出来る。

「……美樹さやか。大丈夫？」

「……」

「ごめんなさい。私が——」

「謝らなくて良いよ……私が望んだことだから。後悔先にたたずつて言うけど。まっさに。そのとおりだわ」

1人笑う美樹さやか。

それを悲しそうに見つめるまどかと巴マミ。

「……で、さ。暁美さん」

「何かしら？」

「私はもう人間じゃないって言うのは事実なんだよね？」

「ええ、QB。教えてあげなさい」

「？ 教える必要性がつかめないけど、別に良いよ。」

美樹さやか。君のソウルジェムを貸してくれないかな」

そう言つて、QBの前に美樹さやかがソウルジェムを置いた瞬間、

QBがそれを踏みつけた。

「あぐっ……があっ?!」

「さやかちゃん?!」

美樹さやかが倒れこみ、もたえる。

「苦しいだろう？ 何でかって言うと、このソウルジェムが君の本体だからさ。」

君のその肉体はただの器なんだよ」

「酷いよー！ それじゃさやかちゃんはまるで……」

「まるで、ゾンビみたい……よね」

バママミが呟く。

「むしろ便利だろう？ 心臓が破れても、ありったけの血を抜かれても、その身体は魔力で修理すればすぐまた動くようになる。」

ソウルジェムさえ砕かれない限り君たちは無敵だよ。弱点だらけの人体よりも、余程戦いでは有利じゃないか」

……。

「そうね、そうだろうけれど、私はそれが良いことだとは思えない」

私はなのはが、フェイト・テストロッサが、

ユーノ・スクライアが、アルフが、クロノ・ハラウンが。

人間でありながらも、戦っていたのを見た、一緒に戦った。

だからこそ、私は思う。

「人間の全てが便利じゃないといけないことなんてない。

どこかに欠点があるからこそ、私達は頑張ることが出来る。

戦いが有利？ そんな理由で人間じゃなくなって良いほど、私達人間は安物なんかじゃない」

「安物？ 人間は自分達に値段でもつけているのかい？ それはそれとして、

君たちだって、豚や牛。家畜がいるだろう？ それと同じさ」

「私達が、キュウベえにとっては家畜だと？」

「げほっげほっ……」

「さやかちゃん！」

「そうだよ。彼らは人間の糧になることを前提に生存競争から保護され、淘汰されることなく繁殖している」

……。

「牛も豚も鶏も、他の野生動物に比べれば種としての繁殖ぶりは圧倒的だ。君たちは皆、理想的な共栄関係にあるじゃないか。

寧ろ僕らは人類が家畜を扱うよりも、ずっと君たちに対して譲歩し

ているよ？ 曲がりなりにも知的生命体と認めた上で交渉しているんだしね」

「もし、貴方達に感情があったのなら、世界はもっと違っていたかもしれないわね」

「そんなことを言っただって仕方のないことさ。僕らには感情がない。これが事実なんだから」

キュウベえが笑う。

向こうとしては、笑っているとさえ思っていないのだろうけど。

「……暁美さん」

「なにかしら、美樹さやか」

「人間じゃなくても、心はあるんだよね？」

……人間じゃなくても心がある？

どうかしら。

でも、なのはならきつと。

「人間に心があるんじゃない、心があるから、人間なんだと思う」

「訳がわからない解答だね」

「感情がなければ理解も出来ないわよ」

「じゃあ、さ。私、曉美さんたちと協力するよ」

「さやかちゃん?!」

美樹さやかが、QBの前に置いた自分のソウルジェムを拾って笑う。

「マミさんと同じく、魔女ってやつらと戦う。」

1人でも多く、魔法少女になる人が減るようにがんばる。

まどかを絶対に魔法少女にはさせない。まどかの分も私が頑張れば良いだけ。でしょ?」

「違うわ」

<そうですね。全く違います>

……どうしてこつも空気を壊すのかしら、私のデバイスは。

<貴女がんばるのではなく、私達が頑張るのです。そうですね? ホムラ>

「そうだけど、貴女いい加減止めてくれないかしら」

<何をでしょうか。私には生憎感情というものが欠如……>

「いや、アンタそれ嘘でしょ」

美樹さやかがクスツと笑う。

<そう……>

「……はい？」

<今のギャグなんです……>

もう、止めて頂戴。

本当に。

「あの……さやかちゃん、マミさん、ほむらちゃん……その……」

「気にしないで、私達はそれぞれ私達の理想の為に戦うの。だから、貴女がどうこう悩むことじゃない。」

悩むくらいなら、魔女との戦闘以外では傍にいて欲しい。人間じゃないけれど、人間として接して欲しい」

「ほむらちゃん達は人間だよ！」

「……僕には理解できないな」

<さっきから何度も言っています。感情のない貴方に、理解できるはない>

「そうだね」

QBはそう呟き、どこかへと消える。

<まったく、気に入りませんね>

「私は貴女が気に入らない」

<なんでですか、少しくらいボケても良いじゃないですか>

「良いわけがない。すこしじゃない。良い加減にして欲しい」

「暁美さんのそれってなんなんですか？ それにソウルジェムは？」

「私にソウルジェムはないわ」

「「「え？」「」」

<私がソウルジェムです>

……。

これが私の魂。

ありえない。

いや、でも……同族嫌悪……そんなはずは。

「私のも喋ったり……」

「出来ないわよ。私のがたまたま手違いで不良品なだけ。

交換も利かないから仕方なくこれを使ってるのよ」

「なんだあ、残念。喋る相手が出来ると……あ」

「「「え?」」」

……。

「でも、これからは私達みんな仲間です。気兼ねなく会話できますよ。念話で」

「私とまどかはキュウベえを介してじゃないと——」

「それなら私がサポートしますよ。あれに念話を聞かれるのは不愉快なので」

本当に機械なのかしら……このデバイス。

兎に角、私と巴マミ、美樹さやかは協力関係を結び、

まどかを魔法少女にしないこと、人々を、魔女と使い魔から守ることを誓い合った。

あとは、佐倉杏子。

彼女がこの町に来るのを待つだけ。

第16話 『憧れ……かしらね』

「デザイナー！」

<お任せください>

「フォルム、カノン。ディバインバスター！」

お菓子の結界の中、私と巴マミ、美樹さやかでシャルロットを撃墜した後のことだった。

「みんな、お疲れ様。このあとお茶でもしようよ」

「おお。まどかのナイスアイデア。みんな、行こう！」

「美樹さん、少し静かにしないとだめよ？ 注目されているわ」

「まったく、冷静さが欠けてるわね」

軽く笑いながら、私達は喫茶店へと向かった。

本来、この時点で巴マミは死亡。

美樹さやかもまだ魔法少女ではない。

けれど、今。

バマミは生存し、美樹さやかは魔法少女であり、

そしてなにより、私達全員が協力関係にある。

これほどまでに素晴らしいことは、嘗て一度もおきたことはない。

バマミが敗北するはずだった魔女。シャルロッテ。

私達は3人で協力したことですばやく、魔力消費も少なく戦いを終えることが出来た。

もちろん、誰も欠けることなく。

そして、まどかが笑顔で傍にすること。

私は、これが嬉しかった。

「でさ？ ほむら」

「なにかしら？」

「いつも気になってたんだけど、必殺技の名前って必要？」

「なっ……」

そ、そういえば、なのはたちの時はみんな、普通に名前つけてたから気にしてなかった。

だからそのままこっちでも……。

そういえば、こっちの魔法少女で必殺技的な名前付けてるのってバツミくらい……。

「べ、別に良いんじゃないかしら」

「ほむらちゃんの技の名前って何？」

「え？！」

「確か、ディバインバスター、アークセイバー……えっとお？」

＜フォトンランサー、ゲイボルグ、トリシューラ、レーヴァテイン
これが今のところ使った名前ですね＞

「貴女捨てて良いかしら」

＜こゝ冗談を＞

「真面目よ。大真面目」

私の。最早黒歴史と言える……。

でも、なのは達との記憶を忘れないようにって使ってるのよね。

「マミさんもティロフィナーレってつけてるからなあ」

「え、ええ。まあ、なんとなく雰囲気出るし、その方が魔法少女っぽいじゃない？」

巴ミミ。べつに弁解の必要は……ってまさか。

「もしかして、お茶会に乗り気だったのって」

「そうっ。私の必殺技考えて」

<喜んで>

「おっ、ディザイアーは優しいね」

<当然です。意地悪なホムラの代わりに優しいんです>

「貴女、タンクローリーでひき潰されたい？」

<まつさかあ、ご冗談を>

「大真面目よ」

「ほむらちゃんは優しいよ。十分すぎるくらいに」

「貴女ほどではないわよ」

「そうかなあ」

って、必殺技を考えると言われても……。

何か良い案ないかしら。

えーっと。

「蒼勇の刃^{フレイブエッジ}なんてどうかしら」

私が考えていると、巴マミが呟く。

「い、今なんて?!」

「へっ?! な、なんでもないわ美樹さん。気のせいじゃない?」

「ううん。マミさんなんか言ってたよ」

まどか。

見逃してあげれば良いのに。

<蒼勇の刃。マミはそう言っていたよ。サヤカ>

「?! デイザイアー?!」

<なんでしょうか、マミ。私的には素晴らしい名前かと。それに、蒼と勇が似合うサヤカにぴったりだと思ったのですが>

「あら、デザイナー貴女は余計なことばかり言っのではないのね」

<心外です。泣きますよ？>

「泣いてみれば？」

<うわああああん>

「ただの棒読みじゃない」

「2人の漫才は置いておいて、マミさん。その案貰って良いですか？」

漫才……デバイスのせいで漫才だって。

私、ループ前の性格に戻ってきた？

いやそれ以上に、美樹さやかやなのはみみたいな性格に影響されて、それに近くなってるのかもしれない。

……憧れ。かしらね。

その後、上機嫌の美樹さやか、巴マミ、まどかと別れ、私は帰宅した。

「ねえ」

< 为什么呢？ >

「私、変わった？」

< 変わってるんじゃないでしょうか >

「どんな風に？」

< 根暗から活発な子に……ごめんなさい。だからハンマー片付けてください >

根暗……か。

確かに、周りとの接触を避けていたのだからそうよね。

< きつと、良い変化ですよホムラ >

「そうね、そうだと……良いわ」

第17話 『佐倉杏子』

「また魔女……ねっ!」

「すばしっこいのがめんどくさい!」

「美樹さやか。私が追い詰めるから止めよろしく」

「はいよ!」

逃げ回る魔女。ズライカ。

逃げ回っても無駄。

<フォームガトリングバレル。いつでも良いですよ>

「準備が良いじゃない」

<当然です>

「イグニッション」

私の声と共に、ガトリングとなったディザイアーから魔弾が連続で放たれる。

それを避ける為に、魔女が上へ上へと逃げていく。

でも、それはただの誘導。

「貰ったわよ!!」

魔女に向かって美樹さやかが突っ込む。

「はああああ、ブレイブ・エッジ!!」

美樹さやかの必殺技により魔女が消滅し、グリーンシールドが手に入った。

「いやあ、なんか技名叫ぶとなんとなく気合が入るね」

「そうでしょ?」

「そうね」

私の本当の意味はもっと違うのだけれど。

「アンタ達。ちょっと良いかい?」

来た。

戦闘を終えて歩いていると、

赤い髪をなびかせた少女。

私が本来3人目として選んでいた魔法少女が話しかけてきた。

「佐倉、杏子」

「え？　なんで……？」

それよりも、バマミ、美樹さやか。そして私の3vs1に態々挑んでくる気かしら。

なんにせよ、QBが呼んだことに間違いはない。

「アンタ、何しに来たの?!」

「美樹さん、まずは穏便に話を——」

「狩りだよ。ここの領域をアタシがQBに任されたのさ」
なるほど。

こちら辺に変わりはないようね。

「それで、邪魔な私達を——」

<フラッシュムーブ>

「——片付けようって算段かしら?」

一瞬で杏子の背後に移動する。

時間を止めたわけじゃなく、

瞬間的な速度を上げて動いただけ。

れっきとした移動魔法。

「なっ?! 何だ今の……」

「み、美樹さん。今の移動。見えました?」

「全く見えなかった」

「だったら、どうだっていうんだ?」

「貴女も私達と一緒に戦ってくれないかしら」

「それになんのメリットがある?」

「魔女を倒すのに必要な魔力が各自少量に出来る、

私達が倒して手に入れたグリーンフィードを共有できる。

情報交換が出来る。

戦闘においての死ぬ可能性をほぼゼロにできる」

「デメリットは？」

「特にないわ」

「ええ、ないわね」

「うん。ない」

「そんな怪しい取引に応じるわけねえだろ」

やっぱり、駄目かしらね。

嘘も誤魔化しも解釈の違いもないようにって思ったのだけれど。

確かにむしが良すぎる話よね。

「じゃあ、デメリット。貴女には私達と一緒に戦って力を使ってもらう」

「そんなのデメリットでもなんでもねえよ。本当の目的は何なんだよ」

そうね。

もう、頃合かも知れないわね。

「巴マミには伝えてあるのだけれど、この際だから美樹さやか、佐倉杏子」

「なに？」

「なんだよ」

「2週間後、この町にワルプルギスの夜が来るわ」

「は？ 何でそんなことが解るんだ？」

「っていうか、ワルプルギスの夜ってなに？」

「アンタ知らないのかよ」

佐倉杏子が美樹さやかに聞く。

「じ、じゃ、じゃあ、貴女知ってるの？」

「うん」

「えっ？」

「と、とりあえず、私の家に来て頂戴」

「隠してたなんて酷いな」

「ご、ごめんなさい。今日言う予定だったのよ。美樹さやか」

「そ、それなら良いけどさ」

まあ……嘘ではないわよね。

佐倉杏子が今日会いに来るのは今まで通り。

そして、話をする予定だったのも事実なのだから。

「で、じゃあ教えてくれるんだろ？」

佐倉杏子がイスに座って聞く。

それに対して私は頷いて、様々なことが書いてある紙を机の上に置く。

「ワルプルギスの夜が来ると踏んだのは、統計の結果よ」

「統計？ 前に来たことあんのかこの町？」

「そうではなく、北半球、南半球、西、東と来てる」

「この情報が定かではないけれど、確かに。暁美さんの言う通りだわ」

ワルプルギスが過去に現れた場所。

本当は嘘なのだけれど……。

それらを線で結び、中心には。

「見滝原……」

「ええ、だからここについて」

「その2週間後って言うのはなんでなの？ ほむら」

「それは仮説の状態。けれど、可能性がなくなっていくって言うのは、他のところが襲われたときも、同じ季節だったからよ」

「ふん。まあ、良いけど。で？ アタシにもそいつの討伐に手を貸せってやつか？」

「ええ、暁美さん、美樹さん、私。すでに3人いるけれど、

ワルプルギスの夜の力を考えると、この3人で勝つことが出来るかどうかって言うのも微妙なところなのよ」

「な、なんだそれ。かなりやばいじゃんか」

「怖気づいたのかよ。さやか」

「なっ……っっていうか人の名前を……」

「いーじゃんか。これから共闘するんだ。そのくらい。させてくれても良いだろ？」

割と簡単に協力を許可してくれたわね。

「全く、杏子。君まで……」

突然、キュウベえが現れて呟く。

「悪いね、キュウベえ。協力することにデメリットがない以上。

私は協力することにするよ。ワルプルギスの夜を倒してみたいしな」

杏子がそう言うと、キュウベえは相変わらずの表情で私達を見回す。

「まあ、僕としては君たちが魔女を倒してくれればそれで良いけどね」

そう言い残し、キュウベえが出て行く。

「それで、貴女に言うことがあるわ。佐倉杏子」

「ん？」

「私達魔法少女は、人間じゃない」

「は？」

驚くのは当然。

でも、事実。

これだけは教えといた方が良い。

あれは教えられないけれど。

教えてもデメリットしかないのだから。

「私達魔法少女の本体はそれぞれが持つソウルジェム」

「そんなの聞いてないぞ?!」

「キュウベえ曰く、聞かれなかったから教えなかったらしいわ」

「っ……」

しまっ……。

「さくっ——」

「私に任せて」

「美樹さやか……」

飛び出していった佐倉杏子を美樹さやかが追いかけていく。

「大丈夫、ここは美樹さんに任せましょう？」

「……ええ」

第18話 『私達は、後悔なんてしない、迷わない。絶対に』

「……見つけた」

「なんだ、さやかかよ」

「ほむら達が良かった？」

私がそうたずねると、彼女は何も言わずただ風の音が聞こえるだけだった。

そして不意に、彼女が口を開いた。

「さやかは、知ってたのかよ」

「この事？」

「それ以外に——」

「契約した時は知らなかった」

私がそう即答すると、杏子は私を不思議そうに見つめてきた。

「嫌じゃ、ないのか？」

「嫌だよ。とつても。……でも、嫌だった。かな」

私は言い直す。

このことは私のとても良い言い訳になっていたから。

「私はね、好きな人がいた」

「……」

「その人は、バイオリンがとっても上手だった。けど……」

思わず言葉が詰まる。

あんなことがなければ……今頃？

いいや、きっと、魔法少女じゃないだけで、何も変わらなかったと思う。

「さやか？」

「ああ、ごめん。けど、その人が事故で、左腕が不自由になってしまった」

「アンタ……」

「お人よしとでも呼んでくれて良いわよ？」

杏子の考えたとおり、私は彼の腕を直す願いで魔法少女になった」

私はそう言いながら、彼女の隣へと移動する。

「それで？」

「そこまでは良かった。でも、私の友達が、彼のことを好きだった私に伝えてきた」

「マミ達か？」

「違う。魔法少女じゃない普通の友達」

「……で、どうしたんだ？」

彼女の問いから、少しだけ間が空いた。

これはまだ、私が後悔しているからなんだろうか。

「その時に、さっきのことが伝えられた」

「え？」

彼女の驚いた顔が私の視界を埋めた。

「正直、選べなかった私にとって、良い言い訳になったよ。

友達を応援したい。でも、私も彼が好きだった。

どっちも選べない優柔不断な私を、魔法少女って言う力が導いてく

れた」

「お前はそれでよかったのか？」

「うん。良かったと思う」

「なんで、何で割り切れたんだ？」

「好きな人と親友が付き合って、それで守りたいものが出来たからかな」

「え？」

「だって、親友と好きな人。その未来を応援したいじゃん。

それに、もう1人の親友を守りたいって気持ちもあるからさ」

「守れても、アタシ達は人間なんかじゃ……」

「ううん、それは違う」

「?!」

私は杏子を抱き寄せて囁く。

「人間は、魂の在りかでなんて決まらない。

たしかに、普通の人から見たらゾンビとか、そういう類かもしれないけれど、

私達からしてみれば、人間で、仲間で、親友で。

誰かを助けたい、守りたいって心があるんだから。

そんな人を思う心があるんなら、私達は人間。そう思わない？」

「ア、アタシは別にそんなの……」

「ない？」

「家族もみんな死んで、私は1人なんだ。友達も、家族もない……」

「私達が友達だよ。仲間だよ。だから私達を守って、助けて欲しい。貴女が人間である証明の為に。」

私達が、私が貴女を助けて、守るように。貴女も……それじゃ、駄目？」

「友達？ ついさつき会ったばかりじゃなかよ……」

「そうだけどさ、友達になるのは会って、名前で呼び合って。それでも友達なんじゃないの？」

私は微笑み、彼女から離れて右手を差し出す。

「友達だっと思ってくれるなら、私のこの手を握ってよ」

彼女は私の顔を見て、私の手を見る。

そして、彼女は自分の手を見る。

「友達に、なってくれるのか？」

「私は大歓迎。あとは、貴女がこの手を握れば友達って事」

「じゃあ、よろしく頼むよ。さやか」

「簡単に言うね、後悔するかもよ？」

「後悔なんて先には解らないだろ。それならまずは、目の前の幸福を掴むに決まってる」

杏子はそう言って、笑顔で私の手を取った。

「杏子、私は杏子を守るから。友達に誘ったからにはね」

「じゃあ、アタシはさやかを守ってみせる。アタシの大切な、友達1人目なんだから」

私達は軽く笑いながら、ほむら達の待つ、ほむらの家へと帰っていた。

「私へアタシ達は、後悔なんてしない、迷わない。絶対に」

第19話 『vsワルプルギスの夜』

「直ちに避難してください！！ 繰り返します！！ 直ちに――」

運命の決戦の日、ワルプルギスの夜が訪れる兆候として、スーパーセルが見滝原に来ていた。

「みんな……」

「だいじょーぶ。まどか、安心して待っててよ。絶対に帰ってくるからさ」

「そうだぜ、さやかもみんなも、アタシが絶対守るからさ」

「ええ、もちろん私もみんなを守るわ」

「鹿目まどか、私はみんながいるから絶対に大丈夫だと思える。」

今まで、こんな気持ちになったことはなかった。だから、きっと……」

私が言い終わる前に、まどかが私に抱きつく。

「絶対だよ。絶対だからね？」

「うん、約束する」

<貴女の願いは私が受け取ります>

「デイザイアーよろしくね？」

「それじゃあ行こうか、ほむら」

「ええ」

私達は避難所の出入り口から出て行く。

……。

「ほむらちゃん!! みんな!! 頑張って!! 一生懸命応援してるから!!」

そう言って手を振るまどかに私達は全員揃って拳を突き出す。

「ええ、頑張る。貴女の想いと共に!!」

「暁美さんの予測ポイントはここよね」

「ええ、ここに来るはず」

「なんだ?!」

私達が話していると、あたりに霧が立ち込め、

魔女の結界の中にいる生き物達のようなのが、私達の横を歩いていく。

「来たわ。あれが、ワルプルギスの夜」

「きゃはははつきゃははははははっ」

私が指差す先に、巨大な歯車を回転させ、青と白のツートンカラーのドレスを着たような女性にも見える魔女が現れた。

「で、でけえな……おい」

「なに？ 今更怖気づいても逃げられないからね？ 杏子」

「さやかこそ逃げんなよ？」

「さあ、私達一世一代の大勝負ね」

「各自、グリーンシードは1つ持つてるわね？」

私達は、戦いを終えて魔女になる気などない。

もちろん、魔法少女が魔女になることはみんなに教えていない。

教えても意味は無い、むしろ、戦意喪失させるだけだから。

<準備は良いですか？ ホムラ>

「当然よ」

<なのはやフェイトとの共闘を思い出しますね>

「そうね、でも、こっちのほうが多いわよ」

<その分敵も、強大ですが>

「そうね、けれど」

「「「「私達ならやれる、絶対に>」「」「」

まずは先手を撃たせてもらう。

「遠距離砲撃、行くわよ、暁美さん！」

「ええ、バマリ。ディザイアー！」

<了解、私達の願いを叶える為に>

バマミが、巨大な大砲を構え、

私のデバイスも同じ形へ変わる。

「「ティロ・ファイナーレ!!」」

バマミの巨大な弾丸と、私の魔力ビームがワルブルギスの夜に直撃する。

でも、まだ。

「続くよ！ おくれんなよ、さやか!」

「そつちこそ!! 杏子!!」

「みんなが考えてくれた必殺!! ブレイブ・エッジ!!」

「てめえが魔女なら、コイツで撃ちぬく! ガ・ジャルグ!!」

杏子の巨大な槍の一撃、さやかの剣撃の一撃がワルブルギスの夜に直撃する。

「きゃはははっ きゃはははははっ」

全然効いてない？

そんなこと、あるわけない！！

「デイズァー！！」

<解ってます！！>

「デイベイン・バスター！！」

「ティロ・ファイナーレ！！」

「はああああ！！ ブレイブ・エッジ！！！！」

「打ち碎けえ！！ ガ・ジャルグ！！」

4人の一斉集中攻撃。

しかし……。

「きゃはははっきゃはははははっ」

ワルプルギスの夜はまるで無駄だと言わんばかりに笑っただけ、先に進んでいく。

「っざけんな畜生！！」

「杏子、まだ終わってない！」

「曉美さん、私達も！」

<死ぬ時まで、諦めるという言葉は必要ありません。そうでしょう？
ホムラ>

「ええ、前に回りこんで、押し返す！！」

私達は私の転移魔法でワルプルギスの夜の正面に回る。

この転移魔法でワルプルギスを……出来たら良いけど、

質量の問題で出来ない。

例えできたとしても、倒せたことにはならない。

「いくわよ、ディザイアー。バマミ、佐倉杏子、美樹さやか。

これが私達の全力全開。受け切れるなら、受けきつて見せなさい！」

<だんだん、なのはに似てきましたね>

「手加減無用！！」

「ぶった切ってあげるわよ！！」

「撃ち抜きます！！」

「ディザイアー」

< 为什么呢？ >

「これで、決めるわ」

< 了解です、ホムラ >

「レーヴァテイン！！」

「ブレイブ・エッジ！！」

「ガ・ジャルグ！！」

「ティロ・フィナーレ！！」

私達4人の全力全開の一撃が、ワルプルギスの夜を襲った。

第20話 『偶然』

いつか誰かが言った。

目の前にある壁は意外に簡単に壊せるものなんだって。

世界の全ては偶然でできてるんだよ。

と、ある人は言った。

偶然の出会いで始まった魔法少女な生活。

それは、悲劇の始まりでしかなくて。

何度も同じ時を繰り返し。

永遠ともいえる迷宮に迷い込んだ私。

たった一人の親友の、たった一つの願いを叶える為に。

私は戦い続けてきた。

何度も何度も、魔女と戦い、必要とあらば魔法少女とも戦った。

そんな永遠の迷宮を抜け出せず、【諦め】そんな二文字が浮かんでいた私の元に訪れたのは、

違う世界の魔法少女との出会い。

彼女もまた、偶然の中に魔法少女になった。

けれど、魔法少女の役割は私とは全然違うもので、

いずれ魔女なんて化け物になるなんてこともなくて。

彼女は笑っていた、偶然だとしても、貴女がここにいることは必然なんじゃないかと。

偶然の、時空移動

偶然の、出会い

偶然の、協力

偶然の、気持ち

偶然の、願い

それらが積み重なって、私は彼女と短いけれど、生活を共にした。

その中で、出会った敵は、魔法少女で。

私に似た、一途な子で。

騙されてるわけではない。

ただ、自信の願いの為に頑張つてて。

そんなところが似ていて。

私達はその子と戦い、そして教えてあげた。

私が学んだ大切なことを。

1人で何でも出来るなんてことは絶対にない。

どんなに無理だっと思う事だっ、みんなでやれば絶対にできるんだって。

孤独じゃ勝てないから、だから協力するんだって。

私は教えて貰ったから。

それを彼女に教えた。

そして、彼女は本当の自分を始める為に、自分の母親とだって戦った。

そんなことを体験して。

わたしはまた、永遠の監獄に相棒と共に戻ってきた。

少し生意気で、イラツと来る時があるけれど。

とても頼りになる仲間。

二度と同じ事を繰り返さない為に、私は無限のループでしたことの無い行動をした。

バマミに頭を下げて協力を頼み、

美樹さやかは予定外だけれど、彼女とも和解して協力した。

佐倉杏子も、一時は危なかったけれど、美樹さやかのおかげで協力関係になることが出来た。

私と彼女達。

私達4人いえ、5人ならワルプルギスの夜を倒せると確信していた。

今までは1人だった。

だから無理だった。

でも、5人いれば、倒せるんだって思った。

けど――。

「「「「きゃああ?!」「」「」」

「きゃはははっきゃはははははっ」

ワルプルギスの笑い声が、響いた。

<大丈夫ですか、ホムラ>

私達の一斉攻撃は、簡単に防がれた。

いえ、ダメージは与えられた。

でも、ワルプルギスの夜が逆さまから普通の体勢に戻った瞬間。

私達は、地面に跪いていた。

突然走った黒い衝撃波に、私達はビルや地面に叩きつけられた。

「ごめん、足が挟まれて動けない。デザインアー。みんなの確認は？」

<生きていますが、かなりの重傷です>

「みんな!」

「……暁美さん?」

「……ほむら？」

「……どうしたんだ？」

「私達はまだ終わってないよね？ 戦えるわよね」

<アークセイバー>

デイズアイアが、自動で私の足を挟んでいた瓦礫を破壊する。

「ああ、おわってねえ！」

「当然でしょ。みんなで生きて帰る。みんなを守る。それが私達の約束だよ！」

「ええ、そうですよ。美樹さんの言う通り、約束は果たさなければ意味がありませんから」

「無理じゃない、やれる倒せる、守りきる。みんなで頑張れば、絶対に」

私達はまた、ワルプルギスの夜の前に立ち上がった。

「その体勢が本気って訳？」

「本気にならなきゃ抵抗できないほどアタシらは強いってことかな！」

「そうですね、でも」

「ほん……」

<本気になっても勝てません。なぜなら>

まったく、私の台詞をとらないで欲しいわね。

「私達全員が本気だから」

私達は微笑む。

ワルプルギスの夜は不気味に笑う。

そんな時だった。

ワルプルギスの夜に緑色と、こげ茶色の鎖が巻き付いた。

え？

あれって。

「——やあっと、見つけたよ。ほむらちゃん」

背後からの効きなれて、ずいぶん懐かしく感じてしまう声。

「え？」

「あ、アンタ達誰?!」

「暁美さんの知り合い?」

なんで?

どうして、いや。

「どうやってここに?」

「偶然だよ。ほむらちゃん」

「話は後で良いよね。まずはあれを片付けようよ。なのは」

「そうだね、フェイトちゃん」

「なのは……フェイト……」

私達のところに来たのは、

高町なのは、フェイト・テストロッサ、

ユーノ・スクライア、アルフの4人だった。

第21話 『全力全開』

「さあて、レイジングハート。全力全開だよ」

<了解です。マスター>

「バルディッシュ。いけるよね」

<イエス・サー>

「デイズアイア。やるわよ」

<了解です。ぶっ飛ばしちゃいましょう>

……なんかおかしい。

私のデバイスだけ絶対に何かおかしい。

「わ、私達も」

「ええ、これで最後です」

「いくぞお！」

「僕達のバインドも限界だ」

「大丈夫だよ。ユーノ。あの子達なら、やれる」

「スターライトオオオ……」

「サンダアア……スマツシャー」

「レーヴァア……ティン」

「ティロ・フィナーレ!!」

「ブレイブ・エッジ!!」

「ガ・ジャルグ!!」

「『『『『ブレイカアアアアア』』』』」

私たち六人の一斉攻撃。

さつきは4人の魔法少女。

今度は6人の魔法少女。

たった2人の増援かもしれない。

でも、ユーノ・スクライアと、アルフが動きを止めてくれるから、

私達が全力全開フルパワーで、攻撃できる。

前の私は、時間を止めてフルパワーで攻撃できたけど、
それでもやっぱり孤独な戦いだった。

でも今は、デバイスを含めれば11人で協力してる。

これなら!!

「ほむらちゃん、フェイトちゃん、さやかちゃん、巴ちゃん、杏子ちゃん!!」

「なのは、杏子、さやか、マミ、フェイト!!」

「ほむら、なのは、マミ、杏子、さやか!!」

「杏子、ほむら、なのは、マミさん、フェイト!!」

「さやか、ほむら、マミ、フェイト、なのは!!」

「暁美さん、なのはさん、美樹さん、フェイトさん、佐倉さん!!」

<ディザイアー、バルディッシュ>

<ディザイアー、レイジングハート>

<レイジングハート、バルディッシュ>

全員で、名前を呼び合う。

これで、倒してみせる。

「「「「「「>>>全力……全開！！<<<」」」」」」

「きゃははは……」

大爆発がおき、ワルプルギスの夜が砕け散って消し飛ぶ。

終わった。

勝った。

私達は……。

それぞれ持っていたグリーンフィードでソウルジェムを浄化したため、
魔女化の心配もない。

「やっと……倒せた……みんな、生き……てる……」

私はふらふらと力尽き、その場に倒れこんだ。

しかし、体が地面につく前に、暖かく優しい何かに私は包まれた。

そのまま私は、気を失った。

「?!」

目を覚ますと、見慣れた病室。

まさか、また？

またループしてしまったと言うの？！

そんな絶望に襲われかけた時だった。

すやすやと、静かな寝息を立てるまどかの姿が、すぐ横にあった。

ずっと付き添っててくれたのだろうか……。

「おっ、目を覚ましたね。ほむらちゃん」

病室の扉が開き、なのはが入ってきた。

「なのは……」

「急に倒れるものだから焦っちゃったよ」

「……どうやってここに？」

私が聞くと、なのはが少し小難しそうな表情を浮かべて微笑む。

「実は、ほむらちゃんがいなくなった後、色々調べたんだよ。ユーノ君たちと」

「え？」

「まあ、大半はユーノ君が調べておいてくれたんだけどね」

「なんで？」

要塞ごと爆発したのに、なんで。

「死んでるとは思わなかったの？」

「まったく」

「なんて即答。」

それに、なんて自信に満ちた表情。

でも、嬉しい。

「まさか、時空管理局の管理外世界だったとはね」

管理外世界？

「管理外って事は……え？　きて良かったの？」

「うん。友達を助ける為に。それに、ロストログアの回収もあったし」

ロストログアって……。

「ジュエルシード？」

「そうだよ。まあ、ジュエルシードはあの大きな敵が持ってたんだけどね」

大きな敵。

ワルプルギスの夜。

「だからあんなに強かったんだ……」

「私達が頑張って倒したんだよねっ」

嬉しそうに言うのは。

それを見て、私も思わず笑みが零れる。

「そういえば……みんなは？」

「みんなは……アースラにいるよ」

え？

アースラ？

「なんで？」

「私達の目的だよ」

「どういうこと？」

計り知れない不安に、私は襲われた。

みんなに何かあったの……？

最終話 『本当の魔法少女まどか マギカ』

「じつは、この世界にずいぶん昔からロストロギアが逃げ込んでいたみたいなの」

え？

まさか、私達の中にそのロストロギアが？

そう思った私の手を、なのはが握る。

「まえにお話してくれたよね、インキュベーターについて」

「え？ まさか……」

QBが、ロストロギア……だと？

でも、え？

それが事実なら。

「コードネーム。インキュベーター。侵略者と名づけられたそれは、その名の通り、世界を滅ぼして、そしてまた別の世界へ。」

それを繰り返していたの」

滅ぼす？

魔女……。

「まさか、魔女って……」

「QBが生み出す敵だったの。それを利用して少女を対象に魔法少女にして戦わせる。」

リンカーコアをソウルジェムへと変換させて、時が来ればその魔法少女は魔女へと変わってしまう。恐ろしいロストロギア」

なのはが悲しそうに言う。

「みんなは、みんなはどうなるの？」

「大丈夫。ちゃんとリンカーコアに戻せるよ。QBを封印したらね」

扉が開き、声が進入してきた。

「ユーノくん？」

私達の話に入ってきたのは、ユーノ・スクライアだった。

「どういこと？」

「君がソウルジェムを無くしたのは、リンカーコアに戻ったからな

んだ」

「だから私は時間操作の魔法が消えた……と？」

「QBの支配領域から逃れたことで、君の力は失われた。

でも、あの次元の狭間で戦いの時。

たまたま君の世界の近くだったんだ。

そのせいで、君はQBの世界での君の能力に巻き込まれた」

なるほど。

それで、ディザイアーも一緒にきていたのね。

「それに、ディザイアーと一緒に行ったおかげで、君のリンカーコアが再びソウルジェムへ変換されることが防がれた」

「まさか、貴方が調べていたと言うのはこの事だったのね」

「そう。QBというのは少し聞いたことがあったからね」

「なら何である時、知らないふりを？」

「知っていると言っても、君を世界に戻すことは出来なかったからだよ」

彼は彼なりに私のことを考えてくれていたのね……。

「じゃあ、QBはもう?。」

「うん、すでに封印。本局に持っていかれたよ」

「そう、お別れくらい言いたかったわね」

彼を好きではない、むしろ嫌いなくらい。

でも、彼のおかげでまどか達と出会い、私の病弱な体が治り、

そして、なのはたちとも出会えた。

この点に関しては感謝しているわ。QB。

そして、これedyouやく。

youやく……。

「私達は魔法少女から解放されるのね」

私が言うと、なのはとユーノ・スクライアが頷く。

「ん……ぬむっ……」

「……まどか。おはよう」

youやくおきたまどかに微笑む。

2回3回と、目を擦り、そして。

「ほ、ほむらちゃん!!」

「まどか、ごめん。心配かけたわね」

決戦から1週間も眠ってたんだよ？ ほむらちゃん

そのあいだずっと、まどかは……

うん。見守ってくれてたよ。数日すれば、みんなも戻ってくるよ

ありがとうなのは

こちらこそ、いろいろとありがとうね、ほむらちゃん

なのは達はそう言つと、手を振って病室から出て行つた。

「まどか、私達はもう魔法少女から解放されたわ」

「うん。聞いたよ」

私はまどかの笑顔が見たかった。

あの地獄の1ヶ月間はもう来ない。

私の魔法の能力も消えた。

少し、惜しいことをしたかもしれない。

それはべつに時間魔法ではなくて、デバイスを手放すことになることが。

「ねえ、ほむらちゃん。提案があるんだけどね？」

「なに？」

私は微笑むまどかに耳を貸す。

そして……数日が過ぎたころ。

「まどか!! ほむら!!」

さやかの声が響く。

「ただいま。ってやつだな」

「帰ってきましたわね」

時空管理局で検査をしていたさやか、マミ、杏子が見滝原市に戻ってきた。

「まどかに変なことしてないよね?!」

出会い頭のさやかの言葉。

「さあ、どうだか」

私はプイツとそつぽを向いて呟く。

「え? ほむら? な、何したのか吐きなさい!」

「嫌よ。力ずくで言わせてみなさいよ」

私はさやかをからかって走って逃げる。

いつ以来だろうか。

心から笑えるのは。

これからはずっと、こんな風に楽しい毎日が帰ってくる。

「ほむらちゃん!! みんな!!」

そして、なのはたちが来た。

フェイトは、裁判があるから来ていない。

プレシア・テストロッサの思惑を知らなかったわけであり、彼女自身、純粋な気持ちで動いていただけ。

クロノ・ハラウン達によれば、無罪確定との事だ。

じゃあ、なのは達の達って言うのは？

それは……。

<まったく、私は平気だと言ったのに>

「ばかね。いつでもベストな状態にいる為よ」

<そうですがね……>

「とりあえず、お帰り。ディザイアー」

<はい、ただいま>

「これからがんばろーね、アヴァロン」

<解っています。よろしくお願いしますね、まどか>

まどかのピンク色の指輪型デバイスのアヴァロン。

「アタシ達もな、さやか。それに、グングニール」

<はい、仰せのままに。マスター杏子>

杏子の赤い腕輪型デバイスのグングニール。

「うん。そうだね杏子、エクスカリバー」

<もちろんですよ、さやか>

さやかの青い腕輪型デバイスのエクスカリバー。

「私達もね。ティロ」

<了解です。マイスターマミ>

マミのヘアピン型デバイスのティロ。

「これからよろしく頼むわね。ディザイアー」

<ホムラこそ、せいぜい足は引つ張らないで下さいね>

そして相変わらずの紫色の宝石型デバイスのディザイアー。

……。

「なのは、やっぱり返す」

なのはにディザイアーを突き出す。

<私もその方が良いです、貴女とは組みたくない>

「えっ？ えっ？」

<マスター。ただのお戯れですよ>

「違う、私は真面目に……」

<そうですよ、レイジングハート真面目に……>

<その割には、意見が一致しているし、仲がよさそうですね？>

レイジングハートが面白そうに言う。

<レイジングハートの言う通りだよ。ディザイアー>

<煩いです、エクスカリパー>

<パーじゃなくて、バーです>

<どっちも一緒よ>

<全然違います>

なんなんだか、まったく。

デバイス同士で喧嘩始めてどうするのかしら……ん？

「なんだか、人間みたいだね」

「そうだね、まどかちゃん」

「なのはちゃん、どう思う？」

「仲良しさん。かな」

「喧嘩するほど仲が良いつて言うやつ？」

「それに私は含まれてたりするの？」

楽しそうに話す2人に尋ねる。

「もちろん」

なのはとまどか。

2人が笑顔で頷く。

……まあ、楽しいから良いわよね。

これから、私達の世界が始まる。

魔女なんていない平和な世界の幕開け。

でも、まだ世界にはQBみたいに危ないロストロギアが散らばっている。

そんなのを見逃すわけには行かないよ。

それが数日前、病室で聞いたまどかの提案。

だから、これから始まります。

「本当の魔法少女まどか マギカ」

人間じゃなくなる魔法少女。

魔女にならない魔法少女。

「時空管理局嘱託魔道師、暁美ほむら」

「時空管理局嘱託魔道師、鹿目まどか」

「時空管理局嘱託魔道師、高町なのは」

「時空管理局嘱託魔道師、巴マミ」

「時空管理局嘱託魔道師、佐倉杏子」

「時空管理局嘱託魔道師、美樹さやか」

「時空管理局嘱託魔道師、フェイト・テスタロッサ」

私達7人。

これから魔法少女……続けていきます！

	N	o	t	I	t	r	e	p	e	a	t	s	i	t	s	e	l	f	Y	e	s	G	O
T	o	N	e	x	t	S	t	a	g	e													

番外編 『探求者』

「さあ、覚悟してもらおうよ。QB」

私とフェイトちゃんは巨大な魔女との戦闘後、本来の目的に戻っていた。

「まったく、驚きだよ。僕のことがばれるなんて」

目の前の白い生き物QB、インキュベーターが呟く。

「生きたロストログア破壊者」

フェイトちゃんが睨む。

「やだな。僕は破壊なんて望んでいないよ。むしろ、君たち人間のせいで滅んでいるだけじゃないか」

「何を言ってるの？」

「そうだろう？ 僕は君たちに願いを叶えてあげるから星を守る戦士になってと頼んでいるだけであって、

滅ぼすつもりはこれっぽっちもないんだよ」

「勝手なことを！！」

バルディッシュが、黄色い刃を輝かせる。

私達の目的は、QBの捕獲。

QBはロストログアで、かなり危険度の高いものだった。

「じゃあ、なんで魔女なんて生み出すの？」

「生憎、僕には感情と言ったものがない」

「知ってる」

「だからさ、人は戦いの中で、怒り、悲しみ、憎しみ、嘆き、喜び、嬉しさ。様々な感情とかいうものを見せてくれる

僕は、それが見ただけだよ」

そんなことの為に？

みんなを傷つけてきたの？

そんな酷いことって……。

「金髪の君は、今、どんな感情だい？ 僕に教えてくれよ。白い魔法少女。君は？」

「ふざけてる、貴方は、恐ろしすぎる」

「恐怖？ だけど、そうには見えないね。言葉と、実際は違うものなのかな？」

私とフェイトちゃんは目の前の生き物が恐ろしかった。

感情がないとは聞いていた。

自分がしていることが、みんなを苦しめ、死に至らしめているのに、QBは意に介さずって表情だった。

だからこそ、私は……。

「私は、物凄く悲しいよ。QB」

「ん？ 悲しい？」

興味があるのか、ないのか。それはどうでも良いことで。

「だって、貴方は可哀想だから」

「可哀想？ 僕が？ 訳がわからないよ」

「だからだよ。感情がないせいで、貴方もきつと辛いんだよね？
知りたいのに知れず、傷つけたくないのに、傷つけちゃうんだよね？」

「急にどうしたんだい？」

「今、助けてあげるよ」

私は、そつとQBを抱え上げ、ロストログアを持ち運びする為のケースに収めた。

「……やれやれ。君と言う人間は良く解らないよ。助ける？
何からだい？」

QBは、その赤い目を私に向ける。

私は目を逸らさずに、QBを見つめて微笑む。

「永遠に終わらない、無感情と言う監獄から」

私はそう言つて、ケースの蓋を閉めた。

その日のうちに、ケースは管理局へと引き渡した。

「フエイトちゃん」

「どうしたの？　なのは」

「QBを作った人は、感情があつたのかな」

今では確かめることが出来ないそのことに、私は疑問を抱いた。

感情があるなら、QBにも感情を与えてくれたら、

みんな苦しまず、QBも……。

「きつと、作った人も感情がなかった。ううん。確定は出来ないけれど、

感情というものを知りたくてQBを作ったんじゃないかな」

フエイトちゃんはそう言つて、少しだけ悲しそうな表情を浮かべた。

QB。それは、破壊者なんかではなくて、ただの探求者。だったのかもしれない。

私はそんな事を考えながら、ほむらちゃんの眠る病室へと足を運んだ。

ここまでの補足・登場人物紹介

インキュベーター

QB

- ・侵略者と呼ばれる。
- ・ロストロギア。
- ・魔女を作り出し、それと戦う為と言い、魔法少女を作り出す。
- ・リンカーコアを、ソウルジェムへと変化させる。
- ・侵略と言うより、破壊者が適切。
- ・文明を滅ぼした後、別の世界へと転移する。

ソウルジェム（SJ）

- ・リンカーコアが強制変化させられたもの。
- ・色にになると、そのSJの持ち主は魔女になる。
- ・QBを封印することで、リンカーコアへの回帰可能。

メイン的登場人物

- ・暁美ほむら（魔法少女まどか マギカ）

本作の主人公。

時間に関係する願いの為、時間操作の魔法を所持していた。
なのは世界に来た後、ソウルジェムと共にその力を消失。
以後、暫くは無力だったが、なのはの危機に気づけず、協力できない弱さに苛立ち、

火薬等入手し、フェイトと戦闘。

その日に出会ったアースラの人達から、多種武装変化デバイス『A-207』を受け取る。

因みに、デバイスは『デイズアイア』願いを意味する英単語から命名。

戦闘スキルは、クロノと同等、またはそれ以上の戦闘スキルの持ち主。

多彩な武器を駆使して魔女と戦い続けてきた彼女にとって、多彩な姿へ変わるデイズアイアはまさに適任と言える。

なのは達と過ごしていくうちに、
まどかを救う為に必要なことに気づき、性格も明るくなっていく。

プレシア戦後、元の世界へと戻り、バマミに頭を下げてまで協力を要請。

自身の持つ情報の一部を提供。

その結果、マミは協力を承諾。

その後、さやかが予定よりはやく魔法少女になったことを後悔しつつ、彼女と和解。

彼女とも協力関係になる。

その時にはすでに、笑顔も増え普通の少女に近づいていた。

デバイスとの会話はそれを思わせるものが多く、

さやか曰く「デバイスとの漫才」らしい。

そして現れた佐倉杏子とも戦闘なくして協力関係を作り上げ、ワルプルギスの夜との万全の戦闘へ

ジュエルシードを取り込み、強化されていた魔女との戦闘。

攻撃が通らない絶望的な状況でも、みんながいるから大丈夫。そう信じて立ち向かう。

そして、最後の最後、自分を変えてくれた仲間達との協力により、ワルプルギスの夜を撃破。

その後、

まどかの提案もあり、なのはたちと同じ時空管理局嘱託魔道師になることを決意した。

・鹿目まどか（魔法少女まどか マギカ）

原作では主人公。

本作では脇役レベルの出場回数。

QB曰く「最強の魔法少女になる素質の持ち主」

ほむらが魔法少女になる理由を作った少女。

まどか自体はごく普通の少女だったりもする。

時折ずれているらしいけど、本作では真面目な部分しかないし、登場回数も（ry

ほむら達との約束により、ワルプルギスの夜との戦いの時、

QBに囁かれながらも行くことを拒み、みんなの勝利を願い続けていた。

その後は、QBや、なのはの世界の事を聞き、

他の世界の人たちが、ほむらちゃんみたいな苦しい思いをしないように。

そういう理由で、時空管理局嘱託魔道師になることを提案した。

まどかのデバイスは弓型デバイス『TS-222』

名前は、私達の理想の世界を守り続ける為の力と言い、『アヴァロン』と名づけている。

・巴マミ（魔法少女まどか マギカ）

ほむらと協力してワルプルギスの夜を撃墜した魔法少女の1人。原作では酷い目に遭っていたけれど、本作ではそんなことはない。ただし、ほむらのループ世界（記憶）ではかなり酷いらしい。

ほむらの懇願してまでの協力要請と、ほむらが与えた情報。それにより、真実を知ったマミは、

「貴女は私に真実を教えてくれた。騙されたままの馬鹿な私ではなく、

真実を知っても戦う覚悟のある巴マミにしてくれた。それだけで、私が貴女と協力するのには十分すぎる理由だわ」と言っている。

あんまり好戦的ではなく、仲間であるQBを襲うからほむらが敵であっただけであり、

「QBを殺さないことが条件での協力の承諾」

これにより、ほむらを敵対視する理由を無くしている。

本作で描写はないものの、かなりの紅茶マニアとも言える。

自宅の本棚には紅茶関係の資料がたくさんあるのだとか。

因みに、彼女は厨二病ではない。

彼女は紅茶を楽しむ為に、イタリア語や、英語、スペイン語

とりあえず、数ヶ国語の言葉を理解しており、

その中でも、止めの一撃を表すために。

そういう意味でティロ・フィナーレを用いている。

さやかはの技名も彼女が考えたもの。

蒼い服装に、壮健を握る姿が勇ましい。

そこから考え、蒼勇の刃と名づけた。

本人も、さやかも気に入っている。

彼女のデバイスは銃剣型デバイス『NW-602』

因みに、名前はティロ。

射撃が好きだから。とのこと。

辛い人に癒しを与えたい。

との理由で、時空管理局嘱託魔道師になることを決意した。

・美樹さやか（魔法少女まどか マギカ）

ほむらと協力してワルプルギスの夜を撃墜した魔法少女の1人。

本作中、ほむら以外で1話丸まる視点が貰えた唯一の子。

原作ではかなり酷い目に遭っているが、本作ではそんなことは全くない。

親友と幼馴染の恋愛を影から見守ることを決めている。

彼女曰く、恭介より杏子の方が、今は大切。とのこと。

真実を知らされ、悲しんでいた杏子を説得し、友達になったりと、実はかなりの活躍をしている。

ほむら曰く、「まどかの前に立ち、自分なりのやり方でまどかを守っていた良い人」

ほむらが良い人と素直に認めた。

少しばかりボーイッシュなところがあり、喧嘩っ早いところがある原作と違い、

杏子や、ほむらにあつた事や、

マミの死がない事もあり、喧嘩っ早い部分は抑制されている様子。

杏子とは親友以上だけど何か？ とのこと。

彼女のデバイスは、双剣型デバイス『RB-472』

名前は『エクスカリバー』

どんなものからでも、みんなを守り通せる力。らしい。

私達みたいな思いをする人を減らす為に。
そつという理由で、時空管理局囑託魔道師になることを決意した。

・佐倉杏子（魔法少女まどか マギカ）

ほむらと協力してワルブルギスの夜を撃墜した魔法少女の1人。
結構好戦的だったりするんだけど、ツンデレに近い子だから、つい優しくしちゃう。不思議。

マミと同レベルの戦闘能力の持ち主。

原作では魔女さやかと心中するけれど、本作にそんな設定は微塵もない。

孤独ゆえに人とともに歩むことを拒絶がちな杏子。

自分が人間ではなくなったと知り、ショックを受けるが、さやかにより復活。

さやかの言葉はよほど効いたらしく、さやかは他の『仲間』とは違い、親友の域を超えてる感がある。

実は、本作では一切触れていないけれど、食べ物とかはほむら達と協力関係になるまで盗んでいた。

協力後は、さやかと同居している。

さやかの両親は、そのことについては承諾しているのでなんら問題はないとのこと。

きつい言葉を吐く時もあるが、大抵は優しい言葉ばかり。

彼女自身、新人のさやかに色々言うものの、かなりしっかりとした連携を作り上げていたりする。

彼女のデバイスは槍型デバイス『JV-499』
名前は『グングニール』

全てとは言わない。でも、守れるものは守りたいから。そういう理由で、時空管理局嘱託魔道師になることを決意した。

・高町なのは（魔法少女リリカルなのは）

原作では主人公。

本作ではヒロイン的立ち位置。

本作において、ほむらの性格、言動。

何もかもに一番影響を与えた人物。

ほむら曰く、「雰囲気等、まどかに似ている」とのこと。

ほむらと出会う少し前までは普通の少女だった。

彼女の魔法少女はほむら達とは違い、魔女にはならない。

最初の時は、ほむらに敬語を使い、

馴れ合うつもりはないと言われて怒鳴る。

なのはは、世界は偶然で出来ていると言ったり、

聊か、小学生離れた考えをしている時もあるけど、

小学生です。

ほむらだけでなく、フェイトにも影響を与えている。

本作においては、ほむらという仲間であり、相談相手。

まあ、相談を受ける方が多いけど。

とにかく、いる為、

アリサやすずかと喧嘩した場面はない様子。

あんまり解らないが、少しだけほむらに好意があるっぽい。

そつえば、ユーノのことを話していた時にほむらが別のことを考えて上の空だったことを、

彼女は……。

さておき、友達を追いかけて違う世界にまで来ることから、

かなり、友達想いであることがわかる。

魔力や素質がかなり高いけれど、どの程度のレベルかは不明。戦闘能力も、訓練がないため、戦闘が僅かに多いさやかに技術面では劣る可能性がある。

使用デバイスは『レイジングハート』

人の役に立ちたいから魔法少女になった。

原作でそう言っているが、本作で言っていたら、ほむらに引っ叩かれていたかもしれない。

因みに、本作での理由はほむら達と一緒に。

この手で救える人がいるのなら、私は救ってあげたいから。

そういう理由で、時空管理局嘱託魔道師になることを決意した。

・フェイト・テストロッサ（魔法少女リリカルなのは）

原作ではヒロイン。

本作でもヒロイン。

唯一立ち位置に変動がない。

最初のころは、なのはたちの敵。

なのはと話し、ほむらと話し。

それで徐々に変わっていった。

ほむら曰く「あの子は私と似ている」とのこと。

母親に笑ってもらいたいから。

そんなたった一つの願いの為に奔走する姿は、

まどかを助ける為に。

そんな思いで延々と同じ時間を生きていたほむらと、どこかしらに類似している。

基本無口で、というか単に恥かしがり屋でもある。
敵対関係になれば話すのだが、
友達の名前を呼ぶだけで顔を赤くする。
巷では、なのはが好きなんじゃない？
とか言われている。

戦闘スキルは、マミ、杏子に少し劣る程度。
ただし、魔力的にはなのはを超えていると、エイミーさんは仰っております。

使用デバイスは、『バルディッシュ』
魔法少女になったのは元々。
なのはと、ほむら。みんなの世界をみんなと共に。
そういう理由で、時空管理局囑託魔道師になることを決意した。

デバイスたち

・デイズアイアー（オリジナルデバイス）

正式名称。多種武装変化デバイス『A-207』
かなり、というかとてつもなくふざけた性格をしている。
空気が重いところでもかならず、口を出している。
ほむら曰く「本当に機械なのかしら」
その言葉通り、全てのデバイスの中で、一番個性豊かである。
ほむらに喋りたい。と愚痴ったり、
マミに頭を下げてまで協力を願っている最中に、
相手に対し、「聊か面倒な方たちですね」と言って、
しかも、真面目な空気を壊した理由が、
デイズアイアー曰く、「学校で喋らせてもらえなかった」から。

ただ、ほむらからしてみれば、まんざらでもない様子であり、かけがえのない大切な仲間だと思われる。そのことは最終話において、

私の魔法の能力も消えた。

少し、惜しいことをしたかもしれない。

それはべつに時間魔法ではなくて、デバイスを手放すことになることが。

と、心の中で呟いてることからも伺える。

だが、戦闘においては完璧すぎるほどにほむらたちをサポート。自動で盾を形成したり、瓦礫を砕いたりするほど。

ほむらは貴女と呼んでいるため、女性なのかも。

因みに、名前の由来は、願い。d e s i r e。である。

たびたびほむらをからかう光景は、

さやか曰く「2人の漫才」

さやかが人間ではないことを知ったときも、

その2人の漫才は、良い意味での笑いをさやかに与えている。

因みに、デザイナーはみんなを呼び捨て。「ホムラ、サヤカ、マリ」等。カタカナである。

実は、まどか達のデバイスの感情プログラムに少しだけ影響を与えていたりする。

・アヴァロン（オリジナルデバイス）

正式名称。弓型デバイス『TS - 222』

性格は多分真面目。

真面目だが、潔癖と言うわけではない。

ディザイアーには劣るが、アヴァロンもまた個性がある。
口調等に激しい変化はない。

むしろ、普通の少女みたいな感じ。

登場は少しだけなので、戦闘能力等是不明。
ただ名称通り、展開すると弓である。

名前の由来は、理想郷を示す『アヴァロン』から。

・ティロ（オリジナルデバイス）

正式名称。銃剣型デバイス『NW - 602』

性格は幼女っぽい感じがある。

ちなみに、他のみんなと違い、

彼女だけは「マイスターマミ」というふうに、

私の主である証明をつけている。

アヴァロンと同じく戦闘能力は不明。

展開すると、銃口の先に刃物がついており、

それはほむらの指示である。

万が一接近されたらどうしようもないから。

その保険になっている。

ソウルジェム時代とは異なり、

同じマスケット銃に見えるが、単発どころか連射可能。

さらに、直射系ビーム砲撃まで可能にしたティロの名の通り射撃デバイス。

因みに、ティロとは、射撃と言う意味がある。

・エクスカリバー（オリジナルデバイス）

正式名称。双剣型デバイス『RB-472』

性格は少し真面目。

最終話ではディザイアーにからかわれている描写がある。
アヴァロン同じく（ry

展開すると、双剣になる。

右手に蒼色、左手に紅色。

蒼色は言うまでもなくさやか、紅色は杏子を意味する。

二つを融合させて巨大な黄金の剣にすることも可能。

残骸を飛ばしたり、斬りつけたり。

近距離中距離型だと思われがちだが、

離れてしまえば、黄金の剣で真つ二つがオチ。

名前の由来は伝説に出てくる『エクスカリバー』

・グングニール（オリジナルデバイス）

正式名称。槍型デバイス『JV-499』

性格は従順。

彼女の要望で蒼色。

理由はいうまでもない。

長くもなく短くもないほどよい長さ。

しかし、巨大化から収縮まで。

自由自在。

名前の由来は、伝説の武器『グングニール』

第0話 『プロローグ的な?』

「さて、この部屋も模様替えね」

<ボツチの部屋>

「砕いて粉にされたい?」

<冗談だけど、でも。もの寂しいってことは事実。

あの戦った魔女のことばかり。ホームラ。私は嬉しいよ>

「機械が嬉しいなんて」

<私は機械じゃないからね>

音声の笑い声が、耳に届く。

それはただの機械的な笑い声のはずなのに、

私には、人間が笑っているようにしか思えなかった。

<貴女は本当に、変わった。良い方向に>

「私の昔を知っている口ぶりね」

<それはもう、貴女の記憶は覗かせて貰ってるから>

「最低ね。プライバシーもなにもあったものじゃないわね」

ただ、どうしてか。

私は別に、デザイナーを憎む気にもならない。

むしろ――

<だからこそ、私は貴女の微笑む姿が、マミ、サヤカ、キョウコ。

そして、マドカ。

みんながいるこの世界が今、目の前に広がっていること。

苦しみ続けた貴女が、解放たれ、

部屋の模様替えという形で、新しくなることが、嬉しい>

「機械の癖に、まるで人間のような」

<出来れば、人間になりたかった。と、欲を出せば私は思う>
欲。

明らかに、普通のデバイスの考え方じゃない。

<私は、ただの機械。ロストログアでなければ、人間でもなく。ただの……>

「……貴女がただの機械だとしたら、逸れは大問題。

それに、貴女は貴女。機械ではなく、ディザイアー。私の仲間でしょう?」

私はすらつと、そう漏らす。

まるで、予め考えてあつた言葉のようだった。

<仲間、とは。歯がゆいお言葉を>

彼女が笑っている気がした。

「つて、なんでこんな辛気臭い話になってるのよ」

<さあてね。私は知りませんよ。して、ホムラ>

「ん?」

<気になることがあるんだけど、ホムラが海鳴で出会った足が不自由な子。電話しないの?>

何で知ってるのよ。

なんて驚きはいさっきのプライバシー無視な言葉でかき消された。

「そういえば、いたわね。そんな子」

<電話しないんですか?>

「出来るわけじゃない。電話番号書いた紙は……」

<八神はやて。電話番号は……>

「何で知ってるのよ!」

<まあ、貴女の記憶覗いたので>

もうやだ。

私が覚えていない記憶まで……。

< あっ、もしもし。はい、突然すいません >
ん？

「ちょっと、何してるのよ」

< あっ、どうも。ずいぶん前に病院でお会いした…… はい。暁美ほむらです >

「何してんのよー！」

私が考え事をしている間に、ぶつぶつと喋りだしたディザイアー。まるで誰かと話しているようにも聞こえる。

つて、まさか！

< 保留にしたから、後は貴女が話して良いよ >

「電話した……とか？」

< ご名答。私は電話も出来る高機能 >

「……日用品にまでなれるなんて、貴女何なのよ」

< まあまあ。ともかく、電話。保留切るよ >

「えっ？」

「もしもし？ 病院の子なん？」

…… 本当にできるのね。

「えつと、八神はやてで良いかしら？」

「へそんな、堅苦しくなくてええよ。それより、名前は暁美ほむら。ほむらちゃんでええ？」

「ええ、良いわよ」

なんていえば良いのかしら。

会話なんて……。

「その声やと、悩み事は解決したんやね？」

「まあ、何ヶ月もたつとるし。当然やけど、ちよあ、寂しいで」

「あ、ごめんなさい。貴女には相談できないようなことだったから」
「なんや、酷い話やなあ。でもま。解決したならええけど、なんで電話してきたん？」

「デバイスが勝手に……なんて一般人に言うわけにもいかないわよね」
「その時、貴女に心配かけたこと思い出してね。大丈夫って連絡を」
「そうなん？ 態々ありがとなあ。なんなら、近いうちにあわへん？」

「……え？」

「会う？ 私達が？」

「嫌ならええよ。別に、ただ家族に会わせたいなんて思っただけやし」

「海鳴市よね？ 貴女」

「そやけど……ほむらちゃんはやうん？」

「いえ、海鳴市なら平気。けれど、家は……」

「なら、あの病院のところで待ち合わせや。それならOKやろ？」

「ええ、じゃあ、日付は……」

「今週の土曜日なんてどう？」

「うん。平気。じゃあ、土曜日に会いましょう」

「ほな、またな」

「……あれ？」

「なんで会う約束なんてしてるのよ。」

「まさか会う約束するとは」

「貴女のせいでしょう！」

「まあまあ、海鳴市はナノ八達にあえるんですから」

それもそうなんだけど……12月……ね。

「早いものね、月日が経つっていうのは」

＜あれからもう、6ヶ月以上経ってますし、そうですね。はいです＞

八神はやて……か。

今の私なら、仲良く出来るかしらね……。

「まずは模様替え終らせないと」

「まだ終わってないとか、なにしてたってかんじですよ。割と真面目に」

「大真面目で貴女に殺意がきばをむいたわ」

置いてあったハンマーを握り、

デザインを睨む。

くえ？　ちよつ、ハンマーは、らめえええええ！！＞

デザイナーの悲鳴が響き渡った。

第1話 『八神はやて』

「ふう、昼に集まるって後付だったけれど大丈夫なのかしら」

私は、見滝原から約1時間（次元転送必要）かかる海鳴市に来ていた。

かなり離れているとか考えていたけれど、とても近かったらしい。

ねえ、本当に喋っちゃダメ？

当たり前。一応、普通の世界なのだから、貴女が喋っていては大問題よ

つまらない

「知ったことじゃないわよ」

私はそう吐き捨て、白い息を自分の両手に吐きつける。

寒い。

この寒さも、

私があゝの悪夢から抜け出せたことの証明に感じる事が出来るから嬉しい。

海鳴市総合病院。

私がこの世界に来た時、最初にいた場所。

懐かしく思い、建物を見上げる。

「あいかわらず、綺麗な髪しとるんやね」

「え？ あ……」

突然の言葉に振り向くと、車椅子の、あの懐かしい少女がいた。

ただ、金色の髪の女性が同伴しているけれど。

「どうも、はじめまして。晁美ほむらです」

「ああ、初めまして。シャル。と、言います」

……この世界にしては違和感ある名前ですね

黙ってなさい

「なんや、かたつくるしいなあ。でや。お久しぶりやね。ほむらちやん」

「ええ、まあ。こう普通に話すのは初めてだけれど」

あの時は冷たく突き放す言い方をしていたから……。

「それで、どうしようかしら」

「そのこと何やけど、家に来る気あらへん？」

家？

彼女の？

「ええ、ぜひとも」

「シャル。そうゆうわけや。帰るで」

「はい」

……？

しゃーべりーたあああああああ

煩いわね。ダメだって言ってるでしょう！

そんな、殺生な……

喋ってないと死ぬの？ 貴女

うん。だから……

じゃあ、死んで見せなさいよ

やあああああああ！！

……もういや。

誰か助けて。

「ほむらちゃんは、どこにすんどるん？」

「え？」

……。

どう答えれば良いか……。

異世界です。

なんて言ったらただの電波少女になっちゃうだろうし。

「少し遠いところよ」

「へ？ そう言ってくれたらよばへんかったのに。

態々ごめんなあ？」

「別に良いわよ。どうせ暇だったから」

やーいボツチボツチ

貴女壊されたいの？

どっちの意味で？

物理的な意味で

だって、暇だからつい……

それ以前にボツチじゃないし。

まどか、さやか、マミ、杏子。それに仁美やクラスメイト。

ワルプルギスの夜以降はみんなと話すようになったし、

マミも、同学年の友達に囲まれているし。

前と違う意味での魔法少女になると、私達の生活も変わるのよね。

私は私でお化け屋敷とかに…… あうあう。

「どないしたん？」

「あ、ううん。なんでもないわ。病院まで、毎日この道を？」

「そうなんよ。まあ、シャル達が居てくれへんかったらめんどくさくなつてたかも」

なんで治っていないのか。なんて疑問はおかしいのかしらね。

……

どうかしたの？

なんでもない。私は少し寝る。つい。つ・い！… つい寝言を言
っちゃうかも

そうなたら叩き碎く

「へえ、立派なお家じゃない」

私は、はやての家を見て一言。
中々に大きい建物。

「そうでもないんよ。まあ、入ろつよ」

私ははやてに続いて家の中に入る。

……？

始めに感じた違和感。

そしてそれは言葉として外に出た。

「ご両親は？」

「——いない」

あ……。

「ごめつ」

「気にせんでええよ。今はみんなが居てくれるから、
寂しくもなんとまあへん」

寂しいとか、そういうことじゃ……。

でも、心のそこから幸せそうだし。

「なんや、ヴィータはまたでかけとるん？」

「ええ、夕方には戻ると」

「何人でここに住んでるの？」

「5人やよ」

「へえ、多いのね。羨ましいわ」

私なんて生意気なデバイスと2人きりだって言うのに。
なんて嫉妬を抱きながら、はやてにお茶を頂く。

「そういえば、家族に会わせたいって」

「そうなんやけど、今はシャマルしかおらんみたいなんよ。

ちよお、悪いことしてもおたなあ」

寂しそうな表情を浮かべるはやてに思わず、

私まで寂しくなってくる。

「べ、別に気にしなくて良いわ。私は貴女に会えただけで嬉しいわ」

「あはは。ありがと。私もほむらちゃんの元気そうな姿を見れたのは嬉しいで」

……

まったく。あれほどわがまま良いながら、本当に寝ちゃったの？

別に静かだから良いんだけど。

逆に不気味と言うか。

「はやては読書家なのね」

私ははやての部屋に入って呟く。

本棚に詰められた様々なジャンルの本。

けれど、はやての年頃に相応しいはずのものがなかった。

「読書家なんていいもんなやない。私はただ、それしかすることがなかっただけや。

見て解るとおり、私は学校に行つてへん」

はやての部屋になかったのは、学校の制服。鞆。

それらがなかった。

なんてことなの……。

足が不自由と言っただけで？

そんな哀れみに溺れながらも、彼女の明るさに触れているうちに、
時間は経ち、夜になっていた。

第2話 『襲撃?』

「シャルさん、別に送る必要は無いんですよ?」

「いいえ、だって、はやてちゃんのおんな笑顔。

見るの初めてだったから、そのお礼なの。」

はやて……。

シャルさんはそういうけれど、

時折悲しそうな表情をしていた。

私に、何とか出来ないのか。

なんて考えたけれど、いくら魔法があろうと……。

ホムラ

どうかしたの? 本当に寝ていたの?

帰ったら少し、話がある

……?

「——ねえ」

?!

黒髪に黒い服装。

誰?

いや、目的は?

シャルさん?

いや——?!

<オハン展開>

「?!」

……。

「何が目的か答えな——」

<失敗したああああ!!>

な、なに?!

「ど、どうしたのよ?!」

あつ、シャルさんに見せてしまったこと……?

<攻撃は胸を狙っていましたよね?>

「え、ええ。貴女のおかげで死なずに……」

<胸が傷つけばよかったのに>

「死ねと?」

<違いますよ。死なせはしませんよ>

「じゃあ何よ」

<いえ、胸の治療の際、ついでに豊胸できるんじゃないかなあって>

「大きなお世話よ!!」

つたくも……。

「貴女は何が目的なの?!」

<ホムラが絶壁じゃなくなる……>

「貴女は黙っててもらえるかしら!」

……調子が狂うわね。

真面目に相手するのやめようかしら。

さておき。

私は目の前の黒い服に身を包んだ敵を睨む。

「目的? 魔法少女を狩りにきただけだよ?」

「ふざけてるわね。まったく。そう簡単に死ぬわけには行かないわ」

「そんなの知らないよ。死んでもらうだけだし!!」

<敵の武装は爪ですか。どうしますか?>

「いいじゃない。私達も近距離戦にしてあげましょう」

<本気ですか? うわぁ、正気とは思えない>

「貴女本気で壊すわよ?」

<らめええええ。さて、冗談は置いておいて>

切り替えが早い。良い事なのか悪いことなのか。

「じゃあ、死んでね」

<貴女が死んだらどうでしょうか?>

私の剣と、相手の爪がぶつかり合って、金属音が響く。

「貴女の名前は?」

「呉キリカ。親切でしょ。曉美ほむら!」

「ええ、ごていねいに有難うね。なぜ、殺す必要があるのかしら」

「おゝしえない!!」

<そのふざけた態度嫌い!! 真面目な時にふざけないでよ!!>

貴女が言うか?!

いえた立場じゃないのに!!

何度かやりあった後、キリカが立ち止まる。

……ん?

「予想以上に強かった。うん。仕方ない。

だから、織莉子織莉子織莉子!!

今から帰るからね!! はぐはぐしようね!!!!!!

好きだよ、織莉子!!!!!!」

そう叫びながら、キリカが走り去っていく。

……え？

<うわぁ、頭大丈夫なの？>

「私は貴女の頭も疑うわ」

って……シャルさんは？

彼女ならすでに帰りましたよ。まあこんなの目の前で始められたら、

誰だって逃げ出しますよ。とりあえずは、帰りましょう。みんなに報告も必要です

私達はこのことを報告する為に、急いで見滝原へと帰ることにした。

シャルさんごめんなさいね、謝罪は後日必ず！！

第3話 『襲撃?』

「ほむらちゃん、出かけてるみたいだね」

私は、アースラから見滝原へと戻ってきていた。

それでもうすでに、夜になっていたけれど、

私はほむらちゃんに会おうかなって来たのに。

<まあまあ。予定では、明日フェイトと戻る予定が、急に今日戻ることになったんですから>

「あ〜う〜」

でも、でも。

1週間もほむらちゃんに触れてないし、会ってないのに。

「仕方がない。かえ——」

<——まどか!!!>

え?

<正面から攻撃……デコイ?!>

正面からの奇襲を、魔力シールドで防いだものの、もう1つの本命の攻撃が背後に迫っていた。

「見つけたあ!!」

「誰?!」

<プロテクション!!!>

不味い、両端からの攻撃。

防御力は……半減して……

<下がってまどか!!!>

アヴァロ——?!

次の瞬間、アヴァロンの展開していた魔力シールドが砕け散り、私は吹き飛ばされて建物の壁に突っ込む。

それも、アヴァロンが防ぐ。

<ぶ、無事ですかまどか！>

「な、なんとか」

でも……なんで急に？

「なんなの？！ どういう目的！」

「何だって良い！」

「私は良くないよー！」

私の前に現れた、というより、

私を襲撃してきたのは赤い服に身を包んだ少女。

多分。ううん。

確定に近い確率で魔法少女。

「アヴァロン！」

<はい！>

「レイン・アローー！！」

私の打ち上げた一本の矢が、数千の矢となって降り注ぐ。

「うわあああ？！」

私の矢が、相手に突き刺さっていく。

<貴女は何がしたいのですか！ お答えなさい！>

「てめえー！！」

気配が……かわっ……

「アイゼン！ カートリッジロードー！！」

カートリッジ……？

<魔力数値の倍増?! まどか! 逃げっ——>

「逃がすかぁ!! ラケーテン・ハンマー!!」

<不味い、あれは……>

「アヴァロン?!」

ロケットのように回転し、勢いをつけた魔法少女が私に向かって突撃してくる。

それを防ごうと、アヴァロンが盾を張る。

「アイゼン!! ぶち抜けえええええ」

<了解>

<さ、せる……わけにはいかない!!>

私から魔力を吸い、全力で盾を張るアヴァロン。

「アヴァロ……」

「アイゼン!! カートリッジロード!!」

<二回目の魔力増幅?! まどか! ごめ——>

アヴァロンが何かを言う前に、盾は音を立てて砕け散り、魔法少女の攻撃は、

私のバリアジャケットまで撃ちぬく。

「きゃあああ?!」

壁にぶつかった衝撃は、何かに阻まれることなく、直接私に伝わり、一瞬息が詰まる。

なんで?

急に、なんでこんなことに?

「……私が、何かした……の?」

「……」

沈黙……。

あゝあ。

ほむらちゃんに会いに來ただけでなんでこんなことになるのかなあ。

「こういう時に助けに來てくれるのが、騎士つてものなのになあ」

<私が騎士です！ 貴女を守ると決めた私です！ 守って見せます！>

「ダメだよ、アヴァロン！ アヴァロンはすでにボロボロじゃない……」

私が握るアヴァロンは、すでに輝が全体に走り、矢を放つだけで碎け散りそうな状態だった。

「やるぞ、アイゼン」

<了解>

っ……。

アヴァロン……。

みんな……。

振りかぶった敵の攻撃は、私を確実に狙いつけていた。

第4話 『戦い』

「——ぶっ飛ばせ、グングニール!!」
「?!」

私と相手の前に入ってきた赤い魔法少女。

私の友達の、杏子ちゃんだった。

杏子ちゃんの伸ばした槍が、少女を突き飛ばす。

「誰なんだよお前は!! そいつの仲間か?!」

「ん」。言葉で表せるほど、小さい関係なんかじゃないよ。さやかちよつと、まどかを頼むよ」

「きょう——」

「まどか、少し待ってて。私が今、回復の魔法を」

私の隣には、青い魔法少女。

さやかちゃんがいた。

「アンタ。名前は? って、まずはアタシから。か。時空管理局嘱

託魔道師、佐倉杏子。さあ、アンタの目的と名前聞かせてもらっよ」

「っ……流石に敵の数が多いか」

敵はそう呟いて、飛んで逃げていく。

「逃がすわけ……ないじゃない」

「?!」

逃げようとした敵は、黄色い光の糸にからめとられて、縛り上げられる。

「マミ……さん?」

「ごめんなさい。すぐに結界に気づくべきだったわ」

<マイスターマミ!! 右方向、ブレイク来ます!!>

「てええええい！！！」

「?! 獣人? 何が目的！」

マミさんに向かって突撃してきた狼の耳みたいのを生やした男の人に、マミさんは魔力シールド越しに尋ねる。

「さてと、アンタには吐いてもらうよ。洗いざらい——」

<正面ガード!!!!>

空で戦闘していた杏子ちゃんに、新しい敵の攻撃が撃ち込まれた。

「紫電……一閃!!」

「ぐうつ?!」

<重すぎる……バリア、ブレイク!!>

グングニールの声に続いて、爆発が起きる。

……みんな。

みんなが戦ってるのに。

私は……。

「まどかはここにいて」

「え？」

「私は杏子とバトンタッチする。」

剣には剣つてやつ? それに、杏子のグングニールに結界を打ち砕いてもらいたいからさ」

「わ、私も……」

<ええ、私達も戦闘に——>

<2人共馬鹿ですか? そんなボロボロの体で戦闘に参加されても足手まといです。

素直にさやかのお防御と回復の魔法陣の中に居てください>

「そうそう。頼っちゃってくださいよ。親友を。ね？」

そう言ってさやかちゃんは剣を持つ人のところへと飛んで行った。
……。

赤い魔法少女どうしの戦い。

剣を持つもの同士の戦い。

マミさんも戦ってる。

みんな!!

まどか?

私が破魔の矢で結界を撃ち抜くから、みんなは戦闘に集中してて

「いけるよね、アヴァロン」

<当然です>

私はさやかちゃんの結界から出て、矢を構える。

「カウントお願い」

<了解5……4……>

「ブレイクウウ」

<3……2……ワ?!>

「あぐつ?!」

「まどつ……」

<さやか!>

「すまない。邪魔させるわけにはいかない」

一瞬だけ気を逸らしたさやかちゃんが、目の前でビルへと墜落していく……。

そして、私の体からは誰かの腕が伸びていた。

胸のあたりを貫いたそれは、私のリンカーコアを握っていた。

<まどか! いけますか?!>

「……うん。ブレイク・アロー!!」

私の極太の矢が、結界を打ち砕く。
その間にも、私のリンカーコアから魔力が奪われていく。
結界を完全破壊、ブレイクアローの終了と共に、
私はその場に倒れこんだ。

第5話 『ベルカ式』

「ま、まどかは?!」

「無事。命に別状はないけど、魔力がかなり喰われてるらしくてさ。暫く魔法が使えないんだと」

さやかが悲しそうに呟く。

私が居ない間に、なんでそんな……。

<サヤカ。みんな、デバイスを持っていないようですが?>

「ああ、こつぴどくやられちまってね。マミのは無事だったけど、一応、検査とかってことで今、技術部に回してる」

杏子が苦笑して言う。

「みんなが苦戦した?」

「それがさ。アタシ達のデバイスとは違う形らしいんだよ。

グングニール曰く、ベルカ式。とかなんとか」

<ベルカ式?>

「知ってるの?」

<少しだけなら。まず、私は特注のものですが、

みんなのは、ミッドチルダ式というものです。ミッドチルダ式というのは、

使用者の魔力のみを使う比較的安全なもの。その一方で、ベルカ式というのは、

いわばドーピングです>

ドーピング?

<カートリッジシステム。魔力を込めたカートリッジを使用すること、

一時的に爆発的な魔力を得る。ただ、身体に多大なダメージが残る>
「なんで？ 式として使われているんなら安全じゃないのか？」

<キョウコは大馬鹿ですね>

「なっ……」

「ドーピングと言っていたでしょう？」

ドーピングが体に良いわけないでしょ」

<ホムラの言う通り、自信の魔力量を大幅に上回る魔力を使用すれば、

最悪、制御しきれずに自滅。それもありえる為禁止された式なんです>

「つてことはあれか？ 制御できれば、最強つてことか？」

<そうです。貴女方の相手の画像はないらしく、非常に残念です。私も戦ってみたかった>

「不謹慎よ。みんなやられたのだから」

<当たり前です。ミッド式でベル力に、それも彼女達のような戦闘スキルが低い人が、

いまだにベル力を使う人に勝てるわけがありません>

なんで？

ベル力式は、近年では存在していないはずの戦闘法。それも数百年単位で。

なのにも拘らず、どうして。どうしてベル力式を持っているのか。過去の人間の未来干渉、及び、受け継がれてきた家宝。

または、永遠に死ぬことが出来ない人間か。あるいは……

あるいは？

仮定なのでそれはまたいつか

なによ。

もったいぶらなくてもいいのに。

「とりあえず、まどかに会いに行ってくるわ」

「ああ、アタシらはもう会ったから良いよ。行ってきたな」

「？ ええ、そうさせてもらっわ」

「まどか、ごめんなさい」

「え？ 入るなりそれは変だよ。ほむらちゃん」

まどかの病室に入ってまずは謝る。

……まどか。

「でも、貴女の危機に、私は傍にいれなかった」

「馬鹿だなあ。常に守ってくれる必要なんて無いよ。現に――」

「でも、でも……。死にそうだったんでしょ？

ボロボロだったんでしょ？

なのに、なのに……。？！」

俯いていた私を、まどかの腕が抱き寄せた。

「まど……」

「泣かなくて良いじゃない。そんなことされたら、私も泣いちゃうよ？」

ほむらちゃんには、ずっと守ってもらってた。だから、気にしないで？」

私には私の力がある。自分を守る力。今回は敵が上手で負けちゃったけど、もう負けない」

……まどか？

「だって、ほむらちゃんを悲しませたくないもん」

「まどかぁ……」

「泣かない泣かない。綺麗な顔が台無しだよ？」

まどかの優しさが……辛い。

守ることの出来なかった私を……

だからさぁ、別に良いって言ってるじゃんマドカ。

自分責めすぎだよ。それに、どのみち私達だって戦闘してたんだ。

あまり責めるものじゃないよ

慰めるのか罵倒するのか、いらつかせたいのか。はっきりして頂

戴

1ついえるのは、慰めるつもりは微塵もないということ

連れないのね

「——ほむらちゃん、戦闘してたってどういうこと？」

……え？

<マドカだけ除け者なんて可哀想でしょ？>

何で余計なことするかな！！

第6話 『転化』

「実は、私は海鳴市に行ってたの」

「なのはちゃんに会いに？」

「ううん、別の用事。それはどうでも良いけど、
帰り道、敵に襲われた」

「無事だったの？ って、ここにいるんだから無事だね」

「……でも。」

あの敵は。

「ほむらちゃん？」

「あつ。で、敵は私を。正確には魔法少女を狩りに来たって」

「嘘……なんで？」

＜理由は知らない。でも、もしかするなら。

マド力達を襲撃したやつらの仲間かもしれない＞

……私も考えていたけど。

こつもあつさり仮定のまま口に出すのはどうかと思う。

病室の外は真つ暗。

別に夜って訳じゃなく、

時空管理局の本局に居る為、周りが次元の波に包まれているから。

「兎に角、注意が必要ね。一応、私は海鳴市でなのはとフェイトと一緒に警戒態勢に入るから」

「私は……ごめん。手伝えそうにないね」

「気にしないで。貴女はまず、魔力の回復を」
「うん」

私がまどかの病室を出て、海鳴市に向かおうとした時だった。

<ホームラ。技術部に寄って行こう>

「なんで？」

<これからの戦いに必要なこと。でも、多分行く必要が無い可能性もあるけれど>

じゃあ、行く必要ないじゃない。

なんて思いながらも、私は技術部のまどか達のデバイスが居る場所へ向かった。

「あの、暁美ほむらですが、技術主任の方は？」

「ああ、私だよ。マリエル・アテンザ。マリーで良いよ」

<マリーお久しぶりです>

「あつ、ディザちゃん！！ 元気にしてたみたいね」

<ええ。今は余計なことを一切省きます。>

ナノハ、マドカ、フェイト、サヤカ、キョウコ、マミ。全員のデバイスにカートリッジシステムを搭載してください>

「えっ?! それって……」

<はい。ベルカ式に転化してくださいと頼んでいます>

「貴女何言ってるの?! それは体にダメージを……」

<私達は、私達のマスターなら、使いこなせると信じています。だからこそ。>

私達の力不足で、貴女方を死なせたわけではない!! ミッド式では守ることは出来ない。これは全員わかっていること>

グングニール……。

<はい、ディザイアーの言う通りです>

エクスカリバー……。

< 私達は守りたい、負けたくない。だから…… >

「いいんじゃないか？ アタシ達は構わないぜ？」

「杏子？」

「ティロもそれには賛成のようですし。」

私も、強くなる為なら」

< さっき話したとおり、扱いを間違えれば自滅しますよ？ >

「もんだいないよ。私はエクスカリバー。それにみんなが居ればなんだって出来る」

「そうだぜ、デイズアイア」

「鹿目さんも、きっと同じ意思です」

……みんな。

「お願いできますか？」

< 私からも、お願いします >

私達全員でお願いする。

もちろん、なのは達にも言わないと。

「んゝ解った。そんなをお願いされると断れないよ。でも、扱いだけは気をつけてね」

「……はい」「」「」

第7話 『黒歴史』

「先週に続き、ごめんなさいね、お邪魔なんてさせてもらって」

「ええで、ええで。なんなら一緒に住むのもかまわへんで」

な、なんて高テンション。

まるでさやかのような。

「一緒に住んで良いの？ お言葉に甘えるわ」

「ほんま?!」

「冗談よ」

「……へえ、酷い人なんやね」

とたんにどんよりと重い空気があたりを包み込んだ。

……ど、どうするべき?!

いや、もうこれ、お泊りするから許してって選択肢しかないけど

……まあ今日から暫く海鳴市在住だから良いわよね

私は、ディザイアーと相談し、

「きよ、今日泊まって行っても良いかしら」

「か、かまわへんよ」

良かった。笑ってくれた。

……もしかしたら、はやてには友達が居ない？

ずっと入院とかしたり、リハビリとかで、学校行っていないらしいし。

だとすれば。

「ねえ、はやて」

「ん？」

「私達は、友達よ?」
珍しいこともありますね。ホームラゴ――
黙ってて

「貴女が良ければ。だけれど」

「友達。なってくれるん?」

「ええ」

「私は、こんな体やから、遊ぶことも出来へんし」

「家の中でも遊べるわ」

「色々と不自由やから手伝ってもらわなあかんし……」

「だとしても、私は構わないわ」

私ははやての言葉に即答する。

なんでこんなことをいえるのか。

自分でも、わからない。

ただ、1人で居ること。

家族が居るとしても、友達が居ないのは、寂しいのだろうって私は思った。

「急にそんなこと言われると、なんや。恥かしい」

「ふふ。私も恥かしいわ」

そんな会話をしていると、帰宅の音が部屋に響いた。

「ただいま」はやて

「ん、おかえり、ヴィータ、シャマル」

「どうも、お邪魔しています。暁美ほむらです」

「……ヴィータ」

……?

なんだか少し、敵意がある。
なんでかしら。

私が魔法少女であることをシャルさんが話した？
でも、それだけじゃ理由に。

……気のせい。よね。

「今日はどうかしたの？ 暁美さん」

「遊びに来たんです」

「シャル！！ ほむらちゃんが泊まっていくことになったんよ！
！ 今日は豪華やでえ」

「そ、そうなんですか？ よ、良かったですね！」

……

「なあ、ほむら。だっけ？」

「ええ、なに？」

「……みんなで人生ゲームやろう」

「はい？」

睨んできたから何かと思ったら人生ゲーム？

「嫌か？」

「いえ、良いわよ」

人生ゲームって、なに？

「わーい。私がいっぱんや」

「私は2位でした」

「ちえっ、あたしは3位かあ……でもまあ。

なんだ。その、ほむら。泣くなよ」

「な、泣いてなんかいないわ」

人生ゲームで破産とか……ダメダメすぎる。こ、これはほうく……

……くくくつ、あははははは

ディザイアー！！

人生ゲームで借金一億円のホムラさん？　なんでしょうか……くくく

こ、こんな屈辱ありえないわ！

なんで、なんでなのよ。

悲惨すぎるわ……。

離婚時になんで、2000万なんて払うのよ！！

しかもその後会社倒産。

路頭に迷うって何このリアルな人生ゲーム。

オレオレ詐欺に引つかかるとかもう……嫌。

「人生ゲームは禁止よ禁止！！」

「まあ、苦手なものもあるで」

「ニヤニヤしながら言わないで、お願い。黒歴史よ！」

「しつつかし、人生ゲームで破産なんてあるのか？　普通」

「説明書には書いてませんよ」

「な、なんか恨みでもあるわけ？　ねえ、もう忘れて頂戴」

私が軽く涙目になりながら言うと、3人とも言うのを止めてくれた。

くつろれつきし♪ 人生ゲームではつまん♪
ディザイアーには、
暫くからかわれそう……。
生きていけるのかしら。私。

第8話 『会わせてみたら』

「はやては良い子なのね」

「ん？ 当然だろ」

私はテラスで空を眺めながら、ヴィータと話す。
それなのに。

酷いものよね……。

「なんとかならないの？」

「……なんとかする」

「でも……」

「大丈夫、絶対治る」

ヴィータ……。

「そうね。はやては良い子だから。きつと、治るわよ」

「……うん。なあ、ほむら」

「？」

「傷つけないのに、守る為には仕方のないことって、あるの
かな」

……？

「どういう言う意味？」

「ごめん、ちょっと気になった漫画の先を想像したくてさ」

「……そう」

ヴィータは、先に部屋へと戻っていく。

綺麗な月夜ですね

そうね

…… ホムラ

なあに？

たとえば、相手が正義でも。自分の正義を貫いてください
どういう意味よ

正義の相手が悪だと。そんな決め付け方が出来るのは、架空の
世界だけと言うことです

「意味解らないわ」

風が、気持ち良いです

私もヴィータに遅れて10分くらいで部屋に戻る。
すると。

「ん？ そ、そういうば主はやてが泊まりにきてる客人居ると……」

私が部屋に戻ると、ピンク色の髪が綺麗な人がいた。

まどかも成長したらこうなるんじゃないかな。

主に、胸が。ううん。きつと、まどかもあのまま成長しない……。

そうよ、私だって……。

じゃなくて！！

「初めまして……ですね。晁美ほむらです」

「ああ。ご丁寧に。シグナムです」

見た目に違わず、なんていうか。

そう、あわてんぼというか……。

「はやてとは、どんな関係なんですか？」

「親戚です。私達はみんな外国に住んでいたんですが、
彼女の親が亡くなった際に……」

「ごめんなさい。酷いことを聞いてしまいましたね……」

「いえ。暁美ほむら……さんは、お家に帰ったりは？」

「呼び捨てで構いませんよ。いえ、家に誰も居ないから自由なんです」

家出少女。しかも借金1億円……あはははは

……ダメよ。ほむら。

落ち着いて、無視するのよ。

心頭滅却すれば、屈辱も何もないわ。

「え？ ご両親は……」

「ああ、居ませんよ。ずいぶん前から……ね」

「す、すまない。私こそ深入りしすぎて……」

「いえ、私は親戚も両親も居ないけれど、大切な親友が沢山居ますから、

それだけで私は、十分幸せです」

「良い。お友達なのだな」

「ええ、はやてともきつと仲良くできると思います」

私はそう言つて微笑む。

まどかなら、はやてと気が合うだろうし、

さやかだって、仲良くできる。

杏子は少し気を遣いすぎたりしそう。

マミは……マミも、心配性だから気を使いすぎて、

逆にはやてに心配されそう。

なのはは普通に友達になれそうね。

フェイトは……多分、はやてのテンションに圧倒されるわね。

そんな事を考えて、思わず苦笑する。

「暁美ほむら？」

「いえ、ちょっと、みんなとはやてをあわせたらどうなるかなって想像しただけです」

しかし……。

ホムラ

どうかしたの？

この前の人、接触したいと申し出てますが？

……。

毘。

ええ、毘でしょうね。

でも、乗るしかないわよね。

何かしらの情報は得たいし。

「シグナムさん」

「ん？」

「少し、散歩に出てきても？」

「ああ、構わないが、遅くはならないようにお願いしたい」

「——ええ、すぐに戻るわ」

私はそう微笑み、はやての家を出て行って、

この前、襲撃された場所へと足を運んだ。

「本当にきてくれるとは」

「……貴女の目的を、聞かせて欲しいから」

私はそう言って、バリアジャケットへと、着替えた。

第9話 『織莉子』

「目的は、魔法少女を狩ることに変わりないよ」

「それは聞いた、なんで狩るのかってこと」

私は、彼女を睨む。

でも、キリカはまるで関係ないというかのごとく笑っていた。
なんなのかしら、この嫌な感じ。

彼女の目的は魔法少女を狩ること。

私に勝てないと知っていながら、なんでまた？

「私の大切な人のお願いだよ。だから、死んで欲しい」

「……話にならないわ」

私はため息をつき、双剣を握る。

「ひとつ尋ねたいことがあるわ」

「なに？」

「ピンク色の髪の魔法少女を襲撃したのは貴女の仲間？」

「……さあてね、どうか。死んでくれたら教えてあげるよ」
まるで話にならないわね。

<では、そろそろ戦うのでしょうか？>

「じゃあ、死んで貰う為にっ」と

「不愉快よ。貴女」

私は構えた剣を、勢い良くキリカへ振り下ろす。

「きやはっ?! いきなり来るなんて……礼儀作法学ばないとダメ

じゃないかな!!」

「っ、この前の今日でそんなことがよく言えたものね!!」
剣が弾かれた……。

筋力的には私以上?

というか、明らかに私より2つ3つ年上よね……。

<胸の成長的には——>

「煩い!! 成長期!!」

<はいはい……>

い、いらつく!!

「デイズアー!! ストライクにチェンジ」

<了解、レイズヴィル。セカンドシフト展開>

「破魔の大剣」

私の持っていた2本の剣がくっ付いて1本の大きな剣に変わる。

「なっ、流石にそれは」

キリカの表情に初めて、焦りが見えた。

「安心して、殺しはし——」

「——鈍くさいわね。まったく」

え?

<ガード——>

「がふっ?!」

「ガードブレイクキック。そんなのも知らないの?」

なんで?

今。今さっきまでそこに居なかったのに。

それに、ガードブレイクを決めるなんて……。

私は空中に飛んでいたから、落下地点の予測をされてた?

でも、そんなことできるはずが……。

私を蹴り飛ばしたのは、白い魔法少女だった。
キリ力を守ったのだから、当然、仲間。

「うぐっごほっげほっ……だ、誰なの？」

「織莉子よ。ねえ、暁美ほむら」

？！

私を、知っている？

ううん。

私も、彼女を……。

<何度目、何週目かのループの際、出会っています……が。

この世界には、マド力達が魔女化の危険性はない。それを知っているはずでしょう？！>

「知っているわ。当然」

「じゃあ、なぜ？！」

「……なぜ、そうね。邪魔になるからかしら」

「なんの？」

「殺すのは諦めて忠告するわ」

「？」

「金輪際、八神はやてに近づくな。いますぐ海鳴市から消えなさい

！！」

<その、訳を聞かせて欲しい>

「お断りするわ。話したって、無駄だから」

「そう、じゃあ、私もお断りよ。はやては親友だから」

……。

「合わないものね、あなたとは。ええ、仕方ない。キリ力帰るわよ」

「え？　どうするの？」

「暁美ほむら、貴女が八神はやてといたいというのなら、

私はそれで良いわ。ただし、邪魔はしないで」
2人はそういうと、私の前から姿を消した。

……なんで魔法少女狩りを？

第10話 『彼女達の……』

「ふう、良い天気やねえ」

「そうね。少しお散歩にでも行く？」

「え？ でも、車椅子引かせることに……」

「別に良いわよ。私を止めてくれたお礼」

「ほ、ほんなら、行きたい」

「どうぞ、2人で楽しんできてください。私達は『せんたく』等をしておきます」

私が言っていると、主はやては笑顔で暁美ほむらとともに、出かけていった。

「で、シゲナム。ほむらはどうするんだ？」

……。

ヴィータの質問が私達の間に漂う。

「暁美ちゃんは対象外にしましょうよ……」

「けどよ、あのピンクの髪の毛のやつと同じくらいあるんだぜ？」

「ヴィータ、しかし。彼女は主はやてのご友人。それに手を出すのは……」

ザフィーラが言う。

「……当初の予定通り、彼女ではない海鳴市の魔力反応を仕留めよう」

私が決断を下す。

昨日の夜の、彼女の表情。

それを曇らせたくなかった。

知り合いじゃないのは襲っていて、知り合いだから。

そんなことを選択するのはダメなのだろうか。

駄目だとしても、私達に彼女を襲う勇気なんてなかった。

シヤマルとヴィータは人生ゲームで遊んでもらったりしたし、ザフィーラも可愛がられていたし。

私も彼女と会話をして優しい人だと知ってしまった。

だから……無理だ。

わたしたちは、主はやてへの言い訳通り、家を片付け、『せんたく』等を終らせて、私達はため息をつく。

「あと少し、あと少しでページが埋まる。夜に出るぞ」

私がそう言うと同時に、主はやてと曉美ほむらが帰宅した。

「おお……綺麗になつとる?!」

「はやて、その反応はみんなに悪いと思うんだけど」

「あはは。まあ、みんなありがとかな」

「いえいえ。私達に出来ることはせいぜいこのくらいですから」

主はやてとの約束は破ってしまった。

人を傷つけ、闇の書のページを集めている。

けど、主はやてを救うにはこれしかないのだ。

私達が……闇の書が、主はやての体を蝕んでいる。

「なあ、ほむら」

「なに?」

「人生g——」

「絶対に嫌よ!!」

ヴィータがからかい、シヤマルたちが笑う。

シグナム。どうかしたのか？

ザフィーラ……いや、なんでもない。

ただ、主はやてが歩けるようになることまでは望まない。
だが、あの笑顔がなくならなければ、それで良い

そうだな。闇の書によって死に近づくこと。

それを阻止するには、闇の書を完成させるしかない。

闇の書を完成させて、後は闇の書は使用しない。

そうすれば、ずっとこのままで居られるはずだ

私はザフィーラと同じ考え。

ただ、少し気にかかることがあった。

大切な何かを忘れている。

そんな気がする。

「それじゃあ、はやて。ありがとう。私は、帰るわね？」

「ああ、なんや。寂しいなあ」

「また今度来るから、じゃあね？ ヴィータ達も」

「また人生ゲーム——」

「絶対やらない。ふふ。じゃあね」

あつという間に時間は過ぎ、夕方になって暁美ほむらは帰っていった。

その時、主はやては送る時は笑顔、

でも、扉が閉まった途端、悲しそうな表情になったのを

私達は見逃さなかった。

体が弱くなければ、遊びにいけるのに。

そう考えているのだと、なんとなく考えてしまう。

しかも、そういうのは当たらずとも遠からず。

「はやてちゃん……」

「ん？ どうしたん？」

「はやて、ほむらともつと遊びたいとか」

「ん？ まあなあ。せやけど、ほむらにも家庭があるんや。

私にずっとついて貰う訳にもあかんやろ」

主はやてはそう言つて、自分の部屋へと戻っていく。

「さあ、行こうか」

「ああ、今から会つやつに、罪はねーけど……」

「私達にはこれしかないのだから。シャマル、ザフィーラ留守を頼む」

「ええ、任せておいて」

「必ず、戻つて来い」

ザフィーラが確かめるように言う。

「私達を誰だと思っている？」

私はそう言つて、ザフィーラ達に背を向ける。

「誇り高きベルカの騎士、シグナム」

「鉄槌の騎士、ヴィータ」

「負けることなんて、あつてはいけない。」

なさねばならぬことがある限り」「

私達は夕焼けに染まる海鳴の街へと足を、踏み出した。

第11話 『ヴィータvsなのは』

「えっ？ 海鳴に暫く居るんじゃないの？」

「そうなんだけど、まどかのお見舞いにね。」

「明日の午後には戻るよ」

残念だなあ。

「ほむらちゃんと一杯話せると思ったのに。」

まあ、明日会えるから良いかなあって、学校じゃん。

「ところで、どう？ 新しいレイジングハートは」

「うん、中々に良いよ。でも、油断はしないよ。まどかちゃん達が苦戦した敵。」

「ほむらちゃんが対峙した敵。どれも手強いって思うから」

「<その通りです>」

「へじゃあ、また明日ね」

「うん。それじゃ」

電話を切つてため息。

昨日は他のお友達の家泊まって、今日は帰っちゃう。

前は色々話せてたのに、

やっぱり、互いに時間がないと電話くらいしか出来ない。

「ほむらちゃんの大人数トーク聞きたかったのに。」

「<マスター?!>」

「えっ?!」

突然、世界から音が消えた。

つまり、私は結界に閉じ込められたということ。

フェイトちゃん!!

私の家に泊まりに来ていて、一階に居るフェイトちゃんに合図を送る。

うん、なのは。行こう!!

こんなに早く来るとは思っていなかったけれど、来た。

私達の手元にある情報は、闇の書と言うロストログアが絡んでいると言うこと、

相手はベルカ式ということだけ。

闇の書については、ユーノくんが無限書庫で調べてくれてる。

私達はバリアジャケットに着替えて、外に出る。

「私達は逃げも隠れもしないよ!!」

私は空でフェイトちゃんと背中合わせに叫ぶ。

「逃げねえ? 違う、逃がさないんだよ!!」

来た!

<プロテクション・パスワード>

「?! かてえ!」

<バースト>

レイジングハートの声で、魔法のシールドが爆発し、相手の女の子が落ちていく。

それを私が追い、もう一人来たピンクの長い髪の人をフェイトちゃんが攻撃してるのがその時に見えた。

「貴女達の目的は、闇の書の完成。間違いないね?」

「……だったら何だって言うんだよ!」

……?!

どうして、なんでそんな悲しそうな。

「私は時空管理局囑託魔道師高町なのは。貴女のお名前は?!」

「ヴィータだ!!」

<マスター来ます!!>

「うん!!」

「アイゼン!!」

<了解!!>

カートリッジを?

ならっ。

「レイジングハート。カートリッジロード!!」

<了解>

「ベルカ式……だからって、負けるかああ!!」

<シュワルベフリーゲン>

?!

ヴィータちゃんが言うのと4つの鉄球が現れて、それをヴィータちゃんが撃ち出す。

丁度良いね。

「やるよ、レイジングハート!」

<了解>

「<アクセルシューター!!>」

私達がそう言うのと現れたのは8つの桃色に光る魔力弾。

「無茶だ! そんなの制御できるわけ……」

<出来ます、私のマスターなら>

「……」

集中。

「?!」

ヴィータちゃんの周りを、私の4つの弾が飛び回る。

そして、私に向かって飛んできたヴィータちゃんの4つの弾を、

残りの4つで破壊する。

<上出来です、マスター>

「ありがとう」

私はヴィータちゃんを見つめて聞く。

「闇の書の主は誰？」

「誰が教えるか!!」

「——くだらないわね。強情張るのは無駄だけど。でも、彼女が無実で捕まるのもまたアレなのよね」
え？

突然、私とヴィータちゃんの間に見れた、白い服に身を包んだ白髪の女性。

「だ、誰だよ!!」

ヴィータちゃんが怒鳴る。

「私？ 私は、織莉子。魔法少女を狩る魔法少女よ」

目の前の白い人はそう言って、微笑んだ。

第12話 『仮面の男』

突然現れた白い魔法少女、織莉子。

彼女は、私とヴィータちゃんを一目見て微笑んだ。

「闇の書の蒐集。これ以上は進めなくなってしまうわね」

「なっ、そんなこと！」

「あるわよ。今、貴女は高町なのはによって包囲されている。

そこから抜け出せるのかしら？」

彼女の言う通り、

私のアクセルシューターがヴィータちゃんの周りを飛び交っていて、
現在身動きは取れない。

「そこで、貴女には死んでもらうわ。ヴィータ」

「なっ?!」

死ぬ？

つまり殺すってこと?!

そんなこと……。

させない!!

ヴィータちゃんに向かっていった魔法少女に向かって、
ヴィータちゃんに回していた魔力弾の1つを、ぶつける。

「っ?!」

「駄目だよ!! 殺すなんて!!」

直撃してない……。

かき消された……。

「おい、何してんだよ。高町何とか!!」
はい?!

「なのはだよ!! な・の・は!!?!」

「あのさ.....なんのつもり?」

白い魔法少女が私を睨む。

す、凄い気迫って言うか.....。

でも、殺すことなんて認めない。

「貴女が、ヴィータちゃんを殺そうとしたからだよ!」

「管理局にとつても都合が良いじゃないかしら?

邪魔なものは消えてくれた方が。ね」

「管理局がそうでも、私達は良くない!!」

思わず、怒鳴る。

「あっそう、じゃあ貴女も死ねば良いじゃ~ん——ぐふ.....あ?!!」
目の前の白い魔法少女が、真下のビルに落下する。

「.....一旦引け」

「え?」

白い魔法少女を蹴り飛ばしたのは、仮面をつけた男の人。

その人が、ヴィータちゃんに囁く。

「あの! 貴方は?!!」

「.....お前は、もう1人のところに行け」

そう言つと、ヴィータちゃんは転移魔法で消え、

男の人も消えた。

もう1人?

まさか、フェイトちゃん?!

フェイトちゃん!!

念話で呼びかける。

でも、返事は来ない。

っ……。

<マスター、向こうにバルディッシュの反応があります>
レイジングハートの指示に続いて、その場所へと向かう。

「フェイトちゃん?!」

「……」

「だ、大丈夫?!」

<リンカーコアがすわられただけです>

「バルディッシュ、本当?!」

バルディッシュの言葉は嘘ではなく、

時空管理局の本部へ連れて行き、フェイトちゃんは療養することになった。

まどかちゃんと同じく、魔法が一時的に使えないだけ。

良かった……。

「なのは、フェイトは?」

ほむら……ちゃん?

「今はまだ寝てる。魔力が殆ど空になってるような状態なだけだよ」

「ごめん」

「え?」

何で謝るの?

「私が、見滝原に帰ってなければ……」

そっか。

ううん。

私は首を横に振って微笑む。

「ほむらちゃんは悪くないよ。フェイトちゃんは生きてるんだから。きっと、誰も責めないよ」

「……ごめんね、なのは……ありがとう」

私は、ほむらちゃんを横に座らせて抱き寄せる。

「フェイトちゃんは無事。それだけで、十分だよ。ほむらちゃん」
私達は病院の待合室のイスに座ったまま、眠ってしまった……。

第13話 『会議みたいな?』

「闇の書?」

「ああ、敵は闇の書を所持しているみたいなんだ」

<敵の映像が?>

「ああ。と言つても、ブレた状態で体の部分が写っていて、それを解析しただけだ。顔とかも解つてない」

<ですが、闇の書ですか?>

「……ああ、最悪の魔道書」

闇の書つていたい……。

「あの、その闇の書が最悪というのは?」

なのはが恐る恐る聞く。

「リンカーコアを蒐集してページを集め、

666枚集まると覚醒し、その文明を滅ぼすまで暴れる」

クロノが少し辛そうに言う。

……?

何か因縁でもあるのかしら。

話が終つた後、私はこっそりエイミィを呼び出し、話を聞いた。

「クロノちゃんと闇の書事件?」

「ええ。闇の書についての会話の際、すこしばかり辛そうだったと言うか。

とりあえず、いつもとは違ってた」

私がそう言つと、エイミィが辛そうに微笑んだ。

「前回の闇の書事件の時にね、クロノくんのお父さんが亡くなってるの……」

え？

<聊か失礼な質問でしたね>

「ごめんなさい」

「良いよ。クロノくんも父さんは自分の誇りに従つたって言つてたし……」

それにね、実は、もう1人なくなっているの」
もう1人？

<失礼でなければ伺つても？>

「うん。美国久臣中将」

<中将？ 何でそんな人が？>

「なんでも、闇の書の担当だったらしく、
闇の書の護送船に、クロノくんのお父さんと一緒に乗っていたらしいの」

「でも、亡くなつてしまつた？」

「護送中に、闇の書が目覚めてしまつて。

美国中将は、闇の書を押さえ込む為に船に残り、
クロノくんお父さんは、コントロールを乗っ取られたアルカンシェ
ルって、

強力な魔力砲を撃たせないために残つた」

<最後は自滅。ですか？>

「うっん、中將とお父さんの説得で、後ろについていた船がアルカンシエルで消滅させたの」

……。

「じゃあ、何で闇の書は……」

「あれはね、無限再生、無限転移なの。

文明を破壊して次の文明へと旅をする。

傷を負えば、回復する、だから最悪の魔道書」

「私達に止められるのかしら」

エイミィと別れ、私は部屋でため息をついていた。

<そうですね、正直解りません>

「……そうね」

<ただ>

え？

<ただ1つ言えるのは、

初めから諦めていては、何もできないと言ったこと。

無理なことも、みんななら何とかできるんじゃないのですか？

貴女が、永遠の牢獄から抜け出したように>

……。

「……そうね」

私はそう言って微笑み、枕を強く握った。
闇の書の、

ロストロギアの悲劇は、止めてみせる！

第14話 『問い』

「まったく、見滝原じゃなくて、初めからこっちに集合しとくんだった」

「まあまあ、杏子。知らなかったから仕方がない。」

私達がこっちに來ちゃったらもう、闇の書事件は即効解決！」

「ふふつ、あんまり調子に乗っちゃ駄目よ。フラグを回収しちゃうから」

私達は、全員で海鳴市に來ていた。

フェイトが襲われたことで警戒を強めた。

ただ、私は……。

「ほむらちゃん？　どうかしたの？」

「なんでもないわ、こんな時でなければ楽しかったのについて考えてただけよ」

我ながら完璧な嘘だった。

<まどか。油断は禁物です>

<アヴァロン、もう少しリラックスしなよ>

<エクスカリバー。君は少しリラックスしすぎだと思う>

<まあまあ、みなさん。みんなが居れば安心安全なんですから、だいじょーぶ>

テイロの少女のような声が響く。

……。

……

何でだと思っ？

お答えできません、わからないので
嘘でしょう？

どちらにせよ、今から確かめに行くのですから
私は、ディザイアーとの念話を終えてため息をつく。

「それじゃあ、朝は襲撃されないだろうから自由にしておいて良い。
でも、夕方以降は必ず2人以上で。いいわね?!」

「……はい……」

私がリーダーとしてみんなを纏めている。

私達の拠点はなのはの家。

全員入っても部屋が余るのだから、凄い。

私はみんなに気づかれないうちに、家を抜け出した。

目的の場所は、はやての家。

呼び鈴を押す。

「はい」

はやての声。

「ほむらです」

「お。開いてるから上がってええで」

私はその言葉に従い、家の中へと入る。

「今日は、どないしたん？」

「……少しヴィータ達に会いたくなって」

本心は会いたくはなかった。

でも、会わなくちゃいけなかった。

こんなもやもやな気持ちになったのは、
一昨日、フェイトが襲われてからの、翌日のこと。

つまり、昨日からだった。

結界のせいで映像はなかったものの、
なのはの口から衝撃の言葉が飛び出した。

敵は、ヴィータと名乗った。と。

それだけなら、無理があろうとも、私はただの同名。

別人で区切ろうとしていた。

でも、フェイトは無情にも。

無情にも、名前を聞いていた。

ベルカの騎士、シグナム。と。

それ以降の言葉は全く耳に入らず、

気づけばみんな海鳴市に来ていた。

「……ほむら？ 人生ゲームやりに来たのか？」

ヴィータの声が耳に届いた。

普通に笑っているヴィータ。

はやてが隣にいて、幸せそうに……。

「それより、シグナムは？」

「ああ、一昨日から少し遠くに出かけてる」

「なんか、日本の古風豊かな景色が見たいゆうとったらしいで。

シグナムらしいんやけどなあ」

はやてが笑う。

……。

私は、ヴィータのその時の態度で完全に納得した。

シグナムはかなりの怪我をしている。

フェイトはそう言っていた。

織莉子とキリカが一昨日の戦闘に乱入したことを聞いた。

キリカの名前は出なかったけれど、

フェイトの容姿説明から簡単に割り出せた。
キリ力相手に少し苦戦したらしく、結構な深手。
はやてに見られるわけにはいかないものね。
私はそう、心の中で呟いた。

「ちょっと、ヴィータ借りて良い？」

「ん？」

「出会い頭にあれほど言うなといった人生ゲームという言葉が聞こえたから」

「うつ、あ、あれはそのお……はやて!!」

「じゃあない、ええよ」

「うわあああ」

私達の楽しい記憶の産物を利用するのは心が痛む。

でも、はやてに怪しまれずに2人になるにはそれしか方法がなかった。

私はヴィータと一緒に、2階の部屋に来ていた。

「な、何する気だよ」

ヴィータはいまだに解っていない。

私は何で、ここに来たのかを。

「ねえ、ヴィータ」

「?!」

思った以上に冷たい声に、私も驚く。

「な、なんだ？ 人生ゲー——」

「違うわ。正直に答えて」

出来れば聞きたくない、でも、聞かなきゃ。

私は、自分の今にも崩れそうな体を何とか保って、
次の言葉を喉に引っ掛ける。

「な、なに？」

「――闇の書の主は、はやてで間違ってない？」

私の声は、まるで静寂にうまれた爆発のように、大きく、鮮明に聞こえた。

第15話 『どうもしない』

「えっ？」

ヴィータの驚きに満ちた表情。

もう、あの人生ゲームの日には戻れない。

「な、何言ってるんだよ……ほむら」

お願い、誤魔化さないで。

言い逃れしようとしてないで。

そう言おうとするのを私の何かが止める。

その代わりに、涙が溢れ出した。

……

「……なんで？」

……？

「何で知ってた。ほむら」

ヴィータの震える声が私にぶつかる。

「それは……」

言葉が詰まる。

これを言えば、もう。

うつん。

すでに、今日、私がこの家に来た時点で壊れてしまった。
だから。

「……時空管理局囑託魔道師。曉美ほむら。それが私の、肩書き」

「そういうことかよ……」

ヴィータの落胆した声が、耳に届く。

胸が痛む、心が痛む。

涙が止まらない。

「どうしてなのよ。ヴィータ……」

私から出た言葉は疑問だった。

どうして、まどかを襲ったの？

どうして、フェイトを？

そういってどうしてじゃなかった。

どうして、はやてなの？

そう、聞いた。

闇の書はロストログア。

それはとても危険なもの。

それに縛られているのが、なんではやてなの？

どうして…。

「……ごめん、ほむら。闇の書は勝手に主を選ぶんだ」

ヴィータが寂しそうに言う。

「ヴィータ達がおそった、ピンクの髪の子と、金色の髪の子は私の友達なのよ……」

私がそう言つと、ヴィータが握り締めた拳から、血が溢れるのが見えた。

「はやてが集めろって言ってるわけじゃないんだ」

……え？

ヴィータの言葉に、私は驚く。

普通、闇の書の主の指示で動くもの。

なのに？

「どういうこと？」

「はやては逆に集めるのは、戦うのは駄目だって、
そう言ってる」

ヴィータが俯いたまま続ける。

「最初の方は、静かに暮らしていけるはずだった。
でも、数ヶ月して異変が起きた。

はやての病気の原因が闇の書だと気づいた。

しかも、このまま放置すれば、はやてが死んでしまう」

<だから、リンカーコアの蒐集をした？>

「「え？」」

私と、ヴィータが同時に声をもらす。

<初めから不思議に思っではいた。ハヤテに感じる微妙な魔法の鎖。
それに近い魔力を持つ、シグナムや、ヴィータたち。

それで、ハヤテの家に行った時に気づいた。シグナムたちの部屋か
ら感じるかなり危ない闇の波動。

今はここにはないけど、それが闇の書。間違いないでしょう？>
ディザイアー……。

「気づかれてたのか。ほむらのデバイスは優秀だな」

自嘲気味な笑いを、ヴィータが浮かべる。

<ホムラ、少し前から気づいていた。

黙っていたのは、こうなることを……>

「ヴィータ、闇の書が完成したらどうなるの？」

「はやてが闇の書の主として覚醒して、病気が消える」

……。

どうすれば良いの？

私は……。

「本当にそれだけ？」

「ああ」

ヴィータが頷く。

「……そう」

私はそう言い残し、家を出て行った。

ホムラ、どうするのでしょうか？！

どうもしない

どうもしない？

それで、はやてが救われるんでしょう？

私はそう念話でディザイアーに告げて、ため息をついた。

第16話 『無慈悲』

「ただいま戻りました、主はやて」

「おお〜どうやった？」

……。

シグナム。完治したのか？

完治までは……だが、ずいぶんと楽になった

「主はやて、少し疲れたので寝させていただいても？」

「ええよ」

はやての笑顔が、辛い。

あたし達は、はやてを騙してる。

あの笑顔を見ることが許されない……。

あたしとシグナムはシグナムの部屋にきていた。

「シヤマルとザフィーラは他世界で？」

「ああ。魔獣狩りしてるよ」

「そうか……」

あたしはどうも、上手く喋れない。

ついさっきまで、隣の部屋でしていた会話。

その会話の相手……内容。

それが、鮮明に脳裏に浮かぶ。

「ん？ どうかしたのか？ ヴィータ」

ベッドに横になったシグナムがあたしの顔を覗き込んでいた。

隠す？

いや、隠したって仕方ないことだ。

「実は、シグナムが帰る直前、ほむらがここに来てたんだ」

「なんだ、喧嘩でもしたのか？　いつもいつも、懲りないな」

シグナムが苦笑する。

でも、それはすぐに掻き消えた。

「……ほむらは管理局の人間だった」

「なっ？！」

「でも、あたしらに不利になるようなことは一切してない」

あたしなりの、フォローだった。

最悪、口封じ。なんてことになりかねないとおもった。

でも、あたしの予測は嬉しいことに外れた。

「それなら良い。だが、早急に闇の書を埋めないと……」

シグナムがそう言いかけたとき、あたしらの周囲を結界が包み込んだ。

「?!」

まだ、集めようとしてるんだ

「織莉子?!」

「呉キリカ……」

あたしらが家を飛び出すと、白と黒。

対照的なバリアジャケットに身を包んだ敵が立っていた。

「いい加減にしてよ。織莉子は怒り心頭！　私はもつともおっとお怒りだ!!」

「つうわけ。闇の書は解放させない」

……。

「シグナム。戦える？」

「ああ、大丈夫だ」

「あらあら、少し時間空けすぎたかな？」

「キリカ。どうでも良いわ。また面倒なのが来る前に片付けるわよ」

「レヴァンティン！！」

シグナムが、

「アイゼン！！」

あたしが、

「クラッシャー」

黒い魔法少女が、

「ディザスター」

白い魔法少女が、

4人一斉にデバイスを発動。

「アイゼン！！」

<シュワルベフリーゲン>

4つの弾に赤いあたしの魔力を込めて。

——撃つ！！

「あら、じゃあキリカ。そっちよろしく」

「まっかせつてよ」

シグナムの相手……でも。

あたしはあたしの相手に集中する！！

あたしの攻撃はすべて、織莉子へ向かう。

「ふふっ、単純な軌道じゃ、未来はそのままよ」

なっ……。

あたしの攻撃は全て軽かわされる。

まるでどう攻撃がくるか解っているかのように。

「残念、弱いよね。貴女」

っ……。

相手の安い挑発。

だけど……。

「弱くても、負けられない!!」

<ラケーテンハンマー!!>

カートリッジを消費して、攻撃。

「うあああああ!!」

「ふふっ……」

笑ってられるのも、今のうちだあ!!

「ぶつとばせえ!!」

「——ディザスター。無慈悲で、悪いわね。レイズ・ブレイク」
一瞬だった。

目の前にいたターゲットは、あたしの後ろにいて。

あたしの体からは、赤い血が噴出していた……。

第17話 『破壊者』

「さつてと、この前の続きだね」

「……お前たちは管理局の魔道師ではないのか？」

「さあて、管理局とはなんのことか」

「まあいい、敵なら……私達の目的を阻むのなら……斬る！」
私達の目的。

闇の書の完成。

それを邪魔するのなら、戦うしかない。

私達は……闇の書の先にある平穏が欲しいだけだ。

主はやてが苦しまずに住む世界が。

若くして死なず、その先の未来が。

「紫電……一閃……！」

炎を纏った一撃を、呉キリカに打ち付ける。

「重い、重い一撃。だけど、私の織莉子への愛には勝てない！」
っ？！

「死んでよ……！」

「っ……」

剣と爪がぶつかり合い、

金属音を響かせ続ける。

幾度となくぶつかり、そして。

「陣風……！」

「うわっ……危ない?!」

<シュランゲフォーム>

「連結刃?! ちょっと、そんな隠し玉……」

「飛竜一閃!!」

レヴァンティンの連結刃のスタイル。シュランゲフォーム。

圧倒的な射程と変則的な動き。

それに魔力を込めて撃ち出す、飛竜一閃。

「ふう……。危ない危ない」

だが、呉キリカは普通に笑っていた。

しかも、無傷で。

魔力シールドで簡単に防げるものじゃ……。

「おつどろいた。いや、本当に。」

魔力の攻撃じゃなかったら危なかったよ。いや本当に」

「……」

「なんで、なんで無傷なんだ? そう思ってるでしょ」

呉キリカが不気味に微笑む。

飛竜一閃も紫電一閃も。

どっちも防がれた……。

「私のこのデバイス。クラッシャー。その意は破壊。」

どんなものでも破壊する、希望欲望願望絶望奇跡悲劇感激衝撃。

そして、一番得意とする破壊対象は、魔力」

魔力……?

「どう? 驚いた? 貴女の飛竜一閃? だっけ? それも魔力の

斬撃であるがゆえに、

私は無傷なんだよ。私の織莉子への愛に傷はつかないのさ!」

たびたび意味不明なことを言うが、

彼女が強いのは事実。

魔力を破壊？

私は魔力だけではない。

「私は騎士だ！ 魔力の攻撃だけではない！！」

「あゝあ。お馬鹿な人は嫌いだよ。私」

私の連結刃の、呉キリカに向かわせた剣先が音を立てて砕けた。

「なっ」

「私は破壊者さ。貴女の私に勝てるって希望、そしてこの剣のデバイス。どっちも破壊する！！」

<シュベルトフォルム>

剣の状態に戻ったレヴァンティンの切っ先は砕けていた。

……。

この状態でどこまでやれる？

シヤマルもザフィーラも居ないこの状況で……。

「もう、諦めて死になよ！！」

攻撃が来る。

……私は愚かだ。

何をして、闇の書は完成させなければいけない。

主はやてとの誓いを破っているのだから。

それ以上に躊躇することなど、殺しだけだ。

「っ？！」

「え？ なにし——」

「私は……」

呉キリカの攻撃を、体で受け止める。

「私は、負けるわけにはいかんだ……」

鮮血が、地上へと降り注ぐ。

たとえ、この身を犠牲にしよう。

どれだけ、苦しみ続けよう。

「この体が破壊されようと、負けるわけにはいかない!!」

「ま、まずっ——」

「魔力破壊の爪は私が体で掴んでいる、これなら防げまい!!」

レヴァンティンを炎が包み込む。

「紫電一閃!!」

「ちよっ、きやあああああ?!!」

私を巻き込んで爆発し、私も、呉キリカも地上へと墜落した。

「ぐっ……がはっ……」

口から血を吐き出す。傷口からも、血は溢れ出す。

その状態でも、私は立ち上がり、倒れこんだままの呉キリカの正面に立つ。

そして……。

「あ……ははは。痛い、痛いな。

や、やってくれた。織莉子が心配するじゃん、

泣いちゃうじゃん、泣かせちゃうじゃん、

私がこんな怪我してたら織莉子織莉子織莉子!!」

なっ……。

殺すことはないよう、急所は外した。

それを、私は全力で後悔した。

「織莉子を泣かせちゃうよ。あああああ!!」

駄目だよ、嫌だ嫌だ嫌だ!!

なかせちゃう、じゃあ、どうしよう。

敵の首を、織莉子にあげれば良いじゃん。簡単じゃん。あはっ。

首あげれば、織莉子も喜ぶ」

これを、狂気と呼ばないでなんて呼ぶ……。

私の目の前にいる『何か』が、不気味に笑う。

「敵さん、みーつけたあ」

呉キリカが、血を流しながら立ち上がる。

呉キリカの左腕は、使いものにならなくなっている……。

だが、呉キリカはそれすらも気にしていないように笑う。

「殺す、貴女殺す。殺しちゃう。織莉子泣かせるお前は！！ 殺す

！！」

「?!」

あまりの狂気と戦闘での負傷により、意識が朦朧としていたことで、私は反応が遅れた。

たったそれだけで……戦闘は敗北する――。

そう思ったときだった。

呉キリカの攻撃は、私には当たらず、弾かれた。

「?! 何するのかな!!」

「大丈夫？ シグナム」

私の目の前に、暁美ほむらが立っていた。

第18話 『貴女の正義』

「……はやて」

貴女はどうしたいのです？

「なにがよ」

この、闇の書の事件

どうしたい。

そう聞かれて、私は言葉を搜す。

この闇の書の事件。

最初は、まどか達を襲ったことで犯人を憎んだ。

でも、真実を知った私は？

いまだに、憎んでいる？

そう聞かれると、私は固まってしまう。

憎んでいると言えば、シグナムたちを敵に回し、はやてを悲しませることになる。

憎んでないと言えば、傷つけられたまどか達を裏切ることになる。

私に、どちらかを選ぶことなんて……。

ホムラ。私は選択を聞いているわけじゃない。

この事件への思いを聞いているの

この事件への思い？

犯罪？

ロストロギアによる？

はやてを助きたい？

まどか達を裏切りたくない？

「私は、全員が笑える世界が……欲しい」

傲慢ですね。マド力達を裏切らず、ハヤテ達も助けたい。

貴女はそういうのですね？

「解ってるわよ、だから困っているの」

私は海鳴市の公園でベンチに座って両手を空に向けて広げた。

「この両手に抱えきれるほどのことじゃないって、

こんなちっぽけな私に出来ることなんて、殆どないんだって、でも。

助けたい、守りたい。失いたくない」

自分で何が言いたいのかと苦笑する。

では、貴女の善意。正義を貫けば良い

「私の、正義？」

何が正しくて、何が間違いか。貴女はどう思いますか？

……。

ただ単に闇の書を使用しようとする敵と、大切な何かの為に、集めなければいけない敵。

どちらが、貴女にとっては悪ですか？

そんなの……。

「前者でしょう？」

なぜですか？

え？

どちらにせよ、ロストログアを使うと言う間違った行動。

つまりはどちらも悪では？ なぜ、後者は悪ではない。と？

「……なんで？」

なんで？

私は、ディザイアーの言葉に困惑する……。
なんで私は……。

そんなものです、正義なんていうのは
はい？

正義なんてそれぞれの価値観で決まってしまうものです。
管理局からすれば、両者悪であり、切り捨てるべきもの。

しかし、貴女は後者は悪ではないと言った？

それはなぜか、後者が正義に基づく行動だから

正義に基づく……行動？

何が言いたいよ、一体。

後者、つまりはシグナムたち。彼女達はハヤテを『救う為に』闇
の書を使う。

彼女達にとって、それはハヤテを救う為の正義だから。

一方、私達、いえ、私と貴女以外から見れば、シグナム達は犯罪者。
それは、彼女達が正義の行動だと知らないから。

では？ 私達から見ても、彼女達はなんなのでしょう？

敵ですか？ 犯罪者ですか？ それとも……

ディザイアーが意図的に言葉を切って私の言葉を待つ。

私達から見た、シグナム達……。

まどか達を傷つけた、敵？

一緒に遊んだ友達？

ロストロギアを扱う、犯罪者？

自分の行動を悔いて、握り締めた拳から血が出る……人間？

なんだろう。

どれだろう。

「私にとって、はやては親友で、その家族であるシグナム達も大切な人たち……」

「……ただ、シグナム達が起こしているのは立派な犯罪です」

「……だから、私が止めてあげる。」

「……だか、私が止めてあげるだけ。」

私、馬鹿だったわ。現実から逃げちゃ駄目じゃない。

友達が悪いことしてるんなら、それを止めるのも、友達。そうでしょう？　「ディザイアー」

「さて、私は存じません。貴女がしたいように、したら良い相変わらず、言いたいことだけ言うくせに……。」

「貴女って、酷い人ね」

生憎、私は機械ですの

「あつそ。そういうことにしておくわ」

思わず、笑みがこぼれる。

「……ただ、すぐにそれは破られた。」

「……結果?!」

「……方向は……はやての……?!」

「……ディザイアー!!」

ええ、行くべきです。

「……ヴィータの敵は管理局ではない。恐らく、キリカとオリコ。」

彼女達は平気で殺す。それは止めなければいけない!

「……ヴィータが悪いこととしても、そのヴィータを殺そうとするなら、私はヴィータを守る!」

「……それが、貴女の正義。悪を手伝う気はない。」

でも、友達として守る。それで良い。それが貴女の正義だと言うのなら

私は結界が張られた場所へと走って行った。

第19話 『友達』

「なにをするのかな!!」

「大丈夫？ シグナム」

私は振り向かずに聞く。

私は『敵』であるキリカを睨む。

「……管理局の人間じゃないのか？」

シグナムの言葉に少しだけ、不安が募る。
けど。

「確かに、私は管理局の囑託魔道師よ」

私は、笑みがこぼれるのを我慢して、続ける。

「でもその前に、貴女達の友達だから」

——だから。ね？

「キリカ!! 友達を傷つける貴女は敵!!」

剣の状態のデイズアイアを向けて怒鳴る。

「……邪魔しないでって、織莉子は言った。頼んだ。

なのに、それを、織莉子の言うことを聞かないなんて
殺しちゃうから!!」

……？

少し、おかしくなってる？

何度か戦った時も少し変だとは思ってたけれど。

でも、ずいぶんと深手を負ってるわね。

シグナムもだけれど。

捨て身の一撃を、シグナムが入れたって感じがする。

「まあ、なにせよ。手加減はしないわ。友達の為だもの」

<ええ、ですから、キリカ。貴女が倒れるんです>

殺しはしない。

けど、身動きが出来ない程度にやるなら……。

「これで貴女を叩き切らせて貰う」

「じゃあ、私は穴だらけにしてあげる!!」

私は双剣。

相手は片腕が使えない状態。

「ああああ!!」

突進してくるキリカの爪を左手の剣で弾く。

「デイズァー」

<魔力の一撃で昏倒させる!!>

非殺傷設定。

相手は殺しに来てるだろうけど、

私は魔力を切る。

キリカの魔力を私の魔力ダメージで飛ばし、気絶させる。

それが狙い。

私の振りがぶつた剣は、魔力を纏い、

キリカを斬りつける。

「きゃあああ?!」

キリカの悲鳴。

そのまま、キリカが倒れる。

その予定だった。

「……だ。まだ、終ってないよ!!」
「え？」

魔力は削った、怪我もしてる。
なのに、なんで倒れないの?!

<貴女たちの本当の目的はなんなのですか？　ただの魔法少女狩り
?>

「うん。そうだよ」

<じゃあ、なんでそんなことを?>

「……教える必要ないよ。」

貴女達敵でしょ？　闇の書を手伝うんでしょ？」

キリカが少しだけ寂しそうな目で聞く。

「いいえ、手伝わないわ」

「え？　じゃあ、なんで私の邪魔……」

「それはシグナムが友達だから。」

どんな理由であれ、シグナムは守る」

私はチラッとシグナムを見る。

立ってられないのか、

壁にもたれて、あちこちから血を流している姿は痛々しい。

「……それが、世界を滅ぼすことに……なるのに？」

「え？　織莉子！」

キリカが叫ぶ。

白い服は鮮血によって真っ赤なドレスへと変貌していて、
今にも倒れそうなほどふらふらとした足取り。

「貴様!!! ヴィータは?!!」

シグナムの声が、とどろく。

あの傷で叫べば広がるのに……。

「貴女は逃げるべき、私は……それを言いに来た」
心変わり？

そんな疑問が浮かぶ。

織莉子はシグナムに逃げると言う。

あんなにボロボロだと言うのに、
態々ここに言いに来た？

なぜ？

「逃げろ、だと？ そんな——」

その瞬間、シグナムの体から、リンカーコアが飛び出した。

「なっ……ぐっ?!」

「シグナム?!」

「……用済みの守護騎士。その身を差し出せ」
?!

仮面の男?!

「くっ、させるわけには!!」

「織莉子?!」

キリカの制止も間に合わず、仮面の男に殴りかかった織莉子は、
キリカの背後の建物に、衝突した。

「え？」

あまりに突然の出来事に、私もキリカも呆気にとられていた。
そして……。

「うあああああ!!!!」

「シグナ……ム？」

シグナムは粒子になるかのごとく……消えた。

第20話 『起動』

「な、何を?!」

「……蒐集。これで闇の書は完成する。あとは?!」

私?!

「お前を——ぐっ?!」

私のほうに向かってきた、仮面の男が、横に蹴り飛ばされる。

「何してるの……逃げなよ」

キリカ?

「あいつらの目的は貴女、逃げて?」

「何を、貴女だって——」

「あなたが捕まれば世界が終る!! 織莉子はそう言った!! だから、今は私は貴女を守るただそれだけ!」

「邪魔を、するな」

2人?!

仮面の男が2人になり、キリカに襲い掛かる。

「織莉子の願い、織莉子の頼み。それなら私は! 暁美ほむらを守る!」

右腕だけと言うハンデ、それに続く私との戦闘。

さらに2対1。

勝敗は明らか。

逃げる？

どうする？

そんなの悩む必要なんて無い。

「デイズアイア、私は間違ってるかしら？」

「いいえ、きっと、それが正しい選択です」

私達がそんな会話をするころには、私の体はキリカと戦う2人に斬りかかっていた。

「ぐうつ?!」

仮面の男の一人を斬りつけて蹴り飛ばす。

「?! 曉美ほむら? なぜ!」

キリカが怒鳴る。

助けてあげたのに。

なんて思いながら、微笑む。

「貴女が私を守るなら、私は貴女を守るわよ。織莉子は無事なの?」

「……確認の余裕はない。でも、織莉子なら大丈夫」

キリカが頷いて言う。

……じゃあ。

<サポート>

<?!>

「えっ?!」

私の紫色の魔力を、キリカに渡す。

ずっと前、フェイトが敵だったときに、なのはがやっていたのを真似したけど、

上手くいって良かった。

「私は、貴女の友達を……」

「そうね、でも。事情によるわ。それを許すか許さないかは。

でもまずは、この場を凌ぎきる。それが重要」

目の前の仮面の男2人を睨む。

あの2人は闇の書を利用してようとしている悪。

正しいことに使うわけじゃない。

だったら、キリ力を手伝って、あの2人を……

「きやあああ?!」

えっ?

考えている最中のことだった。

隣に居たはずのキリ力が悲鳴とともに背後へ吹き飛んだ。

<ショートジャンプ?!>

短距離瞬間移動?!

「手加減してれば、調子に乗る」

「えっ? あぐっ?!」

不意に感じた腹部への一撃。

<しまっ、ホムラ!!>

ディザイアーの声が遠くに感じる……。

そのまま私は、意識を失った。

「さて、主を呼ぶか」

「ああ、そうだな」

我々の望み。

闇の書の覚醒が始まる。

「え？ あれ？ こ、ここどこ？」

闇の書の主、八神はやてを、病院の屋上に召喚し、
覚醒を促す。

そのためには……。

「ほむら、ちゃん？」

姿を彼女の親友へと変え。

そして。

「ヴィータ？！ ヴィータになにしたん？！」

「ヴィータは、壊れちゃったのよ。」

他のみんなも、壊れて消えちゃった」

そう言い、彼女の周りがある、守護騎士達の服を指差す。

「そんな、そんなの……」

「だから、ヴィータも消さなくちゃいけない」

そう言い、目の前で蒐集し、消し去る。

「あつ、ああああ。いやああああ！！！」

「始まった」

「引くぞ」

そして、闇の書が……起動した。

第21話 『正義と言つもの』

「——さい、起きなさい!!」
だ……れ?

怒鳴り声に導かれて、目を覚ます。

視界に入ったのは、白い魔法少女と黒い魔法少女。
織莉子とキリ力だった。

少し痛む頭を抑えて起き上がる。

「まったく、キリ力がちゃんと守らないから」

「ショートジャンプなんて聞いてないもん」

「あの……なんで?」

私が聞くと、織莉子は少し躊躇したものの、口を開いた。

「私は、貴女がワルプルギスの夜を倒し、
QBが居なくなるまでは予知の能力を持っていた。

そこで、見えた。闇の書が覚醒し、この星が滅びる映像が」

……QB。

懐かしいわね。

じゃなくて。

「滅びる?」

「ええ、闇の書について少し調べた結果、
あれは覚醒すると、主の魔力が尽きるまで破壊を続けるの。
だから、それを阻止したかった」

<それで、魔法少女狩り?>

「ええ、八神はやては優しい子で、無知だった。彼女に害はないだ

ろうけど、

周りの守護騎士は、リンカーコアを奪い始めた」

「……」

はやてはやっぱり、何も……。

「大きい魔力を待つ人を消せば、それだけあいつらができる蒐集は減る。」

そう考えた。我ながら短気とは思ったけれど、それしか思いつかなかった」

「管理局に相談を——」

「出来るわけない、したら、八神はやてを苦しめることになる」

＜自分なりの正義の戦いだったって訳だ＞

「ええ、そうね、いえ。ただの悪よ」

……。

「じゃあ、行きましょう？」

「え？」

＜闇の書は私達の出会いの場所だよ、ホムラ＞

「ええ」

私は立ち上がって、その場所の方向を見つめる。

聳え立つビル群の中、救急へりを誘導する為にライトがある海鳴市総合病院。

「もう、闇の書の覚醒は止められない」

「けど、はやてを救う方法があるかもしれないでしょう？」

私は織莉子に微笑む。

「何よ。なんで、そんな希望を持てるわけ?!」

織莉子が怒鳴る。

なんで？

そう聞かれたら、良く解らない。
けど、解ることがある。

「初めから諦めてたら、出来ることだって、出来ないと思うわ。
どうするの？ 私と一緒にはやてを助けに行く？」

私がそう言つと、2人は一瞬不思議そうな顔をした。
きつと、

闇の書を倒しにではなく、
はやてを助けに行く。

そう言つたのが不思議だったのかもしれない。
でも。

2人もすぐに納得した。

「まったく、私としては不本意よ」

「織莉子は正直じゃないね。はやてを――」

「煩いわよ！」

<さて、行きましようか>

「ええ、織莉子、キリ力。よろしくね」

「うん、よろしく」

「仕方なく協力するだけよ」

「素直じゃないわね、織莉子」

「ああ、もう！！」

織莉子をからかって2人で笑う。

さつきまで、敵対していたと言つのに……。

互いの目的。方法は違えど元は同じ。
根本が同じなら私達は仲間になれる

そうね……

正義ってこういうもの。言ったでしょう？

正義の相手が悪とは限らない。自分の正義を貫いて。と
ディザイアー……。

貴女の願いが、ハヤテを救うことだと言っのなら、
私は全力で、その願いを叶えてみせる

思わず笑う。

「どうかしたの？ 暁美ほむら」

「いえ、じゃあ、行きましょう!!」

私達は、魔法で傷を治しながら全速力ではやての魔力を感じる病院
へと向かった

第22話 『集結』

「はやて!!」

「……我が主は眠りについた」
眠りに?

私達の目の前にいたはやての魔力反応を持つのは、
はやてではなく、銀色の髪を持つ女性。

「……闇の書」

「貴女もその名で呼ぶのだな」

え?

<?! 3人とも、私の後ろに!! オハン全方位展開!>

「ディアボリック……エミッション」

?!

闇の書がそう唱えると、

黒い魔力の衝撃波のようなものが海鳴市を包み込んだ。

「なんて魔力量……これが、闇の書?」

「織莉子にも、この先の未来は解らない。」

だから、頑張ろうよ。織莉子!! ほむら!」

「調子乗らないの、キリカ!」

「まあ、暗いよりましだわ」

<広域魔法……してくれませうね、 ホムラ>

ディザイア!。

「いけるよね、織莉子、キリカ」

「とうぜんです」

「命令しないで、でも、協力はする」

全く、素直じゃないわね。

でも、どうしたものか。

とりあえず。

「デイバイン・バスター!!」

私ののはから教えてもらった砲撃。

「鋼鉄の斬撃!!」

キリカの爪から放たれる爪の形をした斬撃。

「リグレット・バスター!!」

織莉子の白い魔力砲撃。

その3つが、3方向から闇の書を狙う……が。

「全方位のプロテクション?! あの色……まどかの?!」

<闇の書は、蒐集した相手の魔法をつかえると見て良いみたいです
ね>

そんな……。

「レイン・アロー」

今度は、ピンク色の魔法の矢を空へと放つ。

「不味い、かわそうと思わないで!!」

私が叫ぶ。

これはまどかの魔法。

しかも、矢でありながら、魔法なら何でもありな攻撃。

「な、なにあれ……」

天空に輝く、空を埋め尽くす桃色の輝き。

「雨が矢になったのと同義よ!!」

「はあ?!」

次の瞬間、桃色の矢が降り注いだ。

「わっわわわわわ?!」

「出鱈目すぎるわよ!!」

「ええ、まどかですから>

「ディザイアー、何とかするわよ!」

「うっん、私がやる」

キリカが爪を構える。

「私の爪は、破壊の爪。

全てを破壊する、破壊の爪。

クラッシュ・ディメンション」

ええええ?!

<これの方が出鱈目ですね>

キリカが振った爪が次元を裂き、降り注ぐ矢は次元の彼方へと消えていく。

なによ、今の。

「ふう、危ない危ない」

「……我が主の望み、大切なものを奪った世界を、失くす事」
?!

「それが望み? ふざけてる?」

「ふざけてなど、いない」

……。

「はやての望み? そんなのあの子が望むものか!!」

「織莉子の言う通り!!」

「……我が主の望みだ」

話にならない。

「言つて解らないなら、力ずくで解らせてあげるわよ!」
思いつ切り振りかぶった大剣を、
闇の書に向かつて振り下ろす。

「……そんな攻撃は通らない」

「でしょうね、でも味方が居るから」

「リグレット……バスター!!」

まあ、何の躊躇もなく私ごと吹き飛ばそうとしてるけど。
ショートジャンプを使って直撃の寸前で離れる。

どう……かな?

爆煙が辺りを包み、闇の書が確認できない。

「あの、私ごと吹き飛ばそうとした?」

「何のことかしら?」

織莉子が不敵に笑う。

「……サンダー・レイジ」

?!

会話していた私達の横を、黄色い輝きが通り過ぎていく。

「あっちゃあ、織莉子。無傷だよ?!」

キリカが叫ぶ。

「見て解るわ」

煙が晴れて出てきたのは無傷の闇の書。

……かなり硬い防御。

どうだろう、撃ち抜けるかしら。

そう、考えていた時だった。

「——ブレイク、アロー!!」

私達の横を桃色の光が通り過ぎ、
闇の書に直撃する。

それさえも、闇の書は難なく防ぎきった。
けど。

その一撃はかなり大きい一撃だった。
それは、みんなが増援として来てくれた証拠なのだから。

「まったく、一人で行くなよ。アタシらもいるんだつつの」
「そうだそうだ。さやかちゃんも怒っちゃうぞ。なんてね」
「ふふつ、急に結界に続く広域魔法。派手にやってるわね」
「ほむらちゃんは単独先行が……って」

「貴女達は?!」

みんなが来た……って
そうだった。

なのは達に織莉子とキリカについて説明……。

でも、まずは——

<話は後です! まずは、これを何とかしましょう!!>
やっぱり、私の台詞とるのね。

第23話 『さく……せん?』

「私の結界破りの矢も通らないよ」

「じゃあ、私が試してみるわね、ティロ!」

<ファイナーレ!!!>

マミが放った黄色い魔力弾が、闇の書に直撃する。

けれど、やっぱり無傷。

「うーん。防御を抜いて、全力全開で決めるしかないよ」

「ちよつ、あれは——」

「知ってる。はやてちゃん。ほむらちゃんのお友達でしょ?」

え?

なんで?

私が驚いていることに気づいたのか、

なのはが申し訳なさそうに笑う。

「実は、ほむらちゃんとはやてちゃんのことを、ついさっきディザ
イアーが念話で教えてくれたの」

……。

無言でディザイアーを睨む。

<まあ、むやみやたらと攻撃されてもかなわないので>

「……で? どうすれば良いの?」

私はディザイアーを無視してなのはに聞く。

「今、ユーノ君が調べてくれてる。

だから、私達は街に被害が出ないようにする!」

……そう。

「キリカ、なのは、まどか、織莉子、マミ、さやか、フェイト、杏子。」

みんな、絶対にはやてを助け出すわよ」

「そうですね、じゃあ、闇の書を気絶させましょう」
はい？

ディザイアー？

「どういうことよ」

織莉子が不思議そうに聞く。

「簡単なことです、あれは闇の書でありながら、ハヤテでもある。つまり、1つの人格が落ちれば、もう一つの人格が出てくるというわけです」

「つまりさあ、魔力ダメージでぶっ飛ばすってこと？」

杏子が、グングニールを構えて聞く。

「その通り、ただ。あのめちゃくちゃに硬い防御を抜くには全員が全力全開必要」

「そっか、じゃあ、杏子。私達の連携で始めよっか！」

「ああ、アタシらに続け！！」

杏子とさやかが先行して攻撃を仕掛けに行く。

連携とはよく言ったもので、かなりのコンビネーション。

無限ループのときは絶対にありえないと思ってた光景。

「何度やっても、これは抜けない」

「どうかなっ、ブレイブ・エッジ！！」

「まだまだあ！！ ガ・ジャルグ！！」

2人の攻撃を、闇の書が防ぐ。

「?!」

そして、闇の書の魔力のシールドに輝が入る。
杏子の技、ガ・ジャルグは魔力を砕く。

——しかし。

「無駄。ブラッティ・ダガー」

闇の書の周囲に赤い短剣が現れ、さやかと杏子を襲う。

「?!」

「まったく、もういち——?!」

杏子が言葉を止め、

「あれって……」

なのはが、驚く。

闇の書が掲げた手の上に、ピンク色の魔力の光が、集まっていく。

あれは……ほぼ確実に、スターライトブレイカー!!

「全員、遠くまで逃げるよ!!」

フェイトの指示に従って離れる。

<あれ? 不味いよホムラ!>
え?

「どうしたの?」

<民間人が結界内部にいる!!>

<マスター、私も確認しました>

レイジングハートもディザイアーに頷くかのように言葉を出す。

民間人?

<ここの角を曲がったら――>

「ねえ、アリサちゃ……え？」

「あ」

「な、何してのよ……コスプレ大会？」

アリサとすずか？！

<マイスター！！ 結界防御魔法陣を！！>

「ええ！！ 貴女達少しじっとしていてね」

マミがそう言い、アリサとすずかと自分を入れた防御結界を張る。

<ホムラ、話は後です。まずは防ぎますよ！！>

ディザイアーがそう叫び、巨大な黄金の盾に変わる。

それぞれが防御魔法陣を敷く……そして。

「咎人達に、滅びの光を。星よ集え、全てを撃ち抜く光となれ。貫
け閃光。 スターライト・ブレイカー」

そして、ピンク色の輝きが、放たれた。

第24話 『砕けた盾』

ピンク色の魔力の爆発が当たりを包み込む。

「っ……建物とか避けての攻撃?!」

それに、爆発の余波が予想以上に広い……」
数分続いた連鎖爆発に近い衝撃波が収まる。

「すずかちゃん、アリサちゃん……」

なのはの心配そうな声が響く。

……。

「と、とりあえず、私が2人を安全な場所に連れて行くわ。
絶対に負けちゃ駄目よ」

マミがそう言い、2人と共に転送魔法で消える。

マミ助かったわ

ええ、気にしないで。暫くこの子達と居るから、
よろしくね?

任せて

マミと念話を終え、遠くの空に浮かぶ闇の書を見据える。

「見られちゃった……ね」

なのはが呟く。

「仕方ねえよ。いつかはばれるか、話すか。その予定だったんだ。
それが早まったただけだ」

杏子が言う。

「……そうだね。今はあつちに集中しよう」
フェイトがバルディッシュを構える。

向こうは向こうでマミが何とかしてくれるだろうし――

<話は終わりましたね？ 相手は待ってくれそうもないので、行きま
すよ！>

……。

「ねえ、ディザスター」

<なんでしようか>

「最近思っただけど、心を覗いてるわけ？」

<ええ、たまに>

「正直に言う？！ 普通」

<あははは。まあ、いいじゃないですか。それとも>
人生ゲームのお話でも？

?!

こ、この……。

このデバイス、使用者を脅迫するっていうの？！

「おーい、ほむら。アタシたちはどうするんだ？ 行くんじゃないの
か？」

杏子の言葉で現実の戻る。

「え？ ええ、まどかと織莉子は後方支援頼める？」

「うん、了解。アヴァロン良いよね？」

<はい>

「解ったわよ。良いわね？ ディザスター」

<了解しました>

「さやかと杏子で連携。なのはとフェイト、私とキリカで連携。い
けるよね？」

「私は、大丈夫」

<イエス・サー>

「とーぜんだよ。織莉子の愛に私は曲がらない！　ね、クラッシャー」

＜関係ないことは言わなくて良いです。あ。連携は可能です＞

……クラッシャーはデイズアイアーに近い何かを感じる。
さてと……。

「じゃあ、まどか先制お願い」

「うん、任せて！」

＜メテオ・インパクト＞

え？

ピンク色の矢が闇の書に亜音速で衝突し、爆発が起こる。
い、今の。なに？

「は、派手だね。まどか」

「えへへ、じゃあ、みんな行つてらっしゃい！！」
まどかがアヴァロンを振って見送る。

あの時は応援だけだったまどか。
でも、今。彼女は後方支援。

絶対に、はやてを助ける！！

闇の書の正面へたどり着く。

丁度煙が晴れ、闇の書が飛び出す。

怪我はないものの、バリアジャケットが汚れていることから、
貫けたらしい。

相変わらずの魔力なのね……。

「さあ、織莉子のために私が先行します！！」

くまったく、勝手なんだから、ほむらさん適当に合わせてください＞

え？

ちよっ……。

「ああもう、デイズァー！」

くん。了解>

キリカが先行して爪を振り下ろす。

直撃の瞬間、私がそこに一太刀撃ちこむ。

同時の衝撃に、逃げ場をなくした反動が闇の書の強固な盾に輝を入れた。

「はやてを、返しなさい！！」

「我が主の眠りを妨げる気か？」

闇の書が私達を睨む。

「うるせー！！ もう朝なんだよ！！」

杏子が、グングニールを突き立てる。

「まだ碎けない?！」

後方支援、ブレイク・アロー撃つよ！！

そう聞こえた瞬間、ピンク色の閃光が走り、強固な盾が音を立てて碎け散った。

「ええええい！！」

さやかが切りかかった瞬間だった。

「邪魔をするのなら、永遠の時の中で眠れ」

「えっ？」

闇の書がそう囁いた瞬間、

杏子、さやか、キリカ、フェイトが光に包まれて……消えた。

第25話 『永遠』

「不味い、みんなはどこに?!」

<多分、あの魔道書の中です>

「我が主もあの子達も、覚めること無い眠りの内に、終わり無き夢を見る。」

生と死の狭間の夢、それは永遠だ」

「永遠。そうね、あるかもしれない。」

でも、それは世界が変わらないことじゃない!

私が、貴女が、みんなが! 永遠に変わっていくって事。

終らない夢なんてない、もしそれがあるんだって言うなら、私達がその夢を終らせる!!」

大声で怒鳴って身構える。

「魔道所に居るってことは生きてるのよね?」

「え? 生きてるの?」

なのはが聞く。

<恐らく。ただ、あそこからどうやって出るかは知らない。

ユーノが情報を持ってきてくれるまで私達がやられないか、

私達が闇の書を魔力ダメージでぶっ飛ばすか。その勝負です>

ずいぶん楽しそうにぶっ飛ばすって言ったわね。

……みんな。

みんな生きてるならそれで良い。

私はみんなを信じて戦う。

「……まだ、戦うと言うのか?」

闇の書が言う。

「ええ、私達は諦めてないから」

「デイベイイイイン、バスター！！」

「リンクデッド・バスター！！」

同時に攻撃を打ち込む。

まどか！！ 織莉子！！

うん！！

解ったわ

まどかと織莉子に念話で伝える。

「ブレイク・アロー！！」

「リグレット・バスター！！」

ピンクと白の閃光が走り、

闇の書へ直撃する。

やっぱり…… 4人じゃ通せないか……。

「……ホーミング・アロー」

？！

数十本ものピンク色の矢が、私達に向かって放たれる。

まどかぁ！！ なんて魔法覚えてんのよ！！

ご、ごめん

弾いても、リターンして再度襲ってくるし、

叩ききつて真つ二つにすれば、

爆発でこっちに衝撃が来る。

味方ならありがたいけど、敵だと嫌な魔法。

「はぁはぁはぁ…… しょ、消耗戦だね……」

「しかも一方的だし」

私が苦笑して言う。

向こうは全然余裕の涼しい表情。

流石魔道書。

——でも、諦めない。

「デイズアイアー！！ レイズヴィルやるわよ」

<了解。では。そろそろ。カートリッジロード。レイズヴェル・A
CS起動>

デイズアイアーがカートリッジをロードし、巨大な紫色に輝く剣に変わる。

<私達も、エクセリオンモードを>

「駄目だよ！ 本体の補強がまだ……」

<大丈夫です。ですから、救う為に>

「レイジングハート……うん、エクセリオンモード！」

<ACS、起動>

同時に仕掛ける。

なのはのピンク色の短剣を作り出しての突撃。

私の紫色の大剣の一閃。

それすらも、強固な防御力を誇る闇の書の魔力の盾は防ぐ。

「一つ覚えの攻撃が、通ると思ってか」

「通す、通して見せるよ！！ レイジングハートが力をくれてる！
命と心を賭けて、答えてくれてる！貴女を救ってあげてっ！！」

「貴女その心の壁を打ち砕いて、教えてあげる！

目を覚ましてあげる！ はやてに、貴女に、私達の想いを届けてみ
せる！！」

<その通り、私達が砕けるその時まで、通るかどうかなんて解らな
いものです！>

デイズアイアーがそう言った瞬間、音を立てて魔力の盾が砕け散った。

「レイズヴェル・ザンバー!!!」

「エクセリオン・バスター!!!」

私達の攻撃が、闇の書に直撃した……が。

「全然効いてない。ね」

爆発の煙が晴れると、少しだけ血を流した闇の書が佇んでいた。
ほぼノーダメージ。

「でも、私達はまだ、終わってない!!!」

第26話 『ずっと一緒』

あれ……？

ここは？

目を覚ますと、見慣れた天井。
見慣れたベッド。

……嘘だろ？

「おっ、杏子。起きたのか」

アタシの目の前にいて、

そして、アタシに話しかけてきたのは、
死んだはずの父親だった。

「どうして？」

「ん？」

なんで、なんでここにいるんだよ。

「何でこんなところに居るんだ？」

「何言ってるんだ？ 昨日——」

「違う！！ 違う、違う！！」

違う、そうじゃない……。

父さんはいないはずなんだ、
死んじゃったんだ。

私を残して。

こんなのは……夢だ！

けど、

夢のはずなのに、

父さんはアタシの手を握った。
微笑んだ。

「怖い夢でもみたのかい？」

……。

「うん……怖い……」

夢？

ほむらたちのこと、

さやかのこと。

ぜんぶ？

「あつ、お姉ちゃん。起きるの遅いよ！」

え？

あつ……。

「ご、ごめん」

「ほらっ、早く準備して」

アタシのところに来たのは、
アタシの妹の、ももだった。

どうやら、アタシは妹と出かける予定だったらしい。

「えへへっ、遊園地」

「ももは小さいから殆ど乗れないけどな」

私は、目の前ではしゃぐ妹に微笑む。

もう、会えないと思ってた。

触れられないと思ってた。

でも、今。目の前にいて、触れられる。

「お姉ちゃん、メリーゴーランド」

「はいはい。あんま走るなよ。転ぶぞ」

「うんっ」

妹が、お父さんが、お母さんが。

みんながこの世界に居る。

「ほら、お姉ちゃん、私の前に」

「ん？ ああ、解った」

妹にせかされて、馬に跨る。

多分、見滝原に行けば、

さやかが、ほむらが、まどかが、マミがいる。

みんないる、魔女がいなかったらの世界かもしれない。
でも、それでも。

夕方になった遊園地。

閉園が近いせいか、人もまばらで、
数えるほど居ない。

アタシともはベンチに座って空を見上げていた。

「楽しかった？」

「うん。とっても。また来たいな」

「そっか」

「……どうかしたの？」

不意に、妹の悲しそうな表情が視界をふさぐ。

「今日一日、お姉ちゃん。楽しそうだけど寂しそうだった。なんで？」

気づかれてたのか……。

ほんと、アタシってば演技が下手だなあ。

軽く笑う。

「みんなが居ても、楽しくても。ここは、現実の世界じゃないから」

「……帰っちゃうの？ 帰っちゃったらもう……」

「いや、いつでも会える」

アタシは妹の頭を軽く撫でて微笑む。

「例え見えなくても触れられなくても、ももも、お父さんも、お母さんも、

ずっとアタシのここに生き続けてるんだ。だから、ずっと一緒だ」
自分の胸を軽く叩いて言う。

「……じゃあ、私のお姉ちゃんへの想いとともに」

妹が、真紅に輝く腕輪を差し出す。

グングニール……。

「頑張つてね、お姉ちゃん」

そんな妹の言葉を残し、

周りの景色、そして妹が消え、
真っ白な空間に来ていた。

「ありがとう、もも。大好きだよ、大切なアタシの妹」
アタシはそう呟き、

「行こっか。グングニール」

<はい、私はどこまでも、貴女についていきます。

貴女の妹の想いが、私にはあるのだから>

そんなグングニールの言葉に苦笑して、バリアジャケットへ着替える。

「打ち抜いて外に出るよ!」

<はい!>

「良い夢をありがとな!」

巨大化した真紅の槍を全力で、白い空間に突き刺す。

——そして。

白い空間が碎けて、消えた。

第27話 『伝えたかった想い』

「——か」

あれ？

「——やか、さやか」

?!

体を揺すられて、目を覚ます。

寝てた？

「さやか、そんなにつまんなかった？」

恭介？

隣で私を揺すっていたのは、

幼馴染の上条恭介。

目の前には、大きい画面に映し出されたTHE ENDの文字。

ああ、映画か。

私はため息をつく彼に微笑む。

「少し、寝不足だったんだよ」

「え？ じゃあ、無理せず帰る？」

「ううん、今日が楽しみで寝られなかったんだから、帰ったらもつたいないよ」

私はそう言って、席を立って出口を目指す。

「あつついねえ……」

まるでサウナみたいだよな。と、恭介が付け足す。

外に出ると、まだ、6月に入っただけだというのに、太陽が神々しく輝き、

私達の水分を奪っていく。

「で、どうする？ このあと」

後ろでパタパタと仰ぐ恭介の声が耳に届く。

「とりあえず、食事でも」

私はそう言って、恭介の腕を掴んでレストランへと向かう。

「恭介、映画面白かった？」

「ん、まあまあ。かな」

苦笑する恭介を視界に収めつつ、ストローを加えて息を吹き込み、飲み物の音を鳴らす。

「……私、ラブストって嫌いなんだよね」

「え？」

そつと呟いた私の声は、

飲み物で冷やされたせい……

そんなわけでもなく冷たかった。

「主人公の初恋って、ほぼ必ず成功するじゃない？

そんなわけじゃないじゃんって思うんだよね」

「そうかな」

「そうだよ」

私は意地悪く、微笑む。

食事を終えて店を出ると、幾分か涼しく感じた。

空模様は相変わらずなのに、

なんでか、涼しい。

「ねえ、恭介」

「ん？」

「恭介の家に、行こうよ」

私は有無を言わせず、腕を組んで言う。

「流石に炎天下を耐え抜く体力は、僕にはないからな」

そう苦笑しつつ、恭介は私と並んで、

自分の家に私を誘導していく。

組まれた腕は解け、いつの間にか恋人つなぎに変わっていた。

「ねえ、恭介」

「ん？」

「……なんでもない」

私は俯きながら、恭介に続く。

「家にきたは良いけど。何するんだ？」

「恭介の、演奏が聞きたいな」

私は恭介のバイオリンを差し出して答える。

「いつも聞いているじゃないか」

「そうだね」

私はさらっと流す。

もう、ずいぶんと聞いてないよ。
なんて言葉はのどの奥へとかき消す。

「じゃあ——」

恭介がそこから無言になって、
バイオリンを弾く。

課題曲だからと、必死に練習していたアヴェ・マリア。
風に乗るように、滑らかに。

その音が生み出され、私の元に流れてくる。

時折聞こえる風鈴の音が、それをより一層感じさせてくれた。

「ふう……どうだ——さやか？」

「へっ？」

「僕の曲、笑い泣くほど下手？」
そういわれて、

私は微笑んだまま泣いている事に気がついた。

「ううん。下手じゃない。上手だよ。とっても」

曲が終ったことすら名残惜しむほどに。

「じゃあ——」

「ねえ、恭介。私ね、恭介にずっと言いたいことがあったんだ」

私は涙を拭いて、俯く。

「なにを？」

「ずっと、ずっとね？　好きだったんだ。恭介のことが」

私は微笑んで言う。

ずっと押し殺してきた言葉。

親友の為に、捨てた言葉。

それを、伝えたかった相手に投げ込む。

「……」

「幼馴染だからって、なんだか変な意地張って、私は恭介への気持ちを隠してた、でも。」

もう良い。もう良いんだよ。恭介」

「……さやか」

恭介の心配そうな声が耳に響く。

「好き、好きだよ？ 恭介。」

でも、でもね、それはもう、昔のことなんだ。私は、もう。他に見つかったんだ。恋することよりも大切なことが」

「なに？」

恭介の質問に俯いていた顔を上げて、微笑む。

「魔法少女だよ」

「そっか」

「驚かないんだ」

「まあね、こういう時のさやかは、冗談言わないからそんな言葉に少し寂しさを覚える。」

「ならさ、行くんだろ？ みんなのところに」

恭介の言葉に頷く。

「じゃあ、これ。持って行けよ」

「え？ あ……」

恭介が持っていたバイオリンは、いつの間にか青い腕輪へと変わっていた。

「さやかが大切だって言うんなら、それは本当に大切なことだと思う。」

どんなに苦しくても、頑張っていくってことなんだろう？」

「うん。そうだよ。がんばるって決めたことだから」

私は恭介の差し出した腕輪を掴んで言う。

「行って来いよさやか。頑張って来い！」

そして、世界はいつの間にか真っ白になっていた。

恭介に伝えられなかったこと、

押しつぶしてきた私の想い。

もう伝えた、もう後悔なんてない。

だから、こんな世界に閉じこもってる必要なんてない。

「エクスカリバー！」

<了解>

私は相棒の名を呼び、青いバリアジャケットに着替える。

「ここに未練も、何もない。だから、待っている人が居る世界に帰ろう！」

<解りました>

双剣をくつつけて、一本の剣へと変える。

「ファントム・ブレイバー……」

白い空間に一閃を入れると、空間が避けて光に包まれた。

第28話 『リインフォース』

……。

私は車椅子に座ったまま、黒い空間に居た。

「主、眠っていてください」

「……」

誰？

ぼやけた視界は、徐々になれていき、私の視界には銀髪の女の人がいた。

シグナム達に初めて会った時、

シグナム達が着ていた服。

それに似ていると、すぐに解った。

その女の人は私に微笑む。

「そのままお休みを我が主。貴女のお望みは、私が全て叶えます」
……。

「そのまま目を閉じて心安らかな眠りを」

……。

「私は、何を望んでたんやっけ？」

「夢を見ること」

「悲しい現実には、全て夢となる。心安かな眠りを」

それが私の望み？

そうなんか？

「私の、本当の望みは……」

私の、望み。

「私がほしかった幸せ？」

「健康な体、愛するものたちとのずっと続いてく暮らし」

……。

「眠ってください。そうすれば、貴女はずっとそんな世界に居られます」

目の前の女性が微笑む。

違う。

違う。

「せやけど、それは夢や」

「私、こんな望んでない、貴女も同じはずや、違うか？」
私は、目の前の女性に尋ねる。

「私の心は、騎士達の感情と深くリンクしています」
悲しそうに、女性が答える。

「だから、私は騎士達と同じくらい、貴女がいとおしい」
みんな……。

「だからこそ、貴女を殺してしまう自分自身が許せない」
殺す……？

「抗えない程強い力によって……」

「私でも？」

「え？」

私は。

「私は、その抗えない力。夜天の書の主や」

それでも、無理なんか？

「……無理です。闇の書……夜天の書は、

過去のマスターにより改変されてしまいました」

それなら、

過去のマスターが悪い方へ改変したって言うのなら。

「私が、それを改変したる」

「無理です、これは根本から——」

「私も主なんや！」

「ですが……」

やれる、できる。

できなきゃいけへん。

「私が、名前をあげる。もう、呪いの魔道書だとか、闇の書だとか呼ばせへん」

「無理です、自動制御プログラムが——？」

私は、目の前の女性の頬を優しく掴む。

「無理じゃあらへん」

外の管理局の方！！

私が、外へ念話を飛ばす。

私は、そこに居る子の保護者、八神はやてです！

はやて？！

この声？！

ほむらちゃん？！

ええ、私よ。暁美ほむら

ほむらちゃん……。

ほむらちゃん、なんとかしてこの子を止めてあげてくれへん？
なんとか、自動制御プログラムからは切り離れたんやけど、
それが動いてて、管理者権限が使える

……解ったわ、任せなさい
頼むで

これでもう、平気や。

ほむらちゃんは頼りになる人や。
せやから。

「夜天の主の名において、汝に新たな名前を与える。
強く支える者、幸運の追い風、祝福のエール、
リインフォース」

私がそう囁くと同時に、世界が真っ黒な世界から真っ白な世界へと
変わった。

第29話 『アリシアとフェイト』

私が目を覚ますと、

隣では自分と似た、いや。

もう1人の私が、隣で寝ていた。

周りを見渡して……。

ここは……。

そう考えていると、

部屋のドアが叩かれた。

「フェイト、アリシア、アルフ。起きていますか？」

?!

この声……。

扉が開き、入ってきたのはリニスだった。

……リニス。

リニスが……。

「また夜更かししていたのですか？」

「ちよつとただだよ、ねえ？」

「ねえ」

アリシアとアルフが小さく笑う。

「まったく、早寝早起きのフェイトを見習ってください」
リニスが困ったように言う。

「リ……ニス？」

「なんですか？」

「アリシア？」

「ん？」

みんなが、いる。

この、この家に、民が居る。

「前言撤回です。どうやらフェイトもお寝坊さんのようです」

リニスの言葉に続き、

アリシアとアルフの苦笑が混ざる。

でも、でも。これは。

「さあ、食堂でプレシアが待っていますよ」

え？

プレシア？

母さん？

リニスの口から出た衝撃の一言。

母さんが……いる？

私達は着替えて食堂へと向かった。

「母さん？」

本当に？

本当に母さんだ。

「なあに？ フェイト」

母さんが私に微笑む。

……私が。

私が求めてきた日常だ……。

あまりの嬉しさに、我慢していた涙がこぼれる。
「フェイト？ どうしたの？」

母さんの手が、私の元に伸びる。

「プレシア、どうやら怖い夢でも見たらしくて」
リニスが私の横で心配そうに囁く。

「大丈夫よ、フェイト。お母さんも、リニスも、
アリシアも、ずっと傍に居るわ」

「プレシア〜。私も〜」

「そうね、アルフも一緒よ」

「……うん」

私とアリシアは、

お昼ごはんを食べた後、大きな木の下で涼んでいた。

「あれ？ 雨降りそうだよ。フェイト、帰らないの？」

「うん、もう少しここに居る」

私がそう言うと、

アリシアも同意して、私の隣に座り込む。

「ねえ、アリシア」

「なあに？」

……。

これを言えば、終ってしまふ。

じゃあ、言うな。

でも、私は。

「これって、夢なんだよね？」

私の問いに、アリシアが頷く。

「アリシアがいたら、私はいないし、

母さんだって、私に微笑んではくれない。

あんなに優しくはなかった」

「優しくあったんだよ。だから、壊れちゃった」

アリシアが辛そうに言う。

……。

「ずっとここにしようよ。」

そうすれば、私はここで生きていける。

お母さんも、リニスもフェイトもアルフも……みんなでここにいら
れる」

アリシアが、私の手を握る。

でも。

そう。でも。

「私は行かなきゃいけない。

ごめんね、アリシア……」

「そっか……」

アリシアは残念そうに言うと、
バルディッシュを私に差し出した。

私はそれを受け取って、アリシアを抱き寄せる。

「ありがとう、アリシア」

「いいよ……わたしはフェイトのお姉さんだもん……
待ってるんでしょ？ 優しくて、強い子達が……」

「うん」

「じゃあ、いつてらっしやい、フェイト。

現実でも……こんなふうになっていたな」

「うん、行ってきます。アリシア」

そして、私はいつの間にか、あの要塞の中心に居た。

「バルディッシュ。ザンバーフォーム」

<イエス・サー>

「疾風・迅雷。スプライト・ザンバー！！」

私の、黄色い刃が、空間を、切り裂いた。

第30話 『方法』

外の管理局の方!!

戦闘していると、

頭に、声が響いた。

この声って……

私は、そこに居る子の保護者、八神はやてです!

はやて?!

ほむらちゃん?!

やっぱり、はやて……

ええ、私よ。暁美ほむら

ほむらちゃん、なんとかしてこの子を止めてあげてくれへん?

なんとか、自動制御プログラムからは切り離れたんやけど、

それが動いてて、管理者権限が使える

……解ったわ、任せなさい

頼むで

そこで念話が切れる。

「さて、どうしたものか。って感じね」

<安請け合いも良いところですよ>

「にやははは。でも、ほむらちゃん。何とかしようよ」

「ええ」

闇の書は、はやてがなにかしているのか、

動きが少しぎこちない。

ほむら、なのは、まどか、マミ、織莉子。聞こえる?!

ユーノ?!

やっときたわね?

簡単に言うから、今から言うことを良く聞いて助ける方法ね。

目の前の子を、魔力ダメージでぶっ飛ばして! 全力全開、手加減無しで!!

さすがユーノくん。解りやすい!

いやいや、解りやすいも何もないでしょ

では、やりましょうか。ホムラ、ナノハ、オリコ、マミ、マドカ

私はいつでも良いですよ!

ええ、私もokよ

あれ? マミ。貴女どこにいるの?

鹿目さんたちと合流したわ

私も良いわよ

織莉子が言う。

それじゃあ、行くわよ!!

そして、念話を切る。

「デザインアー、バスターモード!」

<了解。中距離砲撃モード。システムexチャージ起動。バレル展開>

「レイジングハート!」

<了解。中距離砲撃モード。バレル展開>

「アヴァロン！」

<はい、遠距離砲撃。バレル展開。システムCSS>
「ティロ！」

<了解です、マイスターマミ。遠距離砲撃モード！>
「ディザスター。いけるわよね？」

<もちろんです。狙撃砲撃モード。展開>

「イクス・バスターフルパワー！！」
私が、

「エクセリオン・バスター！！」

なのはが、

「ブレイク・アロー！！」

まどかが、

「ティロ・フォナーレ！！」

マミが、

「エンシエント・ノヴァ！！」

織莉子が。

私達全員の全力全開の一撃が、闇の書に直撃した。
そして……。

「ふう、出れた出れた」

「外の空気ってヤツだな」

「織莉子ただいまあああああ！！」

「みんな、戻ってきたよ」

フェイトが微笑む。

さやか、フェイト、杏子、キリカ。

みんな、戻ってきた。

「みんな!!」

その声に振り向くと、ユーノと、アルフが居た。

「ユーノ。で、このあと――」

くん？ みなさん、どうやら、私達の目的は遂げられたようですよ？>

「え？」

デイズァイアーの言葉に驚きながらも、闇の書の方を見ると、騎士甲冑に身を包んだはやてが佇んでいた。

「はやて!!」

「ほむらちゃん。ほんまにありがとうなあ。ちょお、待ってて」
はやてがそう言い、

足元に、魔法陣が描かれ、

はやての周りに、4人現れた。

「我ら、夜天の主のもとに集いし騎士」
シグナム？

「主ある限り、我らの魂尽きることなし」
シャマル？

「この身に命ある限り、我らは御身のもとにあり」
ザフィーラ？

「我らの主、夜天の王、八神はやての名のもとに」
ヴィータ？

「みんな、お帰り」
はやてが微笑む。

「は、はやてえー!」

「おーよしよし、泣くんやない」

「……シグナム。帰ってきたのね」

「ああ、ほむら。礼を言おう」

「お礼なんて……」

私はただ、したいことをしただけよ」

私達は、再会を喜んで笑う。

しかし……。

「アアアアアアア……」

眼下で叫び声を上げる、

様々なものが混ざった化け物ともいえる敵。

闇の書。

闇の書の防衛プログラム。

「で、どうするのよ?」

織莉子が聞く。

どうするって……。

「方法は二つある」

え?

「あつ、クロノくん」

「2つ? その方法って?」

まどか達を引き連れて来たクロノにたずねる。

そして、クロノがその方法を説明しようと、口を開いた。

第31話 『さあ、全力全開でぶっ飛ばすわよ!』

「1つは、強力な氷結魔法で凍らせる。

2つ目は、アルカンシエルでコアごと破壊する」

氷結魔法と、アルカンシエル……。

「氷結魔法は難しいかと」

「え？　なんで？」

シヤマルにまどかが尋ねる。

「あれは、魔力の塊なのよ。だから、塞ぎ切れないだろうし……」

「コアが無事ならば無限に再生してしまう」

マミの言葉にシグナムが付け足して答える。

「アルカンシエルは許可できないかと。」

海鳴市を吹き飛ばすことになる>

「そんなに凄いものなんですか？」

「発動地点を中心に百数十キロの空間を歪曲させて反応消滅を起こさせる魔道砲って言うって解るかな」

確かに、そんなのは許可できないわね。
でも。

どうすればいいのかしら。

「あのさあ、ぶっ飛ばすわけにはいかないわけ？　アタシらで」

「そうそう。私達はワルプルギスだってぶっ飛ばせたんだしさ」

「それはそうなんだが……」

杏子とさやかがめんどくさそうに言う。

「みんなでぶっ飛ばす?」

「せやけど、ここで使ったら被害が大きいだろっし」

「あのさ! 宇宙空間にぶっ飛ばしてアルカンシエルで消滅とか出来ない?」

「デイ、デイズァー?!」

「でも。」

「もしかしてそれなら!」

「クロノ。できるの?!」

「へもっちろん!! 管理局の技術力を舐めてもらっちゃ困りますねえ」

「エイミイの声が響く。
なら。」

「みんなで、アレをぶっ飛ばしましょう」

「あれは、魔力と物理の複合四層式や」

「じゃあ、それをアタシらでぶち抜いて」

「本体を全力全開でぶっ飛ばして」

「露出したコアをユーノ達が軌道上へ運んでアルカンシエル」

「「「「完璧!!!!」」」」」

「そんなわけあるか! かなり分が悪い賭けだ」

「まあ、そうだけど。」

「でもさあ? はなっから諦めるってそんなばかげたこと。」

「死んでもしたくないじゃない。でしょ? 暁美ほむら」

「織莉子が私に微笑む。」

「あら、はやてのことですら、諦めてた貴女が言う台詞かしら?」

「煩いわよ」

「さあ、全力全開でぶっ飛ばすわよ!!」

第32話 『終結』

「えっと、極普通の魔法少女、鹿目まどかと、その愛機アヴァロン
！！」

＜はい、まどか＞

「私達の理想を守る為に」

＜バリアブル・アロー＞

「その変化は、巨大な剣。結界を射抜く剣！」

まどかが放ったピンク色の矢が、
形を変えて巨大な剣へと変わり、闇の書の防御結界の1枚目を撃ち
砕く。

「続くわよ。黄花の魔法少女。バマミと、絶望撃ちぬく砲台ティロ
！！」

＜はい、マイスターマミ！！＞

「撃ち貫け、閃光！」

＜フォトン・ブレイズ・キャノン！！＞

黄金に輝くマスケット銃に形を変えたティロから、
極太のビームが放たれ、

2枚目の防御結界も撃ち砕いた。

「織莉子への愛は人数千倍いや、それ以上。

恋する魔法少女、呉キリカとその相棒クラッシャー！！」

＜さあ、始めましょう＞

「そんな柔な結界、撃ち砕いてみせる！！」

<ギガンティック・クラッシュ・クロー>
巨大化したキリカの爪。

それを勢い良く、闇の書へと振り下ろす。
音を立てて、3枚目の防御結界が砕け散る。

「ラスト、なのは!!」

「うん!!」

私の声に、なのはが微笑む。

「高町なのはと、レイジングハート!!」

<イエス・マスター>

「撃ち抜くよ!!」

<デイベイン——>

「——バスタアアアア!!」

そして、4枚全ての防御結界が吹き飛ぶ。

「じゃあ、全力全開やろうぜ!!」

「まってましたあ!!」

杏子とさやかが笑って言う。

どれだけ楽しみにしてたのよ。
つというか。

「緊張感なさ過ぎるわよ」

<良いんじゃないでしょうか>

<それは、私の台詞です>

<良いんじゃないでしょうか>

<……>

ああああもう!!

「レイジングハートをからかってないで、決めるわよ」

<了解です>

「全力全開！！ スターライトオオオオ」

「いくぞお！ グングニール！ ブラストル・スピアー！！」

「私達も、エクスカリバー！！ セイント・クロス！！」

「撃ち抜け、雷神！ ジェット・ザンバー！！」

「大いなる闇に、大いなる災厄を！！ デイザストレイド！！」

「ごめんなあ。お休みなあ…… ラグナロク！！」
はやて……。

<さあ、ホムラ、ご命令を>

「ええ、撃ち出す一撃は、メテオ。撃ち碎け。メテオ・ストライク
！！」

「「「「「ブレイカー！！！！」」」」」」

私達7人の一斉砲火が、闇の書に直撃する。

「シャマルさん！！」

マミが、叫ぶ。

「ええ！！ 防衛プログラムのコア……捕まえ……た！！」
シャマルの空間捕獲。

そして、

「「転送します！！」」

アルフとユーノが叫ぶ。

「了解！！」

あとは、アルカンシエル……。過去の主たちの痛み苦しみ絶望、欲望。全ての塊……。

闇の書の暗い歴史に終止符を。

「エイミィー!!」

「おっまかせを!! 艦長!!」

「ファイアリングロック解除。アルカンシエル。チャージ……」
リンディ艦長の声が響く。

そして、闇の書のコアが軌道上に到達した。

「チャージ完了です!!」

「アルカンシエル……てーっ!!」

艦長の声と共に放たれたそれは、

闇の書のコアを、塵1つ残さず、消滅させた。

「……終ったん……やな」

?!

「はやて!!」

倒れそうになったはやてをヴィータが支える。

「きつといきなりの魔法行使に疲れたんだろう。」

「すぐに目を覚ますはずだ」

クロノが言う。

「じゃあ、家に、連れて行きましょう」

私が言い、私と、シグナム達4人、

織莉子、キリカ、なのは、フェイトで、はやての家へ、

他のみんなは、報告等の為に、アースラへと戻っていった。

第33話 『お別れ』

闇の書の事件は昨日終結した。

仮面の男達は、私は会っていないものの、

グレアム提督という人の使い魔が変装していただけらしい。

それらは昨日、

闇の書との戦闘終了後、まどか達が話していた内容。
で、それは今は関係ない。

「本当に良いの？ リインフォース」

私達は、はやてを家に残し、

リインフォースの頼みで丘の上へと来ていた。

「……ええ。それ以外に道はないので」

道はない。か。

時間があるのなら、私はそれ以外の道を見つけてあげたいのだけ
れど。

＜リインフォース。貴女の主は素晴らしい名を与えてくれた。貴女
はそれを誇る。

自分を認めてくれた主、自分の為に新たな名をくれた主ハヤテを＞

「ああ。解っている。最高の主だ」

「送還するわよ。暁美ほむら、リインフォース」

織莉子が少し辛そうに言う。

「すまないな、織莉子」

「……気にしないで。もう良いわよ。これであの悲劇が繰り返される
ことがなくなるのだから」

織莉子がそう言って微笑む。

「リインフォースさん……あの……」

「我が主をよろしくお願いします」

言葉に詰まったなのはにリインフォースが微笑んだ。

<では、リインフォース。貴女の願いは我が内に>

ディザイアーが言い、

<では。お休みなさい>

ディザスターが言い、

<良いたびを>

レイジングハートが言い、

<グッド・ラック>

バルディッシュが言う。

「ああ、ありが——」

「待つて!!」

リインフォースの言葉を遮って、

はやての声が聞こえた。

「待つんや!!」

「はやて……」

「きゃあっ?!」

車椅子で走ってきた為、

タイヤが石か何かでバランスを崩し、

はやてがリインフォースの前で転ぶ。

「はや——」

「動くな。儀式が中断されてしまう」

リインフォースが助けようとしたヴィータを止め、
はやての前に屈み込む。

「なんで、なんでなん？」

「主はやて……」

「これから、これから幸せにしてあげなあかんの……」

絶対に口出ししないでねディザイアー

解っています。そこまで私も馬鹿じゃありませんから

いやいや、今までどれだけ貴女がこういう空気を壊してきたか……。

「私は、この名前を頂けた。いえ、

永遠の暗黒から救い出して頂けただけで、十分幸せです」

「そんなこと……」

「主はやて。私が消えた後、形あるものとして、

クロスペンダントを残します。どうか、

我が名リインフォースは貴女がいずれ受け取るだろうパートナーに
リインフォースはそう微笑み、

また元の位置に戻る。

「リインフォース……」

はやての小さな呟きが、あたりに響いた。

「では、よろしく頼む」

「じゃあね、リインフォース」

「良い旅を」

私達はそう言っで、儀式を終えてリインフォースを送る。

そして、空から金と黒に装飾されたペンダントが、
はやての手の中に落ちた。

「はやて……」

「ほむら……ちゃん」

「リインフォースは幸せだった。その言葉に嘘はないはずよ。
最後、笑顔になった彼女は自他共に認められる幸せだと思う」

「そう……やな」

はやてたちが家に戻っていく中、

私と、キリカ、織莉子はその丘に残っていた。

最終話 『未来へ』

「これから、どうするの？」

私は、2人とベンチに座って尋ねる。

「どうするもこうするも、私にはないわよ。」

私はしたいこと、全て終えたから」

織莉子が少しだけ嬉しそうに言う。

「私は、織莉子にずっとついて行くつもりだよ」

「あら、それは嬉しいけれど、賄えないわよ？」

「バイトくらいはするよ」

「ねえ、管理局に——」

「それはお断りさせて頂くわ」

「どうして？ 貴女達は強い、そして、はやてたちを——」

「ただの気まぐれよ」

私の言葉を遮る織莉子の声は少しだけ寂しく感じられた。
どうして、そこまで嫌がるのかしら……。

「本当に気まぐれ？」

「ええ、そうよ」

「……ねえ、織莉子。もう話しても良いと思うよ」
「話すことなんてないわよ」

「織莉子は見滝原に帰るのかしら？」

「ええ」

「ねえ、織莉子」

「なによ」

「貴女の、フルネームは？」

不意に、自分の口から出たそんな言葉。

何で気になったか、自分でも解らなかった。

「知っても仕方のないことよ？」

「それでも知りたいわ」

「そう、じゃあ。教えてあげるわ」

織莉子は自分の白い髪をフアサッと靡かせて、微笑む。

「美国。美国織莉子よ。じゃあね。曉美ほむら。」

機会があれば、いつかまた会いましょう？」

「えっ？　ちよっ——」

「楽しかったよ。ばいばい。見滝原でなら会えるかもね」

そう言い残し、2人は転移魔法で消えていった。

美国。

彼女は確かにそう言った。

＜彼女がなぜ、闇の書を止めようとしたか。

これで謎が解けましたね＞

「そうね」

父親を死なせた闇の書。

彼女は最後の最後を見送った。

＜管理局に來ないのも、父親が居たからか、それとも、父親を助けられなかった管理局への苛立ち……か＞
どちらにしろ。

「考えても仕方のないことよ。

彼女はもう、向こうに帰ってしまったのだから」

<そうですね>

でも。

心から感謝させて貰うわ。

魔法少女狩りは許せないけれど、

結局は魔力を奪って弱らせるだけで、

キリカが言った殺すというのはその表現だった。

魔女狩りについては、犯人不明。

それで終らせようかしらね。

貴女達が居たから、はやてを助けられた。

リンフォースを幸せのまま逝かせる事が出来た。

「有難う、美国織莉子。呉キリカ」

私はそう呟いて、その丘を後にする。

いつの間にか降ってきていた雪は、

私の足跡、彼女達の足跡を覆い尽くす。

私が帰る道にはなのはたちの足跡。

私はそれを踏んで、道を進んでいく。

それはまるで、過去をふみ、進んでいく未来を描いているかのように
だった……。

「これからも、頑張らないとね」

<そうですね、ホムラ>

私達はこれからも魔法を使う者であり続ける。

人を、誰かを、何かを守る為に、

——私達は、魔法少女であり続ける。これからも、ずっと。

番外編 『作文にしたらどれほど長いものになるのかしらね』

「へえ、じゃあ、あそこに居たのはみ〜んな。魔法少女だったってこと?」

「う、うん」

闇の書事件が終結し、

見滝原のみんなは戻っていった。

私も帰ろうかと思ったけれど、アリサ達に「昨日のことを説明する為に残って、

今現在説明を終えたばかり。

「別に、見たものがあれだし……信じないわけにも。ねえ……」

「じゃあ、あの数ヶ月前の時から? ずっと?」

すずかの質問に言葉が続かず、

私達は頷いて答えた。

「でも。みんなぶじなんだし、良いじゃない。

はやても退院できるんですよ?」

「え? ああ。そうやで。すぐにできる」

すずかとはやては、私が会うより先に知り合いになっていたらしい。図書館で会ったとか。

今ここには、

フェイト、なのは、私、はやて、すずか、アリサ。

この6人が居た。

いつのまにか、

一昨日の話は終わっていて、

私達は今後について話していた。

「はやては退院したら学校とかどうするの？」

「せやなあ、1、2ヶ月したら歩けるようになるし。

来年からお世話になるかもしれへんよ」

「じゃあ、私達のところ？」

「そうかも」

すずかの嬉しそうな問いに、

はやてが頷く。

「同じクラスになれるといいな」

「あら、案外可能性があるんじゃないかしら」

「え？」

「貴女達が、願うなら。だけど」

私がそう言って苦笑すると、

みんなも笑う。

2日前まで、この街が消滅の危機にあったことすら、
忘れてしまっくらいに、平和だった。

何でここに貴女がいるか、私は不思議ですよ
なによ。デイザイアー

いや、小学生の中に中学生が居るって言うのが割りとシニールか
なっ

そう？

「ほむらさんは、どうするんですか？ 来年」
へ？

不意な質問に、私は言葉が詰まる。

来年。

ああ。

もう、来年なのか。

今年が終る。

あの永遠の一ヶ月が遠い過去になる。

私は思わず、微笑んでしまった。

「ど、どうかしたんですか？」

「いいえ、そういえば、来年は受験があるのよね」

って、マミは今年じゃない……。

良いの……かしら。

「中学生つかあ。はやくなりたい」

アリサが叫ぶ。

中学生に早くなりたい？

「どうして？」

「え？ ほむらちゃん。中学生は大人な感じがするんですよ。

特に、ほむらちゃんを見てると」

なのはが微笑む。

私が大人な感じに？

「いやいや、ほむらちゃんは一——」

「それ以上言う気なら、天にも昇る思いをさせてあげる」

「?!」

はやてを睨みつけると、

いや、なんでもないんよ。

と、誤魔化したように笑った。

その後は、私達は普通に談笑をして、アリサ、すずかと別れ、

はやてを家に帰し、公園に来ていた。

「ふう、今年も終わりかあ。色々あったねえ」

なのはがふとそんな事を言い、地面に倒れこむ。

「そうだね、なのは」

フェイトが微笑む。

今年は、

いろいろなことがつまりに詰まった1年だった。

まどか達との出会い、

長い長い、ループ、

なのは達との出会い、

フェイトとの戦い、

ワルプルギスの夜との戦い、

はやてとの出会い、

織莉子達との出会い、

闇の書との戦い。

言葉に、

作文にしたらどれほど長いものになるのかしらね。

「本当に、色々ありすぎたわね」

<そうですね>

「ほむらちゃんは、管理局に正式に入ったりはしないんですか？」

「……どうかしら。まだ解らないわ。みんなと話してから、決めることにする」

私はそう言って、ベンチから立ち上がる。

<貴女が、みんなと話して決める。ですか。明日は人生ゲームでも

ふるのでは？>

……は？

「な、なんで人生ゲーム？」

フェイトが不思議そうに聞く。

「貴女は、そんなに碎かれないわけね？」

< いやだなあ、冗談に決まってるじゃないですか >
公園に私達の笑い声が響いた。

「平和ですね」

「うん。この平和な世界を、私達は守っていかないとね」

「ええ、そうね」

私の声は、青い空へとけていった——……

番外編 『作文にしたらどれほど長いものになるのかしらね』（後書き）

ここで終了です。

長い長いご愛読ありがとうございました。

感想等いただけるとありがたいです。主にうp主ではなく、作者が。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5211v/>

ほむら「魔法少女？」なのは「うん、魔法少女」

2011年10月5日00時59分発行